

第六章 太平洋戦争開戦

第一節 日米交渉

ハル四原則と日米諒解案

昭和十六（一九四一）年の夏に、日本は対ソ戦を回避して南進政策を遂行することを決定した。だが、いざ南進を遂行するにあたり、最大の障害となるアメリカと事前に交渉しておく必要があった。すでに北部仏印進駐によってアメリカとの関係は著しく悪化していたため、これ以上の関係悪化は避けねばならなかったのである。

松岡外相はルーズベルト大統領と親交のある野村吉三郎（予備役海軍大將）を駐米大使に起用し、新たに日米交渉を行なおうと意図していた。だが、松岡が日本を離れていた際に、近衛文麿首相の指示で事務レベル協議で作成された「日米諒解案」をもとに交渉が進められていたのである。同案の内容は、三国同盟の目的は防衛的なものであるとしたうえで、中国の日本軍の撤退と中国の独立の承認、非併合・非賠償、蒋介石・汪政権の合流、満州国承認を条件として米国が蒋介石に和平を勧告、そして日本の南進は平和的手段によって行なう、といったものだった。

四月十六日、野村大使はハル國務長官との会談の席で日米諒解案を提示した。それに対しハルは、あらゆる国家の領土保全と主権尊重、内政干渉、通商機会均等、太平洋の現状不変更の四原則を日本が遵守することを求め、その上で日本が同案を正式に承認し提案してきたなら、それを会談開始の「基礎」としてもいい、と返答したのである。

近衛は野村大使からの報告をうけて、アメリカが日米諒解案を認めたと判断し、さっそく日米交渉を開始しようとした。しかし、帰国した松岡は、

同案は独伊に対する背信行為であるとして強く反対したのである。松岡は対米交渉の打ち切りを主張し、しかも自らがまとめた日ソ中立条約を無視して対ソ参戦、場合によっては米国との戦争もやむなしとまで主張したのだった。日米交渉の妥結を目指す近衛にとって、日米諒解案を認めず、あるうにか日米交渉打ち切りを主張する外相は邪魔な存在でしかなかった。そのため七月十六日、近衛は内閣総辞職を断行した。日米交渉を進展させるために新たに内閣を組閣し、日米交渉推進派の豊田貞次郎（予備役海軍大將）を新外相に据えたのである。

だが、近衛は日米交渉について一つ大きな誤解をしていた。なぜなら米国は日米諒解案をもとに日米交渉を開始すると認めたのではなく、あくまで、日本が同案を正式に認めたらうで、日米交渉を開始することを検討すると述べたに過ぎなかったからである。

南部仏印進駐と対日石油全面禁輸

こうして日米交渉に乗り出した近衛であったが、彼本来の政治的立場は、三国同盟・新体制・南進政策の是認という、あくまで保守的なものであった。しかしその結果日米戦争の危機を招来したため、従来の立場を変更してでも戦争回避を試みたのである。すなわち近衛は、松岡更迭というカードを切ることで、日本の意思が日米交渉の成立にあるというサインを米国に示したつもりだったのである。だが、結果として松岡の更迭は近衛が考えたほどの効果をもたらさなかった。それは一つには、近衛の行動が先述した誤解に基づくものであったこともあるが、なにより近衛自身が米国の行動を極めて楽観的に捉えていたことにあった。

それをはっきり示すものが、南部仏印進駐という、対米関係にとって極めて重大な結果を及ぼすであろう計画に、近衛があっけなく賛成したことである。もともと米国は、新内閣が大きな政策転換を行なうという期待を

持っていなかった。そして南進が実際に実行されたことで、七月二十五日、アメリカは日本の在米資産の凍結を発表した（イギリス・オランダも同様の措置を執った）。在外資産の凍結によって日本は外国物資の買い付けが出来なくなった。そして八月一日、ついに米国は日本に対する石油の輸出を全面禁止を宣言したのである。こうした事態に至ったことについて、のちに近衛はあれこれ弁明しているが、要するに南進によってこうした事態が生じることを全く予想していなかったというよりない。

こうした状況のなか、近衛首相は、日米交渉の最後の活路をルーズベルト大統領との直接会談に求めた。これに対し、及川古志郎海軍大臣はただちに賛成し、東條英機陸軍大臣は不成功に終わった場合は断固一戦する決意で臨むなら異議は唱えないと回答した。天皇も近衛の意見に賛成し、早期の実行を促している。野村大使は近衛の意思を米国に伝えるが、あいまいな回答しか返ってこなかった。このときルーズベルトと、チャーチル英首相は大西洋上で会談を行なっていたためである。

八月十四日、太平洋憲章と呼ばれる共同宣言が全世界に向けて公表された。反膨張主義、反ファシズムの理念を表明したもので、日本が隣接諸国の軍事支配行動を続ける場合、必要と認める一切の手段を講じる、とした警告を含む内容であった。

九月三日に至り、ようやく米国から近衛の申し入れに対する正式な回答がなされた。だがその内容は、首脳会談に趣旨としては賛成だが、その前にまずはハル四原則の確認を日本に求めるといった、これまでと変わらない答えであったのである。

帝国国策遂行要領

一方軍部は、石油禁輸によるジリ貧に焦り、対米英戦の決意を日に日に強めていった。すでに七月三十日、永野修身海軍軍令部総長は「油の供給

源を失うこととなれば…戦争となれば一年半にて消費しつくすこととなるをもつて、むしろこの際打って出るの他なしとの考えなり」との上奏を天皇に行なっている。陸海軍は戦争決意と戦争準備のどちらを先行させるかで対立したが、九月六日の御前会議において陸海軍の調整によって提出された「帝国国策遂行要領」が承認されたのである。

一、帝国は自存自衛を全うする為対米（英蘭）戦争を辞せざる決意の下に概ね十月下旬を目途とし戦争準備を完整す

二、帝国は右に平行して米、英に対し外交の手段を尽くして帝国の要求貫徹に努む

三、前号外交交渉に依りて十月上旬頃に至るも尚我要求を貫徹し得る目途なき場合に於ては直ちに対米（英蘭）開戦を決意す

すなわち、十月上旬ごろになっても外交交渉で要求を貫徹しうる目途が立たない場合は、ただちに開戦を決意するという内容であった。この御前会議の場で昭和天皇は、近衛に対し、戦争が主で外交が従のような印象をうけるかどうか、と質したのに対し、近衛は「政府としてはあくまで外交交渉を行う」という趣旨と答えている。

またこのとき天皇は、「四方の海みなはらからと 思ふ世に など波風の たちさわぐらむ」という明治天皇の御製を読み上げている。これは天皇が戦争回避の意思を示すためになされたものと言われている。

一方、十月二日に野村大使に手交されたハル國務長官からの覚書は、ハル四原則の確認を改めて求めるとともに、日本軍の中国・仏印からの撤退の意向を明確にするよう迫るものであった。ここで、日米交渉は完全に行き詰ったのである。

十月十二日、「帝国国策遂行要領」の定めた事実上のタイムリミットであるこの日、近衛首相、東條陸相、及川海相、豊田外相、鈴木貞一企画院

総裁による五相会議が開かれた。近衛と豊田は日米交渉の妥結を図るべきだと主張し、近衛は及川にも日米交渉継続の主張を期待していた。しかし及川は、「決は総理が判断してなすべきもの」と発言し、責任を回避する態度を取ったのである。近衛は「戦争に私は自信は無い」と述べると、東條が「戦争に自信がないとはなにか。それは国策遂行要領を決定するときに論じるべき内容で、駐兵問題については陸軍は一步も譲れない」と主張した。東條の意見によって近衛は追い込まれた。確かに自信がないというなら、御前会議の時点でそう主張すべきであったからである。矛盾を突かれた近衛は、なんとこのような重大局面で内閣を投げ出してしまったのである。

東條内閣の成立とハルノート

近衛は、後継内閣の首班として皇族内閣を考えていた。皇族によって陸軍を抑え、日米交渉を継続することを考えていたのである。しかし木戸幸一内大臣がこれに反対した。万が一戦争になった際、責任が皇室に及ぶことは避けねばならないと考えていたからである。そうして木戸が推したのが、東條陸相であった。木戸は東條が天皇に対する忠誠が厚い事を知ったうえで、天皇の意思が戦争回避にあることを東條が知れば陸軍の反対を抑えるよう努力するはずだと考えたのだった。

木戸は東條に、九月六日の御前会議決定にとらわれず、「内外の情勢をさらに深く検討し、慎重なる考究を加うることを要す」との天皇の言葉を伝え、それを了解した東條は組閣を開始した。こうして東條内閣が十月十八日に成立したのである。天皇は、木戸から「これが唯一の打開策」として東條指名を聞かされたとき、「いわゆる虎穴に入らずんば虎子を得ずということだね」と語ったとされている。

こうして東條内閣が成立し、九月六日の決定を白紙に戻した上で、日米

交渉は再開された。しかし、根本的な再検討はなされぬまま続けられた外交交渉に妥結の可能性は見えず、陸海軍は着々と戦争準備をすすめていた。

十一月一日、大本営政府連絡会議の場で東條は、以下の三案を提示した。

第一案、戦争を極力避け臥薪嘗胆する

第二案、開戦を直ちに決意し政戦略の諸施策をこの方針に集中する

第三案、戦争決意の下に作戦準備を完整すると共に、外交施策を続行してこれが妥結に努める

そして議論の結果、第三案が採択される。十二月一日午前零時までに外交交渉が妥結しなかった場合は、十二月初頭に「戦争発起」という方針が決定されたのである。そして十一月四日の御前会議において、新たに以下のような帝国国策遂行要領が決定されるに至る。

一、帝国は現下の危局を開いて自存自衛を全し大東亜の新秩序を建設する
為この際対米英蘭戦争を決意し左記措置を採る

(一) 武力発動の時期は十二月初頭と定め陸海軍は作戦準備を完整す

(二) 武力発動の時期は十二月初頭と定め陸海軍は作戦準備を完整す

二、対米交渉が十二月一日午前零時迄に成功せば武力発動を中止す

このとき対米交渉案として完全解決を目指す甲案と当面の問題解決を目指す乙案の二案が用意されていたが、いずれも米国が応諾するとは到底思えない内容だった。日本側は十一月二十日、最終案として乙案を提示し、十一月二十六日にその回答が示された。後に「ハルノート」と呼ばれるものである。その内容は、中国・仏印からの日本軍の撤退、蒋介石以外の政府を認めない(満州国・汪政権の否認)、三国同盟の否認といった一〇項目からなるもので、要するに米国は日本に「事態を満州事変以前」の状態に戻すことを要求したのである。

ハルノートを受けたとき、東郷外相は「目のくらむ思いがした」と語ったとされるが、これまでの外交交渉を白紙に戻すような提案が、つまり米国の最後通牒なのだと日本も受け止めざるを得なかった。

こうして十二月一日、御前会議の場で、対米英蘭開戦の聖断（天皇の判断）がついに下されるのである。

参考文献

江口圭一『十五年戦争小史（新版）』青木書店 一九九一年／藤原彰・栗屋憲太郎・吉田裕・山田朗『徹底検証 昭和天皇「独白録」』大月書店 一九九一年／藤原彰『昭和の歴史五 日中全面戦争（新装版）』小学館 一九九四年／吉田裕『シリーズ日本近現代史六・アジア太平洋戦争』岩波書店 二〇〇七年

第二節 戦時体制の形成

第一項 国家総動員

戦時体制のはじまりと国家総動員法

いわゆる戦時体制とは、戦争遂行のため、国家による包括的な統制体制をさす。国家による統制体制そのものは、ナチス・ドイツにおける授權法以後、あるいは共産圏における計画経済体制などがそれに類するが、日本では平時では国家統制は行なわれていなかった。その意味で日本における統制体制は、あくまで戦時における体制であり、その契機となったのが日中戦争であった。そして、その戦時体制を法的側面から確立させたのが国家総動員法であり、具体的な企画立案を行なう組織が企画院であった。

だが、日本で国家統制の研究がはじまったのは、第一次大戦まで遡る。第一次大戦は国家の全てを戦争遂行のために投じる、いわゆる「総力戦」で戦われた戦争であったからである。

大正七（一九一八）年、第一次大戦に参戦していた日本は、「軍需工業動員法」を制定している。この法律は総力戦に対応するために作られた法律であったが、あくまで戦時におけるのみ用いられる時限立法であった。また昭和二（一九二七）年には、資源局を内閣直属機関として設置している。資源局は、戦時において「総動員の統制運用を全うして軍需及び民需を充足する準備計画」の作成を主要目的としていた。つまり戦時に動員する日本の全資源（物的・人的）を、どのように運用するかを企画立案する組織であった。また特徴的なのは、資源局は陸海軍大臣の現役軍人が事務官として参加している点である。戦時期を例外として、このような軍と官が横断的な企画立案を行なう組織は他に存在しない。資源局は昭和七年には「暫定総動員期間計画綱領」、八年には満州事変に対応するため「応

急総動員計画」などを立案している。このように資源局は、戦時に対応する企画立案を行なう組織であったが、実行する権限を持たない一部局に過ぎなかったため、陸海軍そして一部の官僚は、同局の機能強化を求めている。

その好機は、十年五月、岡田啓介内閣によって内閣調査局が設置されたときに訪れた。内閣調査局とは、重要政策の調査や総理大臣から命じられた重要政策の審査などを任務とする機関として、各省の中堅若手の俊英を集めて発足した内閣直轄の組織である。内閣調査局によって生産力拡充計画等の様々な改革案が提起されていくが、次第に各省を管理できるほどの強力な権限を同局に付与していくという動きが官僚を中心に起こる。まず十二年五月、内閣調査局は企画庁として改組拡充された。ついに一部局から外庁へと格上げされたのである。そして同年七月には日中戦争が勃発したことをうけて、同年十月、企画庁は資源局と合併し、新たに企画院が誕生したのである。

企画院は「国家総動員」の中枢機関として、「生産力の拡充、需給の調節、配給の適正、国際収支の均衡を図り、依て総合国力の拡充運用に違算無きを期する」ことを主要目的としていた。そして、資源局が十一年に策定した「第二次総動員計画」と、企画庁が検討していた国家総動員法案の二つを包摂して新たに検討を重ね、十三年二月、国家総動員法が議会で提出されるに至るのである。

進む国民統制と国民精神総動員運動

企画院は、資源局の残した膨大なデータと動員計画を引き継ぎ、具体的な物資動員計画の作成に着手した。とくに戦争遂行のため、軍需物資とされる石油製品・ゴム・ボーキサイト・鉄などが必要とされたが、これらの多くは日本国内で生産出来ないものであるため、輸入で調達するより他に

無かった。だが、当時の日本はむしろ輸入が多い状態が続いていたため、物資獲得の資金が捻出できなかった。そのため政府は、輸出を増やして外貨を獲得し物資調達を図ると共に、輸入を減らすことで国際収支の均衡を図ったのである。一見すると簡単に思えることだが、自由経済の下ではそれは簡単なようで難しい。そのため政府は輸出入の統制に乗り出したのである。では、政府はどういう統制を行なったのだろうか。

例えば綿でみていこう。当時、日本にとって綿は外貨獲得のための重要品目であった。そのため政府は綿の輸出を増大させることにしたが、綿の生産量を増大させることはすぐには難しい。ではどうしたかというと、政府はもともと簡単な方法を執った。つまり綿の国内消費を抑制することで輸出増加分を賄おうとしたのである。すでに昭和十二（一九三七）年の段階で純綿・純毛製品を民需に回すことが禁止され、かわってスフや人絹との混紡製品が用いられるようになっていたが、同年六月には軍需・輸出入以外のスフ糸・綿製品の製造加工が禁止され、七月には毛製品も同様となった。さらに一時的な取引停止命令を出して、輸出可能な在庫品をすべて輸出にまわしたのである。

そして、こうした物資の製造・使用の制限、配給制への移行、価格統制は他の品目にも急速に適用されていく。その結果、ガソリン・皮革・ゴムを原料とした製品が街から姿を消していった。多くの記録や証言にあるように、戦時中の国民は物不足に悩まされていくのだが、その始まりは日中戦争勃発による国家統制の結果によるものだった。要するに、政府が大大的に掲げた統制経済の実態とは、民需（民間）にしわ寄せを及ぼすことで実現させるといって、極めて短絡的なものに過ぎなかったのである。だが当然のことながら、こうした急速な物不足は国民の不安を招いた。そのため近衛内閣はどうしたかというと、閣議で国民思想総動員運動をおこすこと

を決めたのである。

九月十一日、東京日比谷公会堂で国民精神総動員大演説会が開催された。「挙国一致、尽忠報国、堅忍持久」をスローガンとしたこの運動は、様々な運動を派生させていくが、なかでも消費節約・物資活用・資源愛護・貯蓄増額といった「非常時国民生活様式運動」は、国民精神総動員運動の重要な一環であった。つまり国民精神総動員運動とは、現在の不自由な生活は戦争に勝つための耐乏生活であると呼びかけることであった。不自由な生活を美德とする価値観を植えつけ、国民を積極的に戦争協力に向わせるための「官製」運動であった。十月十二日には、早くも運動の推進組織として国民精神総動員運動中央連盟を発足させている。そしてこの団体を運動の中枢団体として、道府県単位の実行委員会を作り、思想教化、愛国公債購入、貯蓄報国、慰問活動、勤労奉仕などといった運動を行っていくのである。

その一方で、戦争批判の声を封じ込めるための治安対策、出版・言論・思想統制も、このころから急速に強化されていた。

その象徴的な事例が、全国各地で行なわれた南京陥落祝賀会である。南京陥落を祝う提灯行列は、東京では四〇万人を動員するほどの盛り上がりを見せ、国民は大勝利に酔いしれていた。だが、後に「南京大虐殺」と呼ばれる日本軍の蛮行については、メディアは一切報じなかった。南京の実情を伝える声は、厳重な出版統制のなかで「流言蜚語」としてきびしく統制されていたためである。新聞・書籍といったメディアが戦争批判の声を封じられ、いつしか、メディアは戦争を「礼賛」するだけの媒体となっていく。十二年には、欧州の人民戦線運動を紹介していた学問グループや、日中戦争に批判的な態度を取ったとして、東京帝大教授矢内原忠雄が辞職に追い込まれた。さらに日本無産党、日本労働組合全国評議会が禁止され

(第一次人民戦線事件)、十三年二月には大内兵衛、美濃部亮吉らの検挙(第二次人民戦線事件)といった弾圧が相次いでなされた。

このように言論・思想統制は学問領域ですら例外とはならなかった。戦争に批判的とみられた動きは次々と封殺されていった。そして既存のメディアに加え、絵画・文芸・映画・音楽といった文化領域の全てを戦争のために動員していった。そしてこれこそが、総力戦体制の本質であったのである。

第二項 戦時統制と町民

憲兵隊

憲兵とは、軍事警察権および普通警察権を執行できる軍人のことで、陸軍大臣の指揮下に属することになっていた。さらに陸軍大臣は憲兵の陸軍軍事警察権に関する指揮権と、憲兵の本務一切を管掌することになっていた。日本の憲兵隊は、明治三十一(一八九七)年に憲兵条例(昭和四年、憲兵令に改称)が制定・施行されたことで概ねその運用形態が定まったとされ、憲兵の指揮系統は、陸軍大臣―憲兵司令官―地区憲兵隊―憲兵分隊―憲兵分遣隊という流れとなる。具体的には、まず憲兵全体を統括するための憲兵司令部を東京に設置し、その下に北部(北海道)、東北、東部、東海、中部、中国、西部、朝鮮、台湾といったブロックに、憲兵隊司令部(二〇個)を配置した。そしてこれら憲兵隊の下に、国内は各府県ごとに一憲兵隊、朝鮮は各道に一憲兵隊(二三個)、台湾では台南、花蓮港に二憲兵隊が設置されていた。そして地域に応じて、憲兵分隊または憲兵分遣隊が置かれていた。

さて、憲兵のトップである憲兵司令官は憲兵司令部に常駐し、指揮系統上は憲兵全体を統括することになっていた。だが憲兵司令部は、憲兵業務

全般を統括する事務機関としての性格が強く、警察業務上の個別事件の詳細を指令したり把握することはほとんどなかった。実際に警察業務を指揮遂行するのは、各ブロックの憲兵隊司令部である。憲兵隊司令部は、所在地における地区憲兵隊としての業務を担当しつつ、また憲兵司令部から指示される服務の大綱に関して、現地の現状を踏まえながら隷下地区隊の監督指導を行なうことになっていた。そして、捜査の第一線に立つのは現地の地区憲兵隊であった。

また制度上、憲兵の公使できる警察権は広大であったため、実際の運用は以下のように定められていた。「行政警察に関しては内務大臣の、司法警察に関しては司法大臣の、海軍軍事警察に関しては海軍大臣の指揮を受けるの制度なり」。すなわち憲兵の任務職権が及ぶ範囲は、通常はあくまで軍人軍属の犯罪事件に関してのみ警察権を行使する「慣例」になっていた。

行政警察、司法警察が憲兵に兼掌されるのは、戦時、または事変に際し、その必要があると認められた場合に限るとされていたのである。一般的に憲兵のイメージは、非常に暴力的で、かつ国家・軍隊の手先であったというものであろう。だがこのように、規定上は憲兵の権限はあくまで軍事警察に限定されていた（もちろん逸脱する事例が多く見られたことは事実である）。

戦中そして戦後の憲兵のイメージを決定的なものとしたのが、東條内閣期における「憲兵政治」であろう。東條は憲兵を戦争遂行のために用いて、多くの一般市民を監視・弾圧したのである。この事実は、軍事警察による統制の行き着く先は恐怖政治とならざるを得ないことを教えている。

食糧難と町民生活

日中戦争が長期化の様相を濃くした昭和十三（一九三八）年四月、政府

は「国家総動員法」を公布、総力戦遂行のため、生産、需給、物価など国家があらゆる統制を行えることとなった。

北海道においては、同年、米の収穫高が記録的な豊作となるなど農作物の作柄が良く、産業組合・保証責任北海道信用購買販売組合聯合会（北聯）の信用、購買、販売各事業は順調に伸びていた。

千歳村の産業組合としては、大正十五（一九二六）年三月十九日に設立された保証責任千歳村酪農信用購買販売利用組合があった。昭和十三年の時点で、組合員数六二九、法人組合員数四一、払込済出資金は四万七〇二八円に達している。販売実績についてみると、昭和十一年一〇万九八八九円、十二年一三六万二二一九円、十三年一五四万二三八一円、十四年一六六万九七八九円、と年々伸びていた（北海道庁経済部『産業組合並二農業倉庫要覧』各年）。

昭和十四年四月には、国家総動員法に基づき、「米穀配給統制法」が公布された。米穀商は政府の許可制となり、米穀取引所に代わり日本米穀会社が設立され、米の集荷配給一元化が進んだ。原則として集荷には産業組合、配給には商業組合が当たった。翌年には米の自由な売買は一切禁止となる。

十四年、西日本および朝鮮南部に大干ばつが発生すると、米消費高の増加傾向と相まって、需給の均衡に破綻をもたらしした。政府は主食の管理統制を強化し、翌十五年には「麦類配給統制規則」を制定、十六年四月には、米穀の割当通帳制がまず東京・大阪・名古屋・京都・神戸・横浜の六大都市において実施され、個人の消費量制限が実行された。その後、全国的に拡大され、同年十二月までに全国の九九割の市町村で実施された。ただし配給方法は市町村ごとに区々で、通帳制、切符制、カード制などが混在し、配給量についても六大都市を除いて各地で差があった。米穀配給の基準割

当量は、一人一日二合三勺に設定された。

食糧の需給バランスを保つには、消費の制限だけでなく、生産力拡充による供給の確保が必要であった。政府は昭和十四年以降、増産計画を樹立し、各道府県に生産数量を割り当てたが、十六年の米の生産目標七一四〇万石に対し、実収は五五〇〇万石であったように、労働力や資材などの問題から増産は困難であった。台湾や朝鮮からの移入米に關しても、両地における消費量が急増している状況で、移入量の低下を来し、需要を満たすことはできなかった。そのため、外国における供給源が必要となった。そこで注目されたのが大東亜共栄圏であったが、太平洋戦争開戦後、その生産力は低下し、消費の増大と相まって、共栄圏内の食糧バランスをとることは困難であった。また、たとえ共栄圏内に豊富な供給源があったとしても船舶不足の問題が立ちはだかった。

国内における食糧の国家管理体制強化を迫られた政府は、十七年七月、従来の米穀統制法その他の米麦関係法規を総合し、食糧管理法を施行した。同法に基いて同年九月、東京に「中央食糧営団」、各道府県に「地方食糧営団」が設置された。以降、主食品の配給機構は次のような要領で実施された（法政大学大原社会問題研究所編『太平洋戦争下の労働者状態』）。

（１）米穀・内地米は食糧管理法により政府が農家から自家消費用を除くすべてを供出・買上げ、外米は政府が中央食糧営団に依託して輸・移入を行ない、こうして集めた米穀を地方食糧営団に払い下げ、地方食糧営団は直営配給所を通じて消費者に配給を行なった。

（２）麦類（大麦、小麦、裸麦）は政府が農家から自家用を除くすべてを買い上げて中央食糧営団に売却し、中央食糧営団ではこれを業者に依託して精麦あるいは乾麺、乾パン、小麦粉などに加工し、これらの一部を地方食糧営団に払下げし、一般消費者には米の代替品として配給を行なった。

（３）甘藷、馬鈴薯は日本甘藷馬鈴薯株式会社が農家自家用を除くすべてを買い取り、このうち副食物用は青果会社売り渡し、また主食物として総合配給に加える必要のあるばあいにはこれを地方食糧営団に売り渡し、地方食糧営団から一般消費者に配給を行なった。

同年刊行の木村昇『大東亜戦下の食糧対策と食糧営団』は、

これまで主要食糧の配給組織は、米麦はお米屋さん、うどんや小麦粉は乾物屋さん、パンはパン屋さん、甘藷、馬鈴薯は八百屋さんといふ風にそれぞれ別々だった。今後食糧営団が出来て総合配給をやることになると、これらの配給業者は皆食糧営団の機構の中へ一つに総合されて、今度は一つの食糧営団配給所から、米も麦も、パンも薯もといふやうに総合的に配給されることになる。

と述べている。千歳町でも町内の米穀店が統合されて、北海道食糧営団千歳配給所が設置され、配給所を通じて町内への配給が行われた（『町会議決報告』昭和二十一年）。食糧管理法により、米麦の集荷は産業組合に完全に一元化され、産業組合の販売・信用事業は飛躍的に発展していった。

しかし食糧管理統制の強化によっても、食糧の不足が解消されることはなかった。国民の間には、「今は何も彼も配給制度になつて充分には渡らない。少しでも人より多く食べやうと思へば闇で買って食べるより外はない。今一番困るのは米です。二食分しかない。代用食と云つても何もない。

田舎からは二貫目までしか持ち出せず、結局、闇で買ふ外なく、食ひ物屋も休みばかり、そして腹にこたえる物は何も売つてゐない。実に人間がガツガツしてゐる」（警保局外事課「通信検閲より見たる最近の食糧事情と国民思想の動向」と、厭戦気分が広がり、当局も注意を促していた。

『ケヌフチ物語』によると、「昭和一八年以降町へ出ても食べ物を売っている店はまったくなく、何がしかの金はあつても買って食べるという事は

表6-1 主要農産物（千歳町・昭20.10.1）

作物名	作付面積 (町)	反収 (斗)	総収量 (石)	作物名	作付面積 (町)	反収 (斗)	総収量 (石)
米	635.00	11	698	南瓜	127.00	87貫	119,600貫
大麦	1.70	75	13	大豆	135.00	7	94
小麦	471.40	21	990	小豆	4.00	21	8
裸麦	1.30	51	7	其ノ他豆類	30.00	35	105
ライ麦	0.70	87	6	稗	0.70	100	7
燕麦	498.30	87	4,335	□黍	3.00	130	39
玉蜀黍	100.00	25	250				
蕎麦	70.00	40	280				
馬鈴薯	130.00	180貫	261,000貫				

註(1)「昭和二十年度事務報告」『町会議決報告』昭21より作成。

註(2) □は印刷状態が悪く、判読できない。「稷」か。

できなくなっていた」。その一方、「生産農家」は違った。「白米のピカピカは七分搗きになり、五分搗きになった：ものの小麦粉、豆など出荷しないで済む物もあったので（薯、野菜などもじか生産しているの）粗末な食品であったが、腹を満たすことにはこと欠かなかった」とされている。

表6-1は昭和二十年十月一日現在の千歳町における主要農産物の生産状況を示すものである。燕麦、馬鈴薯、南瓜の収量の多さが注目される。一石＝四〇貫として換算すれば、馬鈴薯は六五二五石、南瓜は二九九〇石となる。また米や小麦のよ

三川地区行政区画問題

昭和十七年十二月二十八日、上シークヌフチ部落住民六五名から石狩支庁長に対して、千歳町より分離して由仁村に編入されることを願ひ出る陳情がなされた（千歳町『請願陳情に関する綴』）。その理由書によると、①千歳町役場からの距離が八里に達し、役場に用務がある場合でも交通の便が悪いこと、②経済的には千歳町と関係が薄く、むしろ隣接する由仁村三川に依存して発展してきたが、物資配給が町村単位であるため、千歳駅より

沼ノ端を経由して転送され、その円滑を欠くこと、③防空警報が千歳町より剣淵巡査駐在所を経て伝達されるため、発令後三時間から五時間を有し、隣接する三川が発令中にあるにもかかわらず警報を受領できないことが訴えられている。

翌年一月十三日、岡本町長は千歳産業組合三川支所において、上シークヌフチ、ホロカ、ターツウシナイの各連合会長、部落会長、各役員を集めて懇談会を開催した。また十八日には、役場会議室に町会議員が招集され、協議会が開催された。

それらをふまえて、二十五日、岡本町長は石狩支庁長に対して、次のように報告している。「地理的二見テ一掬ノ同情ナキニアラザレドモ斯ル不利不便ハ如何ナル町村ト雖モ其ノ程度ノ軽重コソアレ末端ニ於テハ同断ノ苦痛ヲ喫スベキ必然ノ理ニシテ単リ、上シークヌフチ部落ノミノ苦痛ニアラズト存ズ」。「仮ニ之ヲ容認セントスルカ本町トシテハ、ケヌフチ峠ノ以西ノ四部落ノ内上シークヌフチ、ターツウシナイ、ホロカ及近唐ノ一部ハ由仁村ニ属スルヲ利便トスベク又近唐ノ一部ハ安平村ニ属スルヲ利トス、尚ホ、アウサリ部落ハ安平村（早来）ニ属シ、カマカ、長都ハ恵庭村ニ、千歳鉦山、及烏柵舞部落（支笏湖畔及自第一発電所至第五発電所）ハ苦小牧町ニト希望スルヤ必セリト思料セラル」。実際問題として、カマカ、長都においては十数年前、学校の位置変更により「永年二亘リ物議ヲ醸シ未ダ其ノ確執ノ余燼存シ、トモスレバ再燃セン気配」がみられる。また二〇年前には、烏柵舞部落の苦小牧町に属せんとする運動が表面化したことがあった。ゆえに「一部ニ行政区画ノ変更ヲ認容センカ全面的ニ波及シ本町ハ物情騒然収斂スベカラザル状態」となり、「市街ヲ中心トシテ僅ニ残ル総面積ノ十分ノ一二モ充タザルニ至ルベク実ニ本町勢ノ進展ニ一大頓挫ヲ来」してしまう。「分離セントスルハ将来ノ利便ニ依ル一点ニアリテ過去

ノ永キ歩ヲ顧ミズ現実ニ即セザル理想案ニ外ナラザル次第ニシテ本町トシテハ行政区変更ニハ断ジテ同意致シ兼ヌル処」である。ただ今後は、各種団体と密接な連絡を保持し、部落民とも懇談を重ね、「千歳産業組合支所ニ吏員ヲ派スルカ又ハ嘱託員ヲ駐在セシメ簡易ノ事務処理セシム等ノ方策」を指導誘掖する、と。以上のように町長は分離問題が他地域にも波及することを懸念し、行政区画変更を認めなかったのである。

『千歳市史』では、分離問題のきっかけは供出割当にあるとし、また事態が沈静化したのは、由仁村に入ると、かえって税金の割当が大きくなることが判明したからであるとしている。

戦後になり、昭和二十二年六月、第三回定例町議会において、「千歳町支所設置及びその事務執行に関する条例設定について」という議案が可決された。同案では、支所の事務として、戸籍、教育、衛生、生活援護、農産農地、配給など一四点を挙げ、三川支所および湖畔支所を設置するとした。

審議では、「支所を設置することが分村問題を誘引する原因とならないか」という大蔵長蔵議員の質問に対して、山崎町長は「分村問題がおきないため、支所を設置し、利便を図るのであり、その憂はない」と答弁している。

三川支所は、由仁村字三川に置かれ、上シーケヌフチ、ターツウシナイ、ホロカ、近唐を管轄区域とした。同区域の人口は一八八二（昭和二十三年一月）で、千歳町の総人口二万四六三五（昭和二十二年十月）の約一三割、農家戸数は二八六（昭和二十三年末）で、千歳町八三八（昭和二十二年十月）の約三四割に該当した。

同年九月の第三回臨時町議会では、中川英男議員が「支所の名称は三川支所ではなんだか他町村の様で具合が悪いが変更出来るか」として、「東

部支所と云ふ様な名称を考へてはどうか」と主張した。結局、「東部支所」案に賛同が集まり、三川支所の名称は東部支所に変更となった。

設置初年となった昭和二十三年度の東部支所による報告では、「懸案たりし支所新築の具体化は全農民の要望でありこれが実施は町政運営上にも至大の關係があり着々計画を進められつゝあることを部落民もきいて非常に期待しておりますばかりでなく支所職員も之に感激し更に其の任務の重を思ひ益々創意工夫支所設置目的の貫徹に邁進するはもとより農協始め關係機關との連絡を密にして理想郷建設に挺身する決心で進んでゐます」と記されている（東部支所「昭和二十三年一般事務報告」）。

千歳町防空本部救恤部業務要綱

昭和十七年、千歳町は防空法に基く「罹災現状ノ応急措置」、戦時災害保護法に基く「罹災者ノ応急救助」に関して、「千歳町防空本部救恤部業務要綱」を定めた。

防空法は、十二年四月二日に公布され、「陸海軍ノ行フ防衛ニ即応シテ陸海軍以外ノ者ノ行フ燈火管制、消防、防毒、避難及救護並ニ此等二関シ必要ナル監視、通信及警報」およびその計画について規定している。第二条では、「防空計画ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ地方長官：又ハ地方長官ノ指定スル市町村長防空委員会ノ意見ヲ徴シ之ヲ設定シ主務大臣又ハ地方長官ノ認可ヲ受クベシ」とされていた。

また戦時災害保護法は、十七年二月に公布され、戦時災害に関して救助・扶助・給与金支給の三種を規定していた。救助の種類は、収容施設の供与、炊き出し、生活必需品の給与、医療、埋葬などであった。救助には地方長官が当ることになっていたが、第七条において、「地方長官ハ勅令ヲ以テ定ムル者ヲシテ救助ノ実施ニ従事セシムルコトヲ得」、また第十四条において、「地方長官ハ命令ノ定ムル所ニ依リ本法ニ定ムル救助ニ関スル職權

ノ一部ヲ市町村長又ハ之ニ準ズルモノニ委任スルコトヲ得」とし、戦時災害保護法施行令第一条は、「市町村長又ハ之ニ準ズルモノハ戦時災害保護法ニ依ル保護ニ関シ地方長官ヲ補助スベシ」としていた。

「千歳町防空本部救恤部業務要綱」においては、千歳町防空本部に救恤本部を置き、救恤部長に助役、救恤係長に総務課長を充てている。また町内会部落会役員、方面委員、大日本婦人会員などの中から、「町内其ノ他ノ公的機関ヨリノ救助ト之ヲ受クル罹災者トノ中間ニ在リテ救助ノ斡旋ヲ為」す、応急救助斡旋班の編成を指示した。

罹災者収容施設については、「罹災者ニ対シテハ懇切丁寧ニ接シ特ニ罹災者ノ士氣ヲ鼓舞シ再起更生ノ精神ヲ培養スルコトニ努ム」として、①管内各国民学校、②千正寺・大安寺説教所・妙心寺、③千歳座・各料理店・各旅館を指定している。町営の施設以外については、「所有者ノ積極的協力ニ依リ措置ニ万全ヲ期スル」としつつ、救助に必要な施設の一時的収用を規定した戦時災害保護法第九条の適用も想定していた。なお「少数罹災者」については、「所属隣組ニ於テ措置スルコト」とされた。以上の措置によっても罹災者の収容ができない場合には、「最小限度ノ仮設住宅ヲ建設給与」することとされた。

出征と町葬

千歳町「昭和二十年事務報告」によると、日中戦争以降の現役入営者・入団者は六七三名であった。また応召者数は五三七名であり、在郷軍人総数の半数に及んだ。

千歳町役場『千歳町戦没者追悼写真帖』より、日中戦争以降の戦没者を算えると、陸軍では日中戦争期二一名、太平洋戦争期一五六名、海軍では日中戦争期一名、太平洋戦争期五一名、総計二二九名となる(表6-2)。戦没者は入営・入団・応召者の一八・九二割にあたる。ほぼ五人に一人の

割合である。戦没地は、陸軍では沖縄、フィリピン、中国が多く、海軍では内地やフィリピンが目立つほか、東南アジアから太平洋上の孤島まで多岐に亘っている。

太平洋戦争における戦没者の半数以上は、昭和十九年八月、マリアナ諸島失陥以降の「絶望的抗戦期」におけるものであった。同時期には、投降

表 6-2 戦没期および戦没地

陸軍 (177)		太平洋戦争 (156)					
日中戦争 (21)							
北海道	2	北海道	4	北支	8	アッツ島	4
内地	3	内地	5	中支	10	キスカ島	1
朝鮮	3	千島列島	3	南支	5	マリアナ群島	4
満洲国	1	硫黄島	3	ソ連	5	メレヨン島	7
北支	8	沖縄	36	東シナ海	1	ニューギニア	6
中支	3	朝鮮	2	フィリピン	14	ブーゲンビル島	3
南支	1	樺太	6	仏印沖	1	ガダルカナル島	7
		関東州	1	ビルマ	4	マーシャル諸島	2
		満洲国	7	インド	1	その他	5

海軍 (52)		太平洋戦争 (51)					
日中戦争 (1)							
内地	1	北海道	3	ボルネオ	1	マーシャル諸島	2
		内地	10	マラッカ海峡	2	ギルバート諸島	1
		千島列島	1	東インド諸島	1	南洋群島	2
		小笠原諸島	1	チモール島	1	南太平洋	2
		種子島	1	マリアナ群島	2	特務艦「富士」	1
		沖縄	1	メレヨン島	1	不明	1
		南西諸島	1	ニューギニア	2		
		東シナ海	1	ブーゲンビル島	1		
		フィリピン	11	ソロモン諸島	1		

註(1) 千歳町役場『千歳町戦没者追悼写真帖』1954年より作成。
註(2) 「満洲国」「北支」「中支」「南支」の区分については、原典のまま記載した。
註(3) 陸軍の「その他」は、台州列島、バシー海峡、パラオ、ナウル島、「マレー・バリージャワ」。

表6-4 階級

陸軍		海軍	
少佐	2	大尉	1
中尉	2	兵曹長	2
少尉	1	上等兵曹	1
准尉	3	一等兵曹	4
曹長	3	二等兵曹	12
軍曹	14	水兵長	8
伍長	50	上等水兵	11
兵長	46	一等水兵	3
上等兵	40	三等水兵	1
一等兵	7	軍属	7
二等兵	1	不明	2
軍属	8		
計	177	計	52

註 千歳町役場『千歳町戦没者追悼写真帖』1954年より作成。

者が多く犠牲になったことがわかる。日中戦争中や太平洋戦争初期であれば通常、戦闘後に戦場掃除が行われ、戦死傷者が収容された。戦死者は茶毘^{たび}に付され、遺骨が内地に送還されることになる。戦死の連絡は、まず「内

を禁じた「戦陣訓」の思想が徹底して実践され、餓死と「海没」死、そして特攻死が特徴的であった(吉田裕・森茂樹『アジア・太平洋戦争』)。千歳出身者においてもやはり絶望的抗戦期における戦没者が多くを占めている(表6-3)。大日本帝国の版図の膨張に伴って、千歳出身者の任務範囲も地球規模の広がりを見せ、先には玉砕や餓死が待っている絶望的な状況に投げ込まれたのである。「ソ連」とあるのは、収容所で亡くなった者を示し、また「南太平洋」や「南洋群島」とあるのは、死没した場所が大まかな範囲でしか判明しない者を示している。

戦没者を階級別にみると、将校は六名、准士官は五名であり、ほとんどは下士官兵であった(表6-4)。また年齢別にみると、二〇代前半に集中している(表6-5)。従軍者のうちでも経験の少ない二〇代前半の若者が多く犠牲になったことがわかる。

日中戦争中や太平洋戦争初期であれば通常、戦闘後に戦場掃除が行われ、戦死傷者が収容された。戦死者は茶毘^{たび}に付され、遺骨が内地に送還されることになる。戦死の連絡は、まず「内

表6-3 戦没時期

時 期	人 数			備 考
	陸軍	海軍	計	
昭16.12～18.1	16	2	18	戦略的攻勢期
昭18.2～19.7	34	13	47	戦略的守勢期
昭19.8～	103	35	138	絶望的抗戦期
不明	3	1	4	
計	156	51	207	

註(1) 千歳町役場『千歳町戦没者追悼写真帖』1954年より作成。

註(2) 時期区分については、吉田裕・額額厚「日本軍の作戦・戦闘・補給」藤原彰・今井清一編『十五年戦争史3』青木書店、1989年を参照。

表6-5 年齢

年齢	人数		年齢	人数		年齢	人数	
	陸軍	海軍		陸軍	海軍		陸軍	海軍
16		1	26	9	1	36	1	2
17	2	1	27	5		37	2	1
18	2	2	28	4	2	40	2	
19	1	6	29	4	1	42	1	
20	8	5	30	5		43	1	1
21	17	4	31	3	1	56	1	
22	29	4	32	5	2	不明	1	
23	29	5	33	4	2		8	
24	21	2	34	1	1			
25	9	1	35	3	4	計	177	52

註(1) 千歳町役場『千歳町戦没者追悼写真帖』1954年より作成。

註(2) 生年のみ判明するものは、誕生日を迎えたものとして集計。

報」と呼ばれる電報によって役場に伝えられた。役場の兵事係は家族にその内容を連絡した。内報からしばらくすると、軍からの正式な通達である「公報」がもたらされる。遺族には戦死概況が送られた。神奈川県相川村出身のある戦死者の例によると、昭和十三年六月九日、中国で戦死、十三日内報、七月十二日戦死公報、八月七日遺骨帰還、九日連隊による慰霊祭、二十九日村葬となっている。村葬は、村長を葬儀委員長として小学校で執り行なわれ、弔辞には村長、小学校長、在郷軍人会長、青年団長、宗教団体長、青年学校長、愛国婦人会長、国防婦人会長、女子青年団長が名を連ねた。また陸軍大臣などより弔電が届いた(藤井忠俊『兵たちの戦争』)。

千歳村においては、

今次ノ事変ノ意義実ニ大ニシテ此ノ戦ニ殲レタル者其ノ英靈ハ靖国ノ社ニ合祀セラレ天皇陛下ノ御拜ヲ辱シ国民護国ノ神ト敬仰シ遺族幾多ノ恩典ニ預リ殊遇ヲ受クルト雖モ軋哀悼禁シ能ハサルモノアリ本村ニ於テハ其ノ最終儀礼ヲ村葬ニ依リ執行セリ各位御承知ノ如シ

として、昭和十四年には四名、十六年には三名の村葬を執行している(昭和十四年事務報告書並財産表)、「昭和十六年事務報告書並財産表」。また十七

年五月十四日、第二回町会においては二名、七月五日、第三回町会においては一名の町葬執行について、「英霊ニ対シ衷心弔意ヲ表スルモノナルヲ以テ一同起立ノ上可決」したことが確認できる（『町会々議録』昭和十七年）。

参考文献

伊藤隆『日本の歴史三〇 十五年戦争』小学館 一九七六年／江口圭一『体系日本の歴史一四 二つの大戦』小学館 一九九三年／山之内靖ほか『総力戦と現代化』柏書房 一九九五年／粟屋憲太郎『昭和の政党』岩波現代文庫 二〇〇七年／石井寛治、原朗、武田晴人『日本経済史四 戦時・戦後期』東京大学出版会 二〇〇七年／吉田裕『シリーズ日本近現代史六・アジア太平洋戦争』岩波書店 二〇〇七年／全国憲友会連合会『日本憲兵正史』研文書院 一九七六年／北海道庁経済部『産業組合並ニ農業倉庫要覧』各年／法政大学大原社会問題研究所編『太平洋戦争下の労働者状態』東洋経済新報社 一九六四年／木村昇『大東亜戦下の食糧対策と食糧営団』同盟通信社 一九四二年／警保局外事課『通信検閲より見たる最近の食糧事情と国民思想の動向』昭和十九年一月十九日／千歳町『請願陳情に関する綴』自昭和十八年至昭和二十四年／同『昭和二十年事務報告』『町会議決報告』一九四六年／同『千歳町戦没者追悼写真帖』一九五四年／東部支所『昭和二十三年一般事務報告』『諸会議』一九四九年／藤井忠俊『兵たちの戦争』朝日新書 二〇〇〇年／千歳村『昭和十四年事務報告書並財産表』／同『昭和十六年事務報告書並財産表』『町会々議録』一九四二年／吉田裕・森茂樹『アジア・太平洋戦争』吉川弘文館 二〇〇七年／及川琢英『千歳村と兵事（二）』『志古津』第八号 二〇〇八年十一月

第三節 千歳航空基地

第一項 千歳海軍航空隊と緒戦航空隊の開庁準備

千歳海軍航空隊設立準備員として昭和十四（一九三九）年五月に千歳に赴任した主計科員小林栄光は、「千歳に赴任する前は、戦艦山城に乗り組んでいたので陸上勤務かと寂しい思いをしました。横須賀から千歳までは陸行で二日を要し、千歳駅から航空隊の営門までは砂利道で、駅通りには民家が二、三軒しかありませんでした。隊に宿舎が完成していなかったもので、伊藤さんという木材店に下宿し隊に通いました。基地では鉄筋コンクリート造り三階建の司令部庁舎と雪中廊下で結ばれた七棟からなる木造の兵舎などが建設中で、周辺には資材が散乱し造成地以外は灌木が生えていました。七月には司令部庁舎で漏電が原因のボヤが発生したこともあり、また。舗装された滑走路が一本、格納庫は天井に採光用の子屋根が付いた小型格納庫三棟が建設中でした。後にできる横滑走路はまだ何もない状態でした。一日数往復の鉄道では札幌に出ることもできず、隊の車で支笏湖に出かけるのが楽しみでした」と回顧した。

また、軽巡多摩乗組員から千歳空設立準備員に任命された斎藤兼之助は、『海軍かまたき出世物語』において当時を次のように述べている。

三月に入つてすぐ、北海道の千歳海軍航空隊設立準備委員を命ず、との辞令が出た。（略）徴用船金滝丸に乗つて、一路大湊海軍航空隊に向かった。ここで委員に任命されたものが結集し、事前の計画や準備を行うためである。（略）準備委員は機関科、工作科、整備科、主計科から、それぞれ一等下士官が一名ずつ、計四名のメンバーであった。その上に臨時の委員長として大湊航空隊の副長がついたが、副長は非常に親切によく指導してくれ、わ

れわれ四人の仕事はスムーズに進んだ。

約三ヵ月後、一応の机上の準備も終了したところ、専任の委員長として松尾という中佐が着任し、准士官も一名加わって、いよいよ北海道に乗り込むこととなった。(略)

千歳では村役場の配慮で、住いを与えられて落ち着き、既に着いていた松尾委員長始め他の委員ともども、すぐに仕事に取りかかった。(略)

飛行場の敷地外には、各建設業者の飯場が幾棟も連なっている。道路や滑走路などは札幌刑務所の服役者を多数参加させて、建設を急いでいた。

私たちは兵舎の一部を事務室として使用した。

前年の昭和十三年十二月、畠山村長ほか四人が本州の航空隊所在町村実情調査に出張して知ったことのひとつに、上陸(外出)時の休憩所、下宿の確保があった。千歳村技術職員だった鈴木茂夫によれば、十四年四月二十五日に海軍要求貸部屋設置方協議会が開催され、役場・鈴木技手、海軍・斉藤兵曹長、警察・高橋巡査、町内会から川南渡部郁郎会長と川北本間長松会長が委員として町内各戸を巡って調査を行った。この調査の結果で設立準備員の居住先が決定している。この当時、村役場は村長以下給仕まで一三人の組織だった。

拝啓

真緑愈々盛夏に向はんとする候貴下益々清祥の段大慶至極奉存候

陳者千歳海軍航空隊設立諸般の事務も刻々進捗仕り我々当事者の殊の外慶賀至極と存ずるところに有之候 準備員数回に亘り貴村現地に出張の結果愈々設立準備員一同は来る七月十五日(先発員は十三日)を期し貴村に準備部を移転いたすの運びと相成り候まことに同慶に存ずる次第に有之候打扱て先般は千歳村長殿に対し下士官にして家庭を有するものの居住に関し御配慮方相煩せ候処先日四名の者貴村に出張致し候際大方様の御高配にて予約者四

名に限らず家庭を有するもの増加の全員の居住に対し誠に申分無之決定を見るに及び候之幾重にも御熱精なるご配慮の致す所以と厚く御礼申上げ先ずは別紙に依り御通報傍々御挨拶迄斯の如に御座候

昭和十四年六月二十七日

畠山千歳村長

殿

渡部 栄藏

千歳海軍航空隊

設立準備員一同

千歳海軍航空隊設立準備員居住先決定

安藤様方―石川一等主計兵曹／佐藤忠助様方―坂下整備兵曹長／藤根様方―及川一等主計兵曹／吉田様方―宮川軍医大尉／荒井様方―佐藤工作特務中尉／渡部様方―太田機関兵曹長／郵便局宅裏―杉山一等整備兵長／札幌土木事務所―小川兵曹長／長沼土木事務所―渡邊主計兵曹長／島倉様方―斎藤一等機関兵曹／杉森様方―斎藤一等兵曹／局長宅―松尾中佐

設立準備部が大湊から移転してきたのは七月十五日のことだった。

小林栄光は準備部設置の先遣隊として千歳に入ったものと思われるが、すでに下宿先があったことから設立準備員居住先決定名簿に名はない。設立準備の責任者であった松尾中佐は中川種次郎郵便局長宅に居住した。

航空基地の開庁

千歳海軍航空隊(千歳空)の開庁は昭和十四年十月一日付けである。南長沼用水路の南側が航空隊敷であった。明渠用水のコンクリート橋を渡り、右の門柱に「千歳海軍航空隊」の表札が掲げられたのは十一月一日のことだった。左門柱の前に六角平面の哨舎があり、後方に衛兵控所(警衛所)が建てられていた。

十一月四日土曜日、千歳空創隊式典が挙行された。

千歳駅前には「歓迎・千歳村」の緑門が建てられ、村外からの来賓を迎えた。軍関係者、国・道庁などの役人をはじめ、千歳村幹部、地域の代表など式典参加者が海軍音楽隊を先頭に、駅から部隊まで小旗を持ち隊列を組んで行進した。行進途中の室蘭街道と停車場通の交点、村役場前にも緑門が設けられ、千歳橋は軍艦に仮装のうえ内部は艦内を模していた。

式典会場の小型格納庫には大きな祭壇が設置され、神式に則って厳かに執り行われた。神籬は常盤木として五メートルほどのトドマツ五本を立てた。

式典終了後、隣の格納庫に会場を移し祝賀会が開催された。

祝賀会場となった格納庫の内部には紅白の幕が四方に張られ、天井からは日本海軍信号旗が幾度も下げられた。祝賀会には、札幌から大勢の芸者が呼ばれたほか、和服に割烹着姿の国防婦人会員も動員され華やいだ雰囲気となった。格納庫内では音楽隊が演奏、飛行場地区では三菱九六式艦戦（A5M）による曲技飛行が展示され、一〇〇〇人近い式典参加者のほか、基地見学に集まった多くの村人を魅了した。

創隊当初、千歳空は全科合わせて二五〇人ほどの陣容だった。

千歳小学校屋内体操場では、演芸会が開催され、村民が千歳空の創隊を祝った。昭和九年に陸軍飛行隊設置速成会を設立、誘致運動を展開してわずか五年目のことだった。目標であった陸軍飛行隊に勝るとも劣らない、却って先進性があるといわれた海軍航空隊の巨大な施設群を目のあたりにした村民の感激は如何ばかりのものであったか。

『千歳飛行場沿革』巻末の記述が村民の気持ちを代弁している。

本村ノ一大願望トシテ本飛行場ヲ国家的御用ニ供セラレンコトヲ継続請願中ノ処偶々昭和十二年九月ノ交多年ノ熱望ハ達シ或ル重要地点ニ指定セラレ欣然トシテ御請ケ致シ本村分三十九万一千百九十七坪ヲ献納スルニ至ル

昭和十七年三月発行の水路部軍極秘9100号『海軍航空基地資料第1』は、昭和十五年二月までに蒐集した航空隊と水路部の調査資料によって、現状のまま使用できる航空基地を一覧としたものである。施設図、位置図、気象データ、空中写真などが収録されている。

千歳海軍航空隊（北海道千歳郡千歳村）

北緯四十二度四十九分 東経百四十一度三十九分

面積及地形―十九万五千平方米

東西ニ対シ百五十分一西下リニシテ南ニ対シテハ水平

種 類―陸上機用

地方風―地上 夏ハ南北風、冬ハ南北及ビ西風、一般ニ風力弱シ

上層 不祥

地方特殊ノ気象―夏ハ一般ニ海霧多シ（朝夕最モ多ク日中ハ晴ルル事多シ）

九・十・十一月快晴多シ

十二月ヨリ翌年三月末頃マデ積雪アリ平均一米

滑走路面及長、幅、條数―瀝青舗一二〇〇米×八〇米（二条）

他ニ北、西、南ノ三方ニ舗装運□路ヲ有ス

航空標識―無線方位指示設備アリ（未完成）

通信連絡―

離着陸特殊操縦法―離着陸時右旋回

排水良否―地質火山灰ニシテ雨水排水良好 但シ解雪時地面凍結シ滞水スル

コトアリ 主滑走路両側ニ排水路アリ

観測設備―航空気象観測ノ設備アリ（未完成）

照明設備―場周灯、障害物指示灯アリ（未完成）

目 標―北海道鉄道、樽前山

給油及応急処理―給油設備アリ 応急修理可能（隊内工作施設未完成）

障 碍 物―場周囲ハ一乃至二米位ノ雜木林ニシテ離着陸時特ニ障害トナルモノナシ

交通連絡―千歳駅ヨリ徒歩ニテ二十五分、自動車交通可能

「バス」ノ連絡ナシ

其ノ他―舗装以外ハ全部植芝、転圧シアリ

(昭和十四年十一月調)

千歳航空基地引き込み線については、『増補千歳市史』によると「十六年八月には、千歳駅から隊内に引込線がつけられ、千歳駅は重要な軍事駅となった」とあるが、位置図には爆弾庫までのほか、後に航空廠敷となる軍需部倉庫とエプロン北端にあった燃料庫までの三線が図示されている。引き込み線は海軍専用線ではなく北海道鉄道側線であった。

鉄筋コンクリート造り三階建ての司令部庁舎と積雪時の連絡のため雪中廊下で結ばれた七棟からなる木造二階建ての創隊時における主要用途は、庁舎側から兵舎、^{かわや}厠、浴場、倉庫、^{ボイラ}汽缶所・自家発電所、工場、病舎となっていた。庁舎の西側には車庫が設けられた(後に兵舎一棟増築)。

兵舎などの木造建物の屋根は、官舎を含めギャンブレル(切妻腰折)屋根に特徴があった。

格納庫は、市街地寄りに三棟からなる採光用の子屋根が付いた小型格納庫が並んでいた。この格納庫は巴組が開発した大空間を創るための骨組み構造であるダイヤモンドトラス工法で同社が施工した。図面には白川組が施工した鉄骨溶接の山形格納庫が記載されているが、空中写真ではいまだ工事中である。小型格納庫の後には機体整備場とエンジン試運転の瞬点場がある。指揮所は陸攻隊、戦闘機隊に分かれ二カ所にあった。

三階建ての司令部庁舎¹は、海上自衛隊航空基地として供用されている鹿屋、館山と類似した軍艦の艦橋を模した艦型司令部庁舎である。屋上には

艦マストによる軍艦旗掲揚塔が設けられた。

冬季間の積雪による運用不能を除去し、飛行場機能を維持することは積雪寒冷地である千歳の命題でもあった。一二〇〇以上の長大な滑走路の除雪は機械力によらなければならなかった。

開庁時には、除雪車両として六ト単翼式と八トロータリー式の除雪トラックが複数両配備され冬季に活躍した。いずれも東京自動車工業現・

いすゞ自動車)製で単翼式は自重を増すため砂利を満載し、タイヤチェーンを巻いて除雪作業に当たった。

戦争末期には、くろがね一三ト・一八〇馬力の除雪トラックが配備された。V翼とロータリーを装着できたが、パワーステアリングがないためハンドルが重く兵員二名で旋回した。春先の積雪深度がある重い雪をロータリーで進むときの速度は、毎時五〇〇ほどであったという。くろがねは世界に先がけ軍用四駆車・くろがね四起を量産した日本内燃機製だった。

司令部庁舎は、平成元年から二年にかけ大規模な改修工事を受け、航空自衛隊が供用中である。二年十二月六日に挙行された改修竣工式典には、岩見沢の小林栄光、千歳の松井浩など近郊に居住する元千歳空隊員が基地司令から招待を受け、昔日を偲び感激のなか参列した。

小型格納庫は救難隊格納庫として長く使われ、改修を受け現存する。三棟の山形格納庫のうち奥行きが短かった市街地側の一棟は延長工事を受

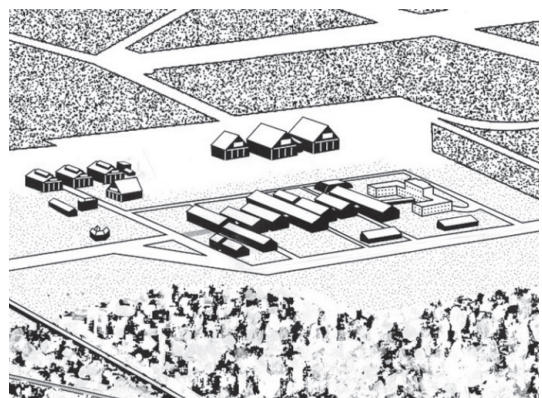


図6-1 千歳航空基地航空隊施設地区(守屋憲治作図)

け、ほかの二棟と同規格となり供用されている（山形格納庫写真Ⅱ第四章中「着陸場の位置」を参照―中間格納庫左に陸攻隊指揮所、左格納庫奥に司令部庁舎が見られる）。

基地から北方約四^キの室蘭街道（現・国道36号）沿い左、標高二七^{メートル}の高台に送信所があった。三本の鉄塔を有し、建屋地下に自家発電施設があった。鉄筋コンクリート建てで、ギャンブルル屋根だった。後に当該施設は昭和二十八年から三〇年間、千歳少年院として使われた。

註（1）航空自衛隊千歳基地司令部庁舎は、昭和五十九年に日本建築学会から発行された『新版日本近代建築総覧―各地に遺る明治大正昭和の建物―』においてその時代・昭和初期を特徴付ける代表的建築様式を持つ建造物の一つとして取り上げられ、米軍駐留時の200^{エリヤ}区域にあったことから200^{メートル}と呼ばれている。飛行場地区の小型格納庫二棟が、戦中と戦後すぐに他基地に移築された。

航空隊の配備機

千歳空の当初の配備機数について、昭和十三年十二月に国会に提案された十四年度海軍軍備充実計画（④計画）の予算説明書内訳では陸攻が一隊で常用一二機、補用四機、艦戦が二隊で常用二四機、補用八機となっていた。

しかし、昭和十三年八月七日付 軍令部次長発海軍次官宛「対R戦備促進及出師準備ニ関スル件協議」には機数に係する次の記述がある。

陸攻三六機、艦戦一二機程度ノ使用ニ支障ナキ居住施設（「バラック」ニテ差支ナシ）、防空施設及通信施設（『戦史叢書29』）

千歳空開設時の詳細な配備機数は不明である。配備機種は九六陸攻と九六艦戦であった。細い胴体から魚雷型と呼ばれ、「中攻」という名で国民に親しまれた中型攻撃機九六陸攻は、我が国初の近代的双発機で全金属

製、引込脚採用の戦略爆撃機として大陸への渡洋爆撃に活躍した。艦戦は全金属製低翼で世界初の単葉艦載機であった九六式で、大陸において陸上機である米国製戦闘機を圧倒した。両機種ともに海軍航空兵力の中核であり、空気抵抗削減のため沈頭^{ちんとうびよう}鋏を全面的に採用し速度を上げた。

開戦時の配備定数は、陸攻、艦戦ともに三六機である。

九六式陸上攻撃機22型（初期生産型）

全幅二五・〇^{メートル} 全長一六・五^{メートル} 最大速度三七六^{キロメートル}／時

武装二〇^{ミリ}機銃×一 + 七・七^{ミリ}機銃×二 魚雷または爆弾八百^{キロ}

航続距離四三八〇^{キロメートル}（過荷） 乗員七

九六式4号艦上戦闘機（最終生産型）

全幅一一・〇^{メートル} 全長 八・四^{メートル} 最大速度四三五^{キロメートル}／時

武装七・七^{ミリ}機銃×二 爆弾三〇^{キロ}×二

航続距離一二〇〇^{キロメートル}（増槽） 乗員一

海軍の航空隊は一般的に単一の機種で構成されていた。編成を単一化することで訓練、補給が容易となる利点があったが、ほかの航空隊と協働作戦をとる場合に不利があった。千歳空のみが海軍の航空隊で混合機種編成となっていた。千歳空は創隊当初から開戦の暁には日本南洋委任統治領（内南洋^{ないなんよう}）に進出、単独で警備につく任務が付与されていた。開戦時には配備が始まったばかりの三菱一式陸上攻撃機（G4M）数機が九六陸攻と混用された。

航空隊の開隊

千歳空は、昭和十四年十月一日に北海道で初めての海軍航空隊として創設された外地作戦実施部隊である。

海軍航空隊としては大正五（一九一六）年創設の横須賀空、九年の佐世保空、十一年の霞ヶ浦空、大村空、昭和五年館山空、六年呉空、八人大湊

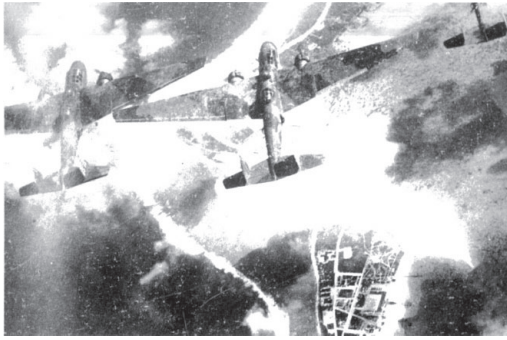


写真6-1 ウェーク島上空の千歳空96陸攻（昭和17年
発行・大橋部隊『大東亜戦争記念写真帳』）

空、九年佐伯空、十年舞鶴空、十一年鹿屋空、木更津空、鎮海空（朝鮮南部）、十三年高雄空（台湾）、大分空、鹿島空、鈴鹿空、筑波空に続いて父島空、宇佐空とともに一九番目に開隊した。

司令は松尾鏡藏海軍中佐、搭乗員は中華民國の首都・重慶への渡洋爆撃に連日出動したベテランが揃っていた。木更津基地で開隊の翌日、千歳基地に移動した。

昭和十五年六月二十八日、松尾司令を乗せ千歳から大湊へ連絡飛行中の九六陸攻一機が、渡島の榎法華村（平成十六年に函館市編入）にある標高五六九・四の海向山に衝突、搭乗していた九名全員が殉職した。事故を受け、司令は梅谷薫大佐となった。飛行長は中野忠二郎中佐、中攻隊飛行隊長は松田秀雄少佐だった。

千歳空の部隊標識は、創隊から昭和十五年十一月まではチトセの「チト」、以後、解隊までは「S」である。鹿屋空は「K」、元山空は「G」（朝鮮北部）、美幌空は「みほろ」と読み「M」とアルファベットで表記された。これらのことから、千歳空の「S」は千歳郡を札幌郡と誤ったのか、もしくは何らかの意図をもって「せんさい」と読んだことが類推される。

昭和十五年十一月十五日付で千歳空は横浜空の川西九七式飛行艇（四発大艇・H6K）とともに第四連合航空隊を編成、十六年一月十五日には飛行艇母艦神威とともに第十一航空艦隊（航空）第二十四航空戦隊（航戦）を編成

した。司令官は後藤英治少将、司令は大橋富士郎大佐に代った。

千歳空は開隊後、大陸方面の作戦行動には加わらず、邀撃能力向上のため飛行錬成訓練あるいは艦隊攻撃訓練を行った。

昭和十六年春にはサイパン島アスリート基地に進出、航法通信、爆撃訓練の後、パラオ諸島ペリリュー島基地において洋上航法訓練、爆撃・雷撃訓練を行い錬度は確実に向上していった。基地第一次訓練を終了後、木更津、館山基地に移動し一航艦一航戦の空母加賀、赤城と合流、実戦的な空母攻撃訓練を実施した。八月には千歳に帰り休養、九月には内南洋東端のマーシャル群島クエゼリン環礁ルオット島に進出し、実艦的に魚雷を発射する基地第二次訓練を実施した。十一月には陸攻隊と戦闘機隊の一部がマロエラップ環礁タロア島に分遣された。

マーシャル諸島周辺は、日米開戦の際には本土・ハワイから日本に來航する米太平洋艦隊を迎え撃つ連合艦隊との決戦場と目されていた。千歳空は、そのための漸減邀撃航空部隊の位置づけにあった。

この間、千歳空を含む二十四航戦は連合艦隊第四艦隊へ転籍した。九六陸攻三六機、九六艦戦三六機を有し、各々四個中隊計八個中隊の陣容だった。なお、横浜空には九七大艇二四機が配備されていた。

ルオット島は二つの小島からなり、一つに飛行場、一つに部隊施設があった。訓練の合間には水泳大会、慰安会、野球大会が開催されたほか、千歳管弦楽団も結成され戦備の間に静かさを与えた。

昭和十六年十月、海軍航空本部は建設中航空基地の一覧を作っている。表を見ると、千歳（隊）＝千歳航空隊基地の現状は「概ね完成」、使用可能機種は「中攻一隊・戦闘機一隊」とされた。また、飛行場略図には、「整地部分一四〇〇フィート×一三〇〇フィート」と「二二〇〇フィート×八〇〇フィート（A主滑走路・B横滑走路）」が記載されている。

昭和十四年の千歳航空基地開庁時には主滑走路のみであったが、この時点で初めて資料によって横滑走路が確認できる。

海軍の戦闘状況を伝える一次資料として戦闘詳報、行動調書、戦時日誌がある。航空隊の行動詳細は『飛行機隊戦闘行動調書』である。

『千歳空』飛行機隊戦闘行動調書』によると十二月四日、安藤信夫大尉指揮の一式陸攻単機が、開戦劈頭（へきとう）に攻撃する三つの島からなる環礁・ウェーク島を偵察した。午前五時三十分ルオット基地を発進、九時二十分にウェーク島上空に達し敵情を偵察、十二時四十分帰着した。開戦までの間、九六陸攻は哨戒、九六艦戦は基地上空の警戒に当たった。五日にはタロアを発進した哨戒中の九六陸攻が一機行方不明となった。

開戦 ハワイ・マレー沖海戦

昭和十六年十二月八日未明、海軍が米自治領ハワイ・オアフ島真珠湾に泊る太平洋艦隊を奇襲攻撃した。この戦いをハワイ海戦という。

この海戦に参加する海軍機動部隊が、天然の良港である択捉島（ひじかづが）（北海道根室支庁管内択捉郡留別村）に集結したのは十一月二十二日だった。択捉島は千島列島最大の島、単冠湾は島内唯一の不凍港で太平洋に面していた。出航は二十六日、湾を取り囲む山々はすでに冬景色になっていた。機密が保持できなければ強襲とならざるをえない。全ての行動が無線封印のなか密に行われた。司令長官は南雲忠一海軍中将だった。

十二月二日、ハワイに向け航行中の機動部隊に対して、大本営から「ニイタカヤマノボレ一二〇八」が打電された。十二月八日午前零時をもって戦闘行動開始が下命された（台湾新高山は標高三九五二メートルで国内最高峰）。

空母赤城を旗艦とする機動部隊は、赤城ほか空母加賀、翔鶴（しょうかく）、瑞鶴（ずいかく）、飛龍（りゅう）、蒼龍（そうりゅう）と戦艦比叟、霧島、重巡利根、筑摩、軽巡阿武隈のほか、艦隊型駆逐艦九隻、水上偵察機搭載伊号潜水艦三隻、特殊潜航艇甲標的搭載

伊号潜水艦五隻、油槽船（特設給油艦）七隻からなっていた。

ハワイ作戦の目的は、南方作戦において米太平洋艦隊による妨害を排除することにあった。作戦は史上初の空母の集団的運用であった。

十二月七日午前七時、旗艦赤城のマストに日本海海戦と同じく「皇国ノ興廃比ノ一戦ニアリ 各員一層奮励努力セヨ」のZ旗が揚がり、敵の哨戒圏に入っていた。八日午前一時三十分、六隻の空母から三菱零式艦戦（A6M）一制空、愛知九九式艦上爆撃機（艦爆・D3A）一急降下爆撃、中島九七式艦上攻撃機（艦攻・B5N）一雷撃・水平爆撃からなる史上空前の艦載機三五〇機が二次に分けて次々と飛び立った。

第一次攻撃隊の総飛行隊長淵田美津夫中佐機からト連送（ト・ト・ト）全軍突撃セヨ、その後、トラ連送（トラ・トラ・トラ）ワレ奇襲二成功セリが打電され午前三時二十五分攻撃が始まった。攻撃によって現在も真珠湾に沈没したままになっている戦艦アリゾナをはじめオクラホマ等四隻を撃沈、四隻を撃破のほか駆逐艦二隻等を沈め、航空機四七九機以上を撃破、戦死傷者約四八〇〇名を数えた。この攻撃で日本は二九機の未帰還機と五隻の特殊潜航艇甲標的、合わせて五五名の兵員を失った。

しかし、日本にとって空母エンタープライズ、レキシントンが真珠湾に停泊しておらず撃沈できなかったこと、攻撃が艦船と飛行場に集中し、第二撃がなく海軍工廠施設や石油コンビナードに損害を与えることができなかったことは、その後の米国反撃の機会を容易にした。

海戦の主役は機動部隊となり、大艦巨砲は過去のものとなった。

十二月八日午前七時の日本放送協会JOKA定時ニュースは、「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます」ではじまった。行進曲「軍艦」が流された後、「大本営陸海軍部発表、十二月八日午前六時。帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」と

開戦が報じられた。

この日の北海タイムスタ刊一面トップの見出しは「米英の横暴断固粉碎 帝国遂に干戈を執る 宣戦布告の大詔煥発」と米英との開戦を報じた。

ハワイ海戦の二日後、十日にはマレー沖海戦があった。日本陸軍のマレー半島上陸に対抗しシンガポール港を出航した英国極東艦隊の戦艦二隻を陸攻が撃沈した。この年の一月に就役したばかりの最新鋭戦艦プリンス・オブ・ウェールズと巡洋戦艦レパルスだった。元山空、鹿屋空、美幌空の九六陸攻と一式陸攻が、対空装備の強力な作戦行動中の戦艦二隻を爆撃と雷撃で沈めた。

一式陸攻は双発機に四発機の性能を求めた高性能雷撃爆撃機、武装で四〇〇〇キ、偵察で六〇〇〇キを超える長大な航続距離を生かして広大な戦域を翔破、幾多の戦果を挙げた。一式陸攻は後方防御に万全を期するため尾部に二〇ミ旋回機銃を装備し、魚雷・爆弾を機体内に収納した太い胴体から葉巻型と呼ばれた。

その日の英首相チャーチルの回顧録には、「私は一人であることを感謝した。大戦中、私はこれ以上の衝撃を受けたことはなかった」と書かれ、その日は誰にも会わなかったという。

ウェーク島攻略

連合艦隊機動部隊のハワイ海戦に呼応して千歳空は九六陸攻三四機をもつてルオット島洋上五九〇海里（一〇九三キ）のウェーク島爆撃に進出した。第二種軍装の松尾司令は「わが機動部隊は、すでにハワイ在泊の米艦隊に対し、攻撃を開始した。日米戦の幕は切っておろされたのである。当隊は全力を上げてウェーキ島を爆撃する。成功を祈る」と訓示した。

ウェーク島は米国にとっては本土からハワイ・グアム・比島（フィリピン）を結ぶ植民地ルートの拠点であり、対して日本にとっては東京・硫黄

島・南鳥島・クエゼリン環礁・ミレから南東を目指す拠点だった。攻撃目的は、十日に予定された上陸部隊援護のため飛行場と高角砲の破壊にあった。

『千歳空 飛行隊戦闘行動調書』によると午前五時十分から一〇分をかけ松田秀雄少佐を指揮官とする三四機が発進、十時十分にはウェーク島爆撃を敢行した。投下した爆弾は二五〇キ爆弾一三発と六〇キ爆弾三二一発の計三四発で、総重量は二二ト五一〇キに達した。旋回機銃からは六四三八発が発射された。上空からは小型機の炎上と二カ所の火災が視認された。千歳空の被害は戦死一名、銃被弾八機で、午後二時三十分には全機が基地に帰着した。往復九時間半の爆撃行だった。戦闘機隊はこの間、基地上空の警戒と哨戒に当たった。

この日の攻撃でグラマンF4Fワイルドキャット艦戦四機、宿舍、パンナムホテルが粉碎された。ウェーク島には海兵隊VMF211のF4Fが一〇機程度配備されていた。

九日、第二次攻撃―二七機の出撃で海岸砲台に損害を与えた。

二日間の攻撃で陸攻一機が自爆のほか一〇機が被害を受けた。九六艦戦の航続距離が短く、陸攻の直掩（ちよくえん）ができなかったことが原因だった。

『千歳空 飛行隊戦闘行動調書』によれば、九日三時三十五分、二機の九六陸攻がルオット基地から飛び立った。一番機はラポール（ラバウル）方面、二番機はカビエン方面に



写真6-2 96陸攻（製造410号）に描かれた千歳空の部隊標識「チト」（昭和15年撮影・小林栄光→守屋憲治所蔵）

向け飛行した。写真偵察が目的だった。二番機は十三時五分、一番機は十四時二十八分に帰着した。ラバウル往復の一番機の飛行時間は一時間に及んだ。

ラバウル方面偵察飛行の結果は次のとおりであった。

写真十四枚ウツス 指揮所、宿舎完備セルモ飛行機一機モ見当タラス 滑走路ハ森林ヲ切開キタルトミエテ舗装シアラス 全島森林地帯ニテ道路以外交通不可能ナリ 沿岸上陸困難ナルモ所々上陸ニ適ス 偵察効果大ナリ

目的は、ラバウル攻略時の上陸地点と、航空部隊進出時の滑走路の確認にあった。滑走路は二つの活火山の麓にあり港はカルデラにあった。

十日、梶岡定道少将指揮の軽巡夕張以下の第六水雷戦隊に護衛された国際汽船徴用の特設巡洋艦金剛丸、金龍丸は上陸部隊である海軍陸戦隊を乗せウエーク島沖にあった。陸戦隊は上陸用舟艇・大発（大型発動艇）で上陸を行なおうとしたが、悪天候と大発の降ろし方が失敗し攻略を中止した。十一日に再度上陸を試みるも、荒天と残存兵力に上陸を阻止されたばかりではなく、駆逐艦疾風、如月が沈没するという惨状を呈した。千歳空の陸攻二機も撃墜された。

十二日、政府は戦争を戦域の東アジア（亜細亜）から「大東亜戦争」と命名した（敗戦後、米国が使用を禁止したため訳語の「太平洋戦争」が一般的となる）。

ウエーク島上陸を阻止した敵兵力の中心はわずかに四機のF4Fであった。千歳空の陸攻は十四日に三〇機が発進、一機を撃破するも一機損害。十六日は三三機、十九日も二七機で爆撃を敢行した。

二十一日にはハワイ海戦の帰途にあった第二航空戦隊の空母蒼龍、飛龍と護衛の重巡利根、筑摩、駆逐艦二隻がウエーク島攻略に加わり、艦載零戦隊が残存敵戦闘機を撃墜した。

零戦は大戦中の代表的戦闘機である。格闘戦能力、長大な航続距離、時速五〇〇^キを超える速度と二〇^リ機銃二門という強力な火力を備え、艦戦でありながら陸上機を凌駕する画期的な万能戦闘機であった。米軍は「行き手に雷雲があるか、ゼロ（零戦）がいる場合は回避可」とした。

二十三日、第二次上陸作戦が敢行されその日のうちにウエーク島を占領した。千歳空はウエーク島を十次にわたり爆撃、延二〇四機が出撃し四機が撃墜された。

昭和十七年二月一日、米機動部隊がマーシャル方面に襲撃し、千歳空の一部が残留しているタロア基地が攻撃を受けた。米軍の攻撃は三日も行なわれ、四日にはルオット島も攻撃された。

前述の小林はタロア島にいた。「最初は敵艦隊とは知らず、輸送船でも入港したと思っていたら艦砲射撃、司令部屋上に戦闘を示す軍艦旗（執筆者注・戦闘旗）がスルスルと上がりました。司令部が格納庫の裏のため致命的な被害を受けました。飛行場上空では空中戦、伝令が飛び交いました。そのうち敵艦が洋上に退却したので中攻が敵空母攻撃のため発進しました。この戦闘で山本長官から感状をいただきました」。

タロア島を艦砲射撃したのは重巡チェスターである。午後一時ごろ、敵艦隊は洋上へ退却したのに呼応して九六陸攻五機が発進した。陸攻は回避する空母エンタープライズに対して十数発の爆弾を投下、至近弾で小火災を発生させた。この攻撃で両エンジンに被弾した中井大尉機はエンタープライズの飛行甲板右端に突入した。

この戦いでの空中戦において九六艦戦は一機の被害もなく一七機を撃墜した。また千歳空の敵空母攻撃は海軍初のものだった。

感 状

中井海軍大尉ノ指揮セル／千歳海軍航空隊タロア派遣隊

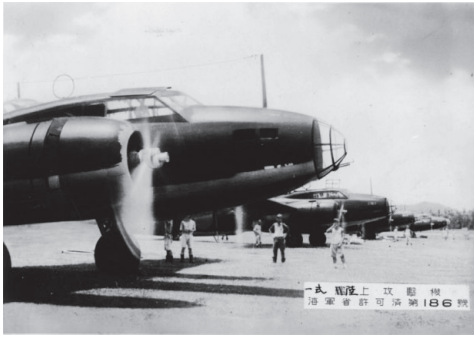


写真6-3 南方基地の1式陸攻（海軍省許可写真・須賀雄介提供）

昭和十七年二月一日敵米国機動／部隊ノ「マーシャル」群島方面ニ出／現スルヤ寡兵独力ヲ以テ犠牲ヲ／顧ミス勇猛果敢反覆敵ヲ攻／撃シテ之ニ損害ヲ与ヘ遂ニ撃／退シタルハ其ノ忠烈顯著ナリト認ム／仍テ茲ニ感状ヲ授与ス

昭和十七年十月十六日

連合艦隊司令長官 山本五十六（花押）

三月、マーシャル方面にあった千歳空一部の九六艦戦はウエーク島に移動、零戦に機種変更し哨戒と錬成に当たったという。占領後、ウエーク島は大鳥島と改名された。

ラバウル攻略

ウエーク島占領後、千歳空はルオット島から六〇〇海里の日施（昼間）哨戒に当たっていたが、二個中隊がトラック島に派遣され一式陸攻を受領した。一式陸攻の完熟訓練終了後、赤道をはさんで七五〇海里の外南洋ニューブリテン島の濠州空軍基地ラバウル攻略を下令された。

昭和十七年一月四日、千歳空の一式陸攻一八機がラバウルを初空襲した。「敵戦闘機ラシキモノ三機航過セルモ交戦セズ」と『戦闘行動調書』にあるように敵機が自らの戦闘能力を知ってか空中戦には至らなかった。七日にも爆撃を敢行した。その後も敵機を認めるも「来襲セズ」だった。

二十二日には空母翔鶴、瑞鶴からなる機動部隊の空中援護のもと第四艦隊の上陸部隊はラバウルを占領した。

三十一日のラバウル進出時、千歳空の九六艦戦は航続距離が短いため空母

翔鶴、瑞鶴によって運ばれラバウル東飛行場に初進出した。収容は空母搭乗員によって行われた。発艦は千歳空搭乗員によって行なわれたが、悪天候による着艦を余儀なくされた。しかし、無事に着艦し基地航空部隊である千歳空の技量の高さを示した。二月十日には後続機もカビエン経由でラバウルに到着、ラバウルの防空にあたった。この間、七日には千歳空所属の九六陸攻三機がラバウルに着陸した。陸攻のラバウル初着陸であった。これらの機は十日、臨時編成の四空に編入された。

千歳空はラバウル進出後、ニューギニア島東部の要地ラエ、サラモア、ポートモレスビーの爆撃に、遙か彼方濠州北東部クインズランド州タウンズヴィルの偵察に南太平洋・珊瑚海^{さんごかい}の上空に翼を拡げた。

四月一日には四空が陸攻部隊になったことから千歳空の戦闘機部隊は台南空に編入された。四空は「死空」といわれたほどに未帰還機が多かった。

ラクナイのラバウル東飛行場（陸海軍共用）を戦闘機隊が使い、陸攻隊はブナカナウの西飛行場（海軍主用）を使った。

「銀翼連ねて南の前線／ゆるがぬ護りの海鷲たちが／肉弾砕く敵の主力／栄えある我等ラバウル航空隊（詞・佐伯孝夫）」と歌われたラバウル海軍航空隊とは、ラバウルにおいて作戦行動に従事する基地航空部隊の総称である。千歳空はまさにラバウル航空隊の嚆矢^{こうし}だった。

千歳航空隊の歌 作不明

- 一 昨日は北に今日又南の海の生命線
守る我等が帝国の輝く千歳航空隊
- 二 太平洋を吹きさす怒涛は如何に高く共
守る潮風身にうけて見よや千歳航空隊
- 三 空の隼戦闘機練りに練ったこの腕に
守る祖国の最前線明に輝く航空隊

四 地軸も裂ける爆撃に重き使命の攻撃隊

守る赤道西東凜たる千歳航空隊

五 御国の為に一丸と碎けて散らん魂ぞ

樹てよ世界の新秩序栄えあれ千歳海軍航空隊

千歳空の配備機は、ラバウル方面に進出した一部において一式陸攻、零戦に機種改編されたが、マーシャル諸島方面においては解隊まで九六陸攻、九六艦戦が主体だった。

一式陸上攻撃機11型（初期生産型）

全幅二四・九^{メートル} 全長二〇・〇^{メートル} 最大速度四二六^{キロ}／時

武装二〇^{ミリ}機銃×一 + 七・七^{ミリ}機銃×四 魚雷または爆弾一^ト

航続距離四二八^{キロ}（過荷） 乗員七

零式艦上戦闘機21型（初期生産型）

全幅一二・〇^{メートル} 全長九・一^{メートル} 最大速度五一八^{キロ}／時

武装二〇^{ミリ}機銃×二 + 七・七^{ミリ}機銃×二 爆弾六〇^{キロ}×二

航続距離三三五〇^{キロ}（増槽） 乗員一

陸軍の南方作戦

昭和十六年十二月八日、海軍のハワイ海戦に先立ち陸軍第十八師団先遣隊が悪天候下、マレー半島東岸の英領マレーのコタバルに敵前上陸し、飛行場を制圧、航空部隊が進出した。戦車部隊を中核とした機械化部隊の第五師団はタイ領シンゴラとパニタに上陸し、戦車を先頭にした佐伯挺身隊が英軍の誇るジットラインを突破、島田戦車隊がスリムの夜間戦闘で英軍を殲滅、マレー半島西岸を南へ進撃した。近衛師団が第五師団に続いた。歩兵は銀輪部隊で進軍の速度を上げた。日本軍は総勢三万五〇〇〇の兵力だった。

作戦の目的は、東南アジア資源地帯をおさえジャワ・スマトラの石油、

マレーのゴム、ボルネオの非鉄金属を入手し長期戦に備えることにあった。昭和十七年一月十一日にクアランプール占領、三十一日にはシンガポール対岸のジョホールバルまで進軍、二月八日夜第十八師団、第五師団はジョール水道からシンガポール島に敵前上陸した。十一日には市街地を見渡すことができるがブテキマ高地での肉弾戦を展開し、夜に占領した。

十五日午後、一四万の英軍は白旗を掲げた。その夜、ブテキマ高地の麓にあるフォード自動車工場で、山下・パーシバル会見が行なわれ英軍は無条件降伏を受諾した。

上陸以来七〇日で一〇〇〇^{キロ}の敵陣を突破したマレー攻略軍・第二十五軍の最高司令官は「マレーの虎」と謳われた山下奉文中将だった。

このほか、陸軍における緒戦の概況としては次のとおりである。

英領香港攻略作戦は支那派遣軍によって行なわれた。香港攻略は十二月八日陸軍軽爆撃機が啓得飛行場を急襲、第二十三軍第三十八師団の三個連隊が国境を突破し二十五日に香港要塞を占領した。

米領比島、蘭領東印度（蘭印）方面攻略作戦は南方軍が担任した。

比島方面では、昭和十六年十二月八日、台湾南部から陸海軍機が出撃、制空権（航空優勢）を確保した。第十四軍主力は十二月二十二日リンガエン湾に、二十四日には第十六師団主力がラモンに上陸した。十七年一月二日マニラを攻略後、一月二十四日にバターン半島を第六十五旅団で攻撃したが猛烈な反撃で中止となった。四月三日には第二次バターン半島総攻撃を敢行、第四師団と第十六師団が九日に占領した。五月七日には、ウエンライト中将が死守するコレヒドール島マリント要塞を占領した。マッカーサー米比軍司令官は三月十二日、多くの米兵を残したまま濠州に脱出していた。比島攻略部隊である第十四軍司令は本間雅晴中将だった。

蘭印攻略では、油田と政治経済の中心地であるジャワ島を攻略のため、

兵力約十万の第十六軍が編成された。十二月中旬に川口支隊によって英領北ボルネオの飛行場を占領、ミンダナオ、セレベス、ボルネオの敵飛行場は第四十八師団坂口支隊によって次々と急襲、占領して航空部隊を逐次押し出し、制空権を拡大する方策が採られた。

昭和十七年一月十一日セレベス島メナドに海軍落下傘部隊が降下、二十四日海軍陸戦隊はケンダリーを攻撃、二月九日にはマカッサルを占領した。ボルネオでは坂口支隊が精油所のあるバリクパパンを一月二十四日に占領した。

二月三日には海軍東方攻略部隊がアンボン島を、二十日にはチモール島を攻略した。

スマトラ進攻に先立ち二月十四日バレンバン飛行場付近に「空の神兵」といわれた陸軍落下傘部隊が降下し飛行場と油田・精油所を確保した。

ジャワ海では米英蘭濠との海戦が行なわれた。二月二十日のバリ島沖、二十七日のスラバヤ沖、さらに三月一日にはバタビア沖で海戦があり、制海権は日本のものとなった。勝因は海軍の錬度と酸素魚雷によった。

三月一日にはジャワ島に第十六軍が上陸した。東部のクラガンには坂口支隊が上陸しスラバヤに進軍、西部では第二師団がバンタム湾に上陸し三月五日にバタビア（現・ジャカルタ）を、第三十八師団東海林支隊はエレタンに上陸し七日にバンドンを攻略した。九日に日本軍の前に戦意を失った蘭印軍が第十六軍に無条件降伏した。ジャワ上陸八日後のことだった。

三月二十七日にはスマトラ全島を占領した。

マレーを制圧した日本は米英の中国への物資輸送・援蒋ルート遮断のため英領ビルマに進攻した。

英領ビルマ攻略には第五十五師団の二個連隊と第三十三師団の二個連隊が当初、投入された。三月八日には第三十三師団がラングーンに突入し

た。マンダレー西南イラワジ川東岸のビルマ唯一の油田地帯エナンジョンには三月二十日に第三十三師団が、マンダレーは五月一日に第十八師団が占領した。

日本軍の南方進出によって植民地住民は勇氣と独立の氣運を高めた。日本はインドネシアなどで現地軍創設を援助したが、軍事物資の安定確保のため軍政を敷いたことから容易に独立を認めることはなかった。比島とマレー（華僑）では共產ゲリラなどの活動も頻発し、昭和二十年にはビルマ現地軍が離叛した。日本の敗戦後、インドネシアとインドシナでは再植民地化を狙う旧宗主国との間で独立の戦いが行われた。

セイロン沖海戦、珊瑚海海戦、ミッドウェー海戦

セイロンの攻撃とインド洋の制海を目指したインド洋作戦中の昭和十七年四月九日、日本機動部隊はセイロン沖で英国極東艦隊と戦い空母ハミスを急降下爆撃で沈めた。

五月七日から八日にかけては米濠遮断のため、ポートモレスビー攻略を目指す海軍の機動部隊は米機動部隊と海戦史上初の機動部隊同士の珊瑚海海戦が行なわれ四空も参戦した。また、この海戦は互いの艦を視界の外において戦った初めてのものだった。米空母レキシントンに撃沈、ヨークタウンを大破させるも、日本も空母翔鳳を失った。

この海戦の結果、日本は海路からのポートモレスビー攻略を中止し、陸路からの攻撃に変更したがオーエンスタンレー山脈に補給を断たれ失敗に終わった。

ハワイ海戦で米空母を捉えられなかった日本は米濠遮断を目的にミッドウェー島を攻略、敵空母をおびき寄せ殲滅する作戦をたてた。しかし、六月五日、日本機動部隊は米機動部隊の邀撃に遭い、空母赤城、加賀、飛龍、蒼龍と多くの航空機、ベテラン搭乗員を失う致命的な敗北に終わった。

米海軍の損失は空母一隻だけだった。これは海戦で空母ヨークタウンが行動不能となったところを伊号潜水艦が雷撃したものだ。

ミッドウェー海戦の結果、太平洋戦線の制海権と制空権は米国に傾いていった。この海戦に呼応し北方海域ではアリューシャン攻略作戦が行なわれ、七日に海軍陸戦隊がキスカ島を、八日には陸軍がアッツ島を占領した。

ソロモン諸島の攻防

千歳空陸攻部隊ラバウル派遣隊は十七年三月にルオットに帰還した。

米濠遮断作戦のガダルカナル島に七月から海軍陸戦隊が飛行場を設営中、八月七日に米海兵隊が上陸した。この飛行場を日本はルンガ、米軍はヘンダーソンと呼んだ。米軍の本格的反攻の始まりだった。米軍は日本の重点防御地点を避けながら島嶼^{とうしよ}づたいに攻勢をかける作戦に打って出た。

ガダルカナル島に上陸した米軍は海軍が設営した飛行場を占領、それを奪還しようと八月十八日に上陸した旭川第七師団を主体とする一本支隊は全滅した。一本支隊に続き旭川の川口支隊主力は八月三十一日には島北部に上陸した。

千歳空は、九月に再びガダルカナル島支援のためラバウルに一式陸攻と零戦をそれぞれ一〇機派遣した。川口支隊から要望のあった突撃路啓開のため九月九日から四日間により航空攻撃が実施された。千歳空は木更津空、三沢空とともに参加した。十二日に川口支隊は総攻撃をかけたが失敗した。その後、増援部隊が派遣されるもヘンダーソン飛行場を奪還することはできず、消耗戦に敗れた日本は十八年二月、ガダルカナル島からの撤退を開始し八月に完了した。日本にとっては取り返しのつかない消耗戦であった。日本は米軍の物量に押されていた。

ガダルカナルの攻防では五回に渡る海戦が行なわれた。八月八日の第一次ソロモン海戦において海軍は米濠連合軍の重巡四隻を沈め勝利した。八

月二十四日の第二次ソロモン海戦では空母龍驤^{りゅうしょう}を失ったが、その後、伊号潜水艦が空母サラトガとワプスを雷撃、ワプスは自沈した。

十月二十六日、千歳空本隊はラバウルに進出した。同日、機動部隊同士の海戦となった南太平洋海戦では空母ホーネットを撃沈したが、十一月十二日からの第三次ソロモン海戦では戦艦比叡、霧島を失った。十八年一月にはレンネル島沖海戦で、基地航空部隊が米重巡シカゴを雷撃沈した。

昭和二十九年に発行された『千歳町戦没者写真帳』によると、ソロモン海周辺のガダルカナル・ブーゲンビル・ニューギニア方面における千歳出身将兵の戦没者は陸軍一六人、海軍六人となっている。ソロモン海周辺の島々のなかで最も戦没者の多いのがガダルカナル島の陸軍将兵七人である。投入部隊・兵力にもよるが、一つの島の戦死者数としては内南洋メレヨン島の七人とともに最も多い。また、ガダルカナル島における日本の戦没者数は約二万五〇〇〇と言われ、激戦、かつ大消耗戦のなか、補給を絶たれて餓死・戦病死した者が半数を超えた。

七〇三空・二〇一空と改称

千歳空はガダルカナル支援後の昭和十七年十月には本隊全機がラバウルに進出し、ギルバード攻略作戦に従事した。

十月二十六日、航空隊令が改正され所属基地がなくなり原駐地が指定され、十一月からは作戦航空隊は番号で、練習航空隊は地名で呼ばれた。

千歳空陸攻部隊は第七〇三海軍航空隊（七〇三空）と改称され、原駐地を千歳とした。番号は、百位を機種による部隊の性格、末尾二桁は所属鎮守府、末尾の奇数は常設部隊、偶数は特設部隊を示していた。百位の七は陸攻部隊、〇一から二九は横須賀鎮守府を示し、七〇三とは横須賀鎮守府所属常設陸攻部隊を表していた。

七〇三空は十一月十二日の第三次ソロモン海戦においてガダルカナル

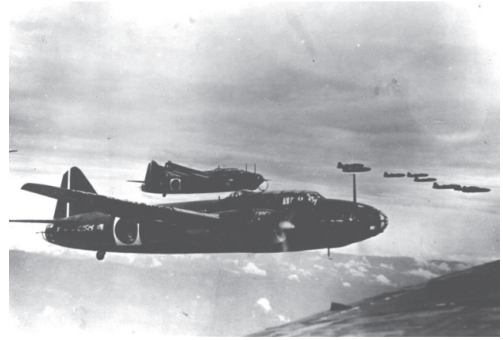


写真6-4 飛行中の1式陸攻「南方の護り我航
空戦隊」と説明がある海軍省許可写真（須賀雄
介提供）

島ルンガ泊地の白昼雷撃戦に七〇七空とともに参戦するなど、ラバウル方面航空攻防戦に従事したが大きく戦力を消耗した。

ガダルカナル撤退後の昭和十八年三月一日、南東方面の航空部隊は航空兵力消耗から統合され七〇三空は七〇一空などとともに現地解隊となった。

機体全体が空に溶け込む明灰白色だった零戦の塗色も昭和十七年秋頃から、低空飛行の場合に上空の敵から発見されにくいよう機体上部を暗緑色に塗り替え視認性を低下させた。塗り替えは激戦のラバウル方面から始まった。戦闘迷彩は洋上においても効果的な迷彩だった。

千歳空戦闘機部隊は昭和十七年十二月一日、ルオット島において横須賀鎮守府所属常設戦闘機部隊二〇一空となり原駐地を木更津とした。百位の二は戦闘機部隊を表した。二〇一空はマーシャル方面の航空作戦に従事した後、十八年六月には米軍のアッツ島侵攻で一時、幌筈島に進出した。まもなくブイン、ブカに転じ、ソロモン、ニューギニア航空戦に従事し撃墜数は約四五〇機に達した。十九年に入るとマリアナ諸島に転戦し再建、その後、ペリリュー基地を経て比島セブ、ダバオへ転戦し部隊の再構築を図った。昭和十八年当時の部隊標識は「WI」、十九年以降は「01」である。

航空隊の終焉

昭和十九年三月四日の改編で、二〇一空は戦闘三〇五、戦闘三〇六飛行

隊の二飛行隊（後に戦闘三〇一、戦闘三二一が加わり四飛行隊編成）となつて以後、比島、マリアナ方面で航空作戦に従事した。

この当時、圧倒的な米軍の物量と戦闘能力の向上、すなわち攻撃目標から遠隔においてレーダー・無線に呼応する戦闘機の迎撃に対して、日本の攻撃隊はなすべを失ってきた。劣勢な日本の航空戦力による通常の航空攻撃では消耗を重ねるだけで、敵艦隊に効果的な打撃を与えることが困難になってきていた。組織的な戦闘が不可能になった航空戦力で局面を開、大きな戦果を上げることができた方法として神風特別攻撃隊（本来は「神風」と読む）が編成された。数千の有為ある若人が帰らなかつた。

十月二十五日、比島沖海戦のさなか海軍兵学校七十期・二〇一空戦闘三〇一飛行隊分隊長の関行男大尉以下五名が、第一次神風特別攻撃隊敷島隊としてルソン島マニラ北方約一〇〇キロのマバラカット基地を二五〇キロ爆弾懸架の零戦で四度目の出撃を行なった。関大尉以下は比島東方海面を索敵しつつ南下、レイテ湾スルアン島付近において敵空母群を発見し突撃、初の特攻に成功した。護衛空母セント・ローを爆弾庫誘爆から轟沈、同カリニン・ベイを大火災によって撃破という戦果を挙げた。その後、特攻は一般的な戦法となった。二〇一空では二〇〇名以上が特別攻撃で米艦艇へ突撃した。

昭和二十年一月九日、米軍がルソン島リンガエン湾に上陸した日、二〇一空は飛行隊を台湾に移動させ航空機を持たない陸戦部隊となってクラーク基地西方の山中にたてこもって敗戦を迎えた。

敗戦時の所属は南西方面艦隊二十六航戦だった。

参考文献

守屋憲治『北の翼―千歳航空史―』みやま書房 一九八五年／小林栄光『軍艦旗

を省みて』一九七八年／斉藤兼之助『海軍かまたき出世物語』講談社 一九八三年／水路部『海軍航空基地資料 第一』一九四二年／防衛庁戦史室『戦史叢書31 海軍軍戦備(1) 昭和十六年十一月まで』朝雲新聞社 一九六九年／森田義育『真駒内清談第三号』北海道河川防災研究センター 一九八八年／酣燈社『太平洋戦争 日本海軍機』一九七二年／大平吉郎『美幌空の思い出』／小西良吉『中攻隊のサムライたち』『海軍中攻史話集』中攻会(安藤信雄) 一九八〇年／美幌町『美幌叢書 美幌海軍航空隊』一九八三年／中攻会編『ヨイ、テッ！海軍中攻隊、かく戦えり』文芸春秋 二〇〇五年／『昭和十六年十二月千歳空飛行隊戦闘行動調書』防衛省防衛研究所 JACAR(アジア歴史資料センター) Ref C08051593800／酣燈社『日本海軍戦闘機隊』一九七五年／毎日新聞社『一億人の昭和史 3 太平洋戦争』一九七六年／千歳町『千歳町戦没者写真帳』一九五四年

第二項 第二・第三航空基地の建設

第二・第三千歳の建設の背景

基地の用地は千歳飛行場拡張の折、トラクターを貸し出した大阪マルキパンの小麦粉供給農場であった水谷農場の跡地だった。農場は昭和十(一九三五)年に立地、大農式で五二五〇反のうち二五〇〇反を施業し、使用人は一五人程度だった。昭和十二年四月の北海道西部海軍飛行場適地調査の千歳地区第一候補地でもあった。

水谷農場はパンの原料となる小麦粉を生産することを目的に営農したが、シユクバイ(祝梅)の地質は酸性が強く、昭和十二年から一〇〇町歩をじゃがいもへと転換、澱粉の原料を生産するに至った。さらに、十五年になると反収は減少、水質の悪化から澱粉は等外となり、生産の継続は困難になった。このようことから海軍に土地を寄付、偽装飛行場にでも使っ

てもらえたらとの考えから海軍用地となったものである。

ミッドウェー攻略作戦に呼応するアリューシャン攻略作戦で占領したアッツ島、キスカ島への米軍の反攻が予想される千島列島方面で米軍に對抗する兵力を保有する必要があるが、急速な増勢整備には無理があった。渡洋航空兵力を主とし、攻撃と対潜能力を充実させるべく航空基地を整備する必要があった。

海軍は航空機整備に力を注いだ。第一線においても既設基地から攻撃隊を発進させるという観念が強く、激しい航空攻防戦が行われるという観念がなかった。飛行場の急速整備についても特に問題視していなかった。

しかし、開戦後のソロモン海方面において航空攻防戦が行われた結果、戦略上有利な展開をしようにも、航空基地が設営力の不足から思うように建設できず、航空戦では不利を強いられた。一方、使用中の基地は敵の空襲で使用不能に陥り、飛行場の分散、秘匿を考えなければならなくなり、はじめて第一線航空基地が必要とする条件を認識した。

第二・第三千歳の建設(十八年まで)

千歳空の小林栄光は、昭和十七年十一月にソロモン諸島の攻防で疲弊した陸攻隊とともにタロア島から原隊千歳に帰還した。

このとき、残置していた同僚から「鉄道の東側に新しい滑走路ができたのを知っているか」と新しい滑走路のことを教えられた。

延長、幅員ともに不明であるが滑走路としての存在は明確である。

第二千歳航空基地(第二千歳)滑走路は後に五〇〇メートル延長して一三〇〇メートルになった経緯があることから、この時点の延長は八〇〇メートルと推定できる。当時の海軍飛行場滑走路の延長は、戦闘機用で八〇〇メートル、陸攻用で一三〇〇メートルが標準であった。

小林はその後、千歳空戦闘機部隊を改編した二〇一空の宣撫班に転出し

ていることから昭和十七年既設は確實である。

昭和十八年五月十六日付機密大湊警備府命令第五十六号で、千歳（乙）航空基地施設工事の担任委員を定め、飛行場建設準備に着手した。

十八年九月三十日付大陸指第六百五十一号で大本営は、千島方面に対する米軍の攻略は十九年春以降と考えられること、ソ連の対日戦回避の態度は変わらないと判断されるが米国への基地提供について引き続き警戒を要するとの理由で、北東方面作戦陸海軍中央協定を示した。その目的は、千島列島、北海道等の本土を陸海軍共同して防衛するとともに、アリューシャン方面において敵を撃滅することとされた。

この作戦要領に「陸海軍ハ夫々航空基地（略）等ノ整備、配備ヲ極力強化ス」とし、航空の部では次のようにされた。

シ 陸海軍ハ極力航空戦力ノ統合（略）航空作戦任務ノ分担ヲ定ムルコト左ノ如シ

敵艦船攻撃 洋上哨戒 対潜警戒 航空撃滅戦 ー海軍主担任・陸軍援助
地上戦闘協力 要地ノ防空 ー陸軍主担任・海軍援助

〔戦史叢書44〕

基地の管理整備及び地上防空は、主用軍が担当し副用軍も協議の上施設の使用が可能となった。さらに、陸海軍は既設基地のほかに多数の基地を整備し、米軍進攻に対する防衛力を強化するに至った。

北東方面航空基地使用区分表の千歳基地については次のとおりである。

北海道方面

千歳第一 現状ー既設 海軍主用陸軍副用 設定担任ー海軍
千歳第二 現状ー設定中 海軍主用陸軍副用 設定担任ー海軍
千歳第三至第五 現状ー新設 海軍主用陸軍副用 設定担任ー海軍

〔戦史叢書44〕

平成六年に発行された『郁水五十年ー東京商科大学学部昭和十九年卒業五十周年記念文集として』に、昭和十八年の夏季休暇を返上して千歳市街地の東方で飛行場建設の勤勞奉仕に従事した後藤隆之の「一橋北遣隊と千歳空港」がある（東京商科大学は後の一橋大学）。

昭和十八年七月七日

午前十時、本館大教室で開会した学生大会は超満員で興奮のつぼと化した。内々伝えられていた情報では、当局指令による勤勞奉仕が近く一橋に伝達されるという。総務部（略）が、文部省命令によるものではなく、有志参加による自主運動の形を作ろうとした大会だった。太刀川学生課長の声涙共に下るご報告のあと、議論沸騰。（略）頃あいを見て、私が永井に「決議文を提案するか」と小声でいうと「よし！」という答えが返った。急いで私が名刺の裏へ書きなぐったものを握って、彼は登壇した。

〃決議

一橋ハ荣誉アル国家ノ要請ニ応ジ、全学ヲ挙ゲテ北海道ニ出勤セン
昭和十八年七月七日

東京商科大学学生大会

永井が涙を流して絶叫し、満場起立、拍手で可決、多くの者も涙を流していた。（略）八月十日、北遣隊有志三五〇名は、（略）上野駅を出発。（略）我々は千歳駅まで行きトラックに分乗して千歳の原野に到着したのは十二日午後三時半だった。宿舎は楸松荒削りの用材で仮設したいわゆる飯場。附近は一面の白樺の木立と月見草の黄色い花が目立った。

工事は、幅四十メートル、長さ千メートルの誘導路建設だった。勤報隊の編成は、二年生（我々の学年）を第一中隊、一年生を第二中隊とし、両中隊とも四個小隊に分かれており、作業全般と宿舍生活は総務部が「作業班」の名で統轄し（略）作業一切は軍の指導を断り、我々学生の自主活動の許可を

得た。

八月十四日作業開始。与えられた器具は、鎌、鋸、鉋、鉋、鋤、鋤、槌、シャベル、モッコと担い棒位ですべて人力による素朴なものばかりなのに驚いた。前半期の作業は原野の伐開、抜根、表土除去であり、後半期は土砂運搬による道路建設で、蟻の如くモッコを担ぎ、いのししの如くトロッコを押した。(略) 九月に入ると、朝、草原に霧が流れ、草を踏む地下足袋の濡れる日があった。残業が始まった。一日に十一時間労働となり、学友の疲労が明らかに見られた。(略) 六日(略) 午後二時半第二中隊の工事が完成し、バンザイの声があがった。(略) 午後四時半、第一中隊も完工。(略)

作業現場で完工式を挙行。はるか母校の方向に向かって一橋会歌を斉唱しはじめたとき、夕陽の輝きの中をさんと雨が降り、後方に虹が立った。(略) 式後第一中隊は、うちつれて千米の誘導路を歩いた。(略)

七日朝、我々作業班一同は、いとおしいような気持ちを抱いて完成した誘導路を歩いた。澄んだ空に、赤蜻蛉が無数に散り、林間に開かれた路一筋が、はるかまで白く光っていた。

九月八日午前四時すぎ、千歳を後にした。(後略)

トロッコは中隊に六台が割り当てられた。作業現場は、白樺、トチなどの雑木帯と草原の交錯した一畝程度の起伏がある原野であったことが手記から解る。また、作業では永続しない旦那さんの一過性の頑張りという意味から「ダンナで行こう!」という合言葉が流行ったという。

作業状況の視察も数回あり、大湊警備府の参謀長に同行した須田圭三中佐による講話「航空決戦」もあった。須田中佐は少佐当時の昭和十二年、北海道西部における海軍航空基地適地調査報告後に来千、飛行場用地の寄付について村の意向を打診した士官だった。

また、『郁水五十年』とは別に『東京商科大学卒業記念写真』という昭

和四十九年に発行されたアルバムがあり、緒方喜一が持参したカメラで撮影した千歳での写真が多く収録されている。

北遣隊が千歳で作業をしていた昭和十八年八月二十八日、大湊警備府から「水谷航空基地(仮称・千歳第二基地)施設工事施工の訓令」が出されている。一〇〇〇畝の誘導路は第二千歳の平行誘導路として造成され、昭和十九年頃に「南北道路」と呼ばれた第三千歳航空基地(第三千歳)滑走路の原型であった。

第二(連山滑走路)・第三千歳の建設(十九年以降)

昭和十九年四月十三日には北東方面作戦陸海軍中央協定に準じ、航空作戦を中心とした北太平洋方面陸海軍指揮官協定が取り決められた。

供用航空基地使用区分表には次のようにある。

北海道方面

陸軍主用 海軍副用

帯広 計根別 苫小牧 札幌 浅茅野 沼ノ端 敷生 八雲

海軍主用 陸軍副用

第一美幌 第二美幌 第一千歳 第二千歳 根室(中標津) 小清水

(『戦史叢書29』)

この時点においての第二千歳の性格について、昭和十九年五月に七〇一空整備分隊長となった角信郎は『中攻と共に―中攻とともに戦った一年―



写真6-5 第2千歳に到着した東京商科大学の学生(昭和18年・緒方基一撮影)

北千島から比島まで』で「七月になって千歳基地の予備飛行場であった第二千歳飛行場に原因不明のエンジン停止で緊急着陸した一式陸攻があった」と記している。

一式陸攻が着陸していることから、この時点で第二千歳の滑走路延長は、昭和十七年建設の八〇〇^{メートル}に五〇〇^{メートル}の延長工事を受け一三〇〇^{メートル}滑走路になっていたと考えられる。滑走路はコンクリートで舗装され、迷彩塗装が施された。

昭和十八年七月、札幌・川沿の札幌硬石（現・ハラダ産業）が建設資材生産場として軍に接収された。接収理由は千歳・シユクバイに建設される大型機用滑走路の路盤強化に碎石を敷き詰めることにあるとされた。

千歳において家業である木炭製造に従事していた北岡体一は当時二九歳だった。炭焼きには馬が必要で二、三頭の馬を飼い、千歳荷馬車組合の副組合長を務めていた。組合員は一〇〇名ほどであり、一〇〇台ほどの荷馬車があった。第二千歳設営のため荷馬車とともに海軍に半徴用となり、千歳駅に到着したセメント、骨材、鉄材、木材等の運搬に従事した。十八年末からは札幌・恵庭の業者も加わり荷馬車は三〇〇ほどになった。大湊海軍施設部長からの発令で待遇は輸送副官、敗戦まで陸軍からの召集はなかった。

前年の昭和十七年、海軍は四発の陸上攻撃機「連山」（十七試陸攻・G8N）の試作を中島飛行機に命じた。海軍は中島に、総火力が米陸軍のボーイングB-29スーパー・フォートレス（超・空の要塞）爆撃機より大きく、爆弾搭載力は最大四^トとボーイングB-17フライニング・フォートレス（空飛ぶ要塞）爆撃機を上回り、最大速度は五九三^{キロ}の大型爆撃機である大型攻撃機（大攻）を要求した。

昭和十九年六月十五日、米軍はサイパン島に上陸、マリアナ沖海戦では

空母大鳳^{たいほう}、翔鶴^{しょうかく}、飛鷹^{ひよう}と多くの航空機と搭乗員を失った。八月初めまでにマリアナ諸島の島々サイパン、テニアン、グアムが玉砕した。米軍は手中としたマリアナ諸島のアスリート飛行場などを拡張整備し、B-29の基地とした。これまで成都から飛び立ったB-29は北九州までが爆撃の限界だったが、北関東までを爆撃対象とした。絶対国防圏は崩壊した。

連山は群馬・小泉（現・大泉）の中島飛行機小泉製作所で試作（試製）されていたが、訓練と敵地爆撃への発進はB-29の行動半径外、つまり東北・北海道地方の必要があった。千歳はまさに連山基地の適地であった。海軍は第二千歳の整備を急ぐこととなった。

第二千歳には昭和十九年十月から国鉄の貨車を使った碎石輸送が始まり、定山溪鉄道東札幌駅を経由し一日に一八両編成を二列車運行した。

千歳駅から第二・第三千歳への引き込み線建設資料は見出せないが、九月末に完成、すぐに採石輸送が始まったと考えられる。

昭和十八年夏に東京商科大学北遣隊が建設した一〇〇〇^{メートル}の平行誘導路を基に、延長一二〇〇^{メートル}幅七五^{メートル}の簡易コンクリート舗装の第三千歳滑走路として完成したのは十九年であろう。二十年春から始まる第二千歳の工事開始時までには完成していなければ、第一千歳航空基地（第一千歳）の代替機能が失せるからである。

簡易コンクリート舗装とはソイルセメント（ハロー）方式と呼ばれる表土コンクリート舗装である。火山灰地である千歳ならではのもので、表土を剥いだ後、現場で火山灰とセメントをハローで混ぜ散水、六トンローラーで転圧し硬化させた。

昭和二十年の第二・第三千歳の様子は、技術士官として大湊海軍施設部六〇三分隊に所属していた井上公資が記した「千歳第二基地と設営隊」に詳しい（海軍技術浜名会編『最後の海軍技術士官―浜名風』収録）。海軍施設部

とは十八年八月にこれまでの建設部を改称したもので、開戦以降全ての設営工事は施設部直営だった。

昭和二十年五月二十七日、海軍記念日。この日、私は大湊で数日後の北海道進出を控え、五七一設営隊編成に追われていた。隊長は一期先輩の天海大尉（建築）、私が副長。浜団一〇四分隊飯飯野洋は一中隊長である。六百三十名の下士官、兵を預かる私は責務の重たさに目も血走っていた筈である。（略）三十日大湊要港を後にジグザグ航行で小樽に一夜かかって到着。我が五七一設営隊は空母「信濃」（遠州灘沖にて十九年秋被雷、沈没）の生き残りの下士官、兵、戦艦「長門」からの転属のチャキチャキの兵を除けば、大半は横須賀で召集された第二国民兵、二等水兵である。（略）

千歳での設営は、新緑輝く六月初めから始まった。当時千歳は北東方面海軍航空基地として第一、第二、第三と三つの基地がつながっていた。我が隊は第二基地の滑走路延伸、誘道路工事が主任務である。この滑走路は長さ千三百米のものを、両端六百米ずつ延ばして二千五百米とし、当時日本で最長のものであった筈である。八月十五日が目標日とされ、昼夜分かたぬ突貫工事が続けられた。当時完成したばかりの中島四発爆撃機（B-29）に対抗して連山の出撃基地として作用せしむるものであった。（略）

八月に入って、緊急の報道管制が達せられ、部外との通信連絡は禁止された。天雷作戦と称された陸海軍協同のサイパン殴り込み作戦演習の為であった。我隊が滑走路南端に急造したB-29木製原寸型に対して肉薄攻撃の訓練が開始され、滑走路では当時残存のダグラス輸送機、MC20輸送機、96陸攻が次々に達着訓練を繰り返しており、愈々の時が身近に迫ってきた思いに身も引き締まり、十五日の工事完成に努力するのであった。（略）

工事完成の十五日、連日の奮闘に対し些かの完成祝いをしようと、烹炊員は早朝から赤飯の準備に余念がなかった。正午の玉音放送は滑走路脇整備棟

のスピーカーから雑音交じりに流れた。セメントと汗にまみれて整列する作業員は、聞き終わって涙と、安堵の交錯した何ともいえない複雑な表情で立ちつくしていた。黙々と残る作業の仕上げにあたったが、三時終了予定は大幅に遅れ、叱咤激励の揚句、完成した。唐松林に散在する半地下三角兵舎に戻った時は、もうすっかり夕暮れており、遅い夕食が配られた。

国内最長の二五〇〇呎滑走路は、皮肉なことに玉音放送の後、国内的には戦争が終わってから完成した。

井上はバスで基地内を巡回中に開戦時の海軍報道班長平出大佐を目撃している。この当時、平出大佐の職名は北海軍需管理部長だった。

第二千歳の設営には兵のみで編成された第五七一設営隊のほか、日本人と朝鮮人の徴用工で編成された大湊海軍施設部第二〇一部隊と第二〇二部隊が従事した。二〇一・二〇二部隊は施設部が直接雇用した工員部隊で身分は軍属だった。このほか請負業者のタコ部屋の朝鮮人労働者もいた。

五七一設営隊は主に誘導路と掩体壕の設営工事を担当、二〇一部隊は航空廠の分散工場建設などトンネル工事に、二〇二部隊は第二滑走路の延伸にあたった（五七一設営隊は敗戦時六三七名の組織だった）。

二〇二部隊の技術員だった熊谷昭は滑走路建設の様子、宿舎の配置などについて「滑走路建設の最終段階では延伸部分に六条のレールを敷き、端に向かってミキサートロッコで生コンクリートを運び、打設していきました。コンクリートの厚さは、延伸部分は一〇センチぐらいの厚さでした。既設の部分はわかりません。部隊の宿舎は二基地の営門付近（現・東千歳駐屯地正面付近）南長沼用水路市街地側でした。営門に向かって、二基地通り（現・東大通（師団通り））の右側手前から軍馬の厩舎、日本人宿舎二棟があり、宿舎の裏に食堂がありました。左側の手前に国旗掲揚塔がある広場、道を挟んで朝鮮人宿舎が並び、その奥に病舎がありました。朝鮮人徴用工

は二千二百人以上で、日本人徴用工は四、五十人ほどでした」と証言した。

千歳に、朝鮮人徴用工の労務者がどの程度いたのかの実態を明らかにする資料を見出すことはできない。北海道保健福祉部保護課が発行した『北海道と朝鮮人労働者―朝鮮人強制連行実態調査報告書―』に、千歳航空基地に関し特筆すべき記述はない。

朝鮮人労働者の内地移入動員は、長期化する戦争で多くの労働者が出征し、その空白を埋めるものであった。昭和十四年、国家総動員法に基づき内地において国民徴用令が施行された。生徒・学生は勤労働員、未婚女性は女子挺身隊として工場で働いた。朝鮮においても十四年から募集という動員が始まり、十七年からの官斡旋に続いて十九年九月からは徴用となった。二十年四月には対馬海峡に米軍が機雷を投下・敷設、掃海が間に合わず、関釜連絡航路の安全が維持できないことから朝鮮人の内地移送は休止となった。

平成八年八月に北海道新聞千歳支局の中川大介が訪韓、国内取材とあわせ特集記事「幻の滑走路 強制連行―51年目の夏」を五回にわたって連載した。記事は、千歳に来た二人の朝鮮人を軸に展開されている。共に二〇二部隊に所属していたとみられる。「幻の滑走路」とは、第二千歳・連山滑走路のことである。

一人は、ソウル市内で日本人観光客に日韓の歴史を語る劉載晃^{ユ・ジェファン}である。

慶尚北道出身の劉は、昭和十九年八月に京城^{けいじょう}で徴用され、三〇〇人ほどで来千し、主として第二基地周辺で滑走路、誘導路の造成に従事した。また、劉の話として請負土建業者のタコ部屋の朝鮮人労働者は、薙^{むしろ}で体を覆う悲惨な姿もあったという。劉は、二十年四月に千歳を離れている。

あと一人、安慶南^{アン・キョンナム}の話では、故郷全羅北道にいた昭和二十年四月に徴用通知が来て五月に七〇〇―八〇〇人と共に来千し、朝鮮人徴用工の健康管

理を担当していたという。安は敗戦まで千歳にいた。

記事で、大湊海軍施設部千歳第二基地施設工務所に勤めていた元女性事務員は「第二基地周辺に朝鮮人徴用者は二〇〇人ほどいました」と証言している。

熊谷昭（前出）によると、現在の青葉丘（北海道中央バス・千歳営業所青葉車庫向かい）に日本人徴用工を主な客とする公娼があった。木造で外壁をピンク色に塗っていた。先述の記事で安は、従業員は七、八人で全員が朝鮮人であったが、朝鮮人徴用工は入店できなかったと述べている。

第二千歳の施設として昭和十九年に完成した木造格納庫二棟のほか、無蓋掩体壕一二六基（含・第三千歳）、指揮所が二カ所あった。

第二千歳の南長沼用水路西側には、士官舎群、兵舎群、設営部隊の宿舎、兵員烹炊場、自家発電所、送受信所、各科倉庫、自動車庫、病舎等があった。第三千歳の東側・遠浅川の北側にも魚雷庫、除雪車庫、二三の燃爆庫、隧道、浴場のほか、兵員烹炊場、各科倉庫、自動車庫、病舎等があり、第二滑走路北端東側には工場地区、燃爆庫、送信所、隧道等があった。

このほか、搭乗員用の日輪兵舎が地形に合わせて散在していたという。日輪兵舎は直径一〇メートルほどの円形で二〇名程度が寝起きできた。

なお、戦中から米軍は第二・第三千歳を、基地設営前の農場名からミズタニ・エアベース（水谷航空基地）と呼んでいた。

第四、第五千歳が計画され、一部工事に着手したといわれるが、未だその存在は確認されていない。

また、第一千歳と第二、第三千歳が敵の空襲等によって、いずれかが使用不能に陥っても相互補完し一帯的運用が可能になるよう、第一千歳と第二千歳の間に四三二一^しの戦闘機用板敷誘導路（連絡運搬路）が設営された。第一千歳横滑走路東端から現在の南千歳駅舎地点で千歳線を越え、第

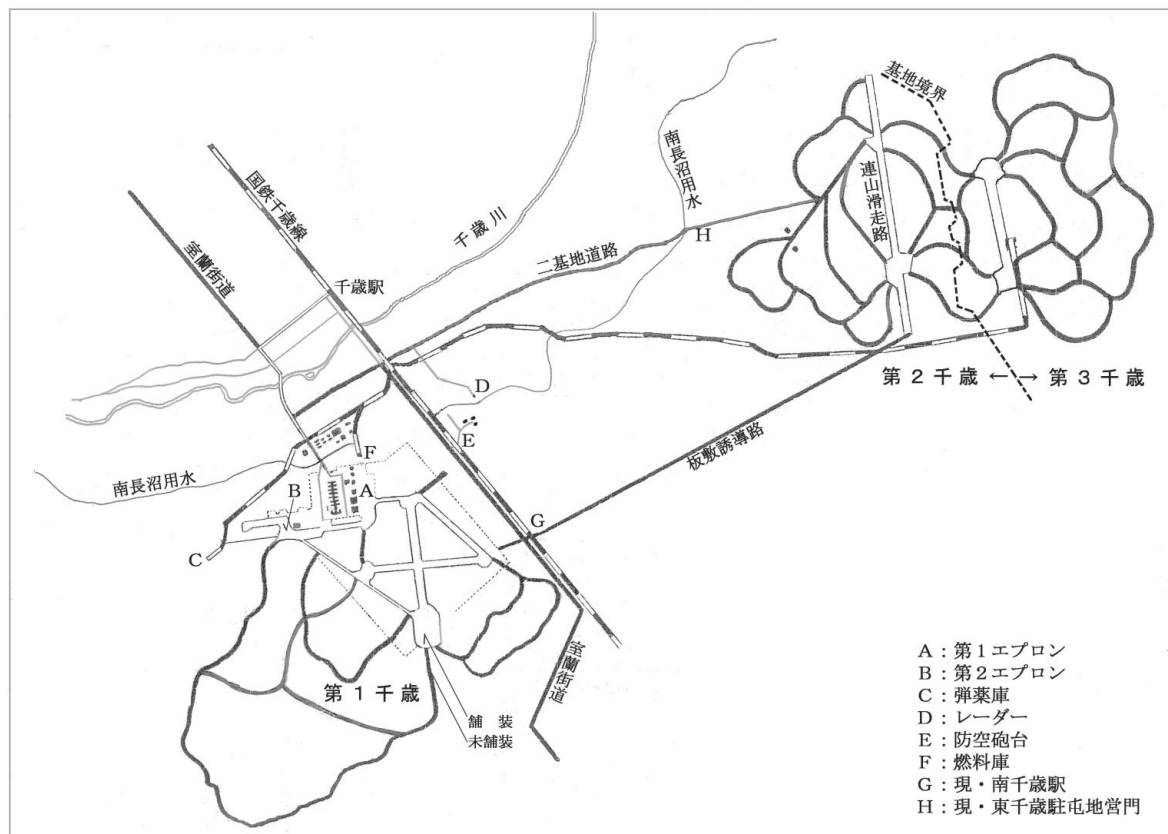


図6-2 昭和20年航空基地位置図(守屋憲治作図)

二千歳滑走路南端を直線で結んだが使われることはなかった。陸軍計根別第四飛行場(現・航空自衛隊計根別飛行場)、札幌第二飛行場の板敷滑走路の例をとると、整地面に五寸角(計根別)又は三寸角(札幌)を並べ、その上に三寸(厚)×一尺(幅)の平割を敷き詰めた。角材、平割りともに長さは一二尺でT字・三又の銚^{かすがい}で連結されていた(一尺一〇寸三〇・三セシ)。

第二千歳が国民に知られたのは、全国共通紙面の二ページ立て昭和二十年九月二十一日付北海道新聞一面の囲み記事だった。

米本土爆撃企画 四発の超大型機既に四機完成 北海道に巨大な飛行場

米国防進駐軍が十九日発表したところによれば日本はB29に匹敵する四機の大爆撃機用として北海道に巨大な飛行場を建設していた、その使用滑走路は八千四百フィートであるがこれにより日本が超爆撃機を片道飛行させて米本土の爆撃を企画していたことは明らかである、この爆撃機はすでに四機製造されていたといはれているが片道ならばニューヨーク、デトロイト、シカゴに達し得るものであったといふ

記事中、「四発の超大型機」とは陸上攻撃機連山であり、「北海道に巨大な飛行場」とは第二千歳をさす。八四〇〇フィートは、メートル換算で二五〇〇である。第二千歳の長大な滑走路は連山離発着のために設営されたことから、戦後、今日に至るまで「連山滑走路」と一般的に呼ばれている。

連山試製初号機は米軍の関東地方への爆撃で遅延したが、昭和十九年十月ようやく進空した。初号機と二号機はいずれも三沢基地で米軍の攻撃によって喪失した。三号機は未領収のまま群馬・小泉で米軍に爆撃された。

四号機は敗戦後、米陸軍技術航空課本部セオドル・T・ブランテージ大尉によって小泉で発見された。米軍の指示で組立作業を継続、十二月七日に完成し追浜飛行場に日本人操縦士によって空輸された。空母ボグーに

搭載され米本土ニュージャージー州ニューワーク（ニューヨーク近郊）に送られ、二十一年六月二十三日に試験飛行を受けた。約一八〇〇^{ポンド}で離陸、速度二五八^{キロ}で巡航、一九〇分の飛行でライト・パターソン（オハイオ州デイトン）に到着した。その後、もう一回・一時間程度の試験飛行を受け、参考資料として不適となり廃棄された。

戦時急造の第二千歳滑走路コンクリート厚は一〇^{センチ}程度で札幌・石山の碎石と相まって強度を保った。滑走路の強度に関するエピソードがある。

昭和三十六年四月三日、雲高一〇〇〇^{メートル}、雲量四割程度の視界不良の中、乗客七十二人を乗せ千歳飛行場と誤認した日本航空のダグラスDC-7Cシテイ・オブ・サンフランシスコ（JA6301）が管制の許可を得ずに残雪の残る第二千歳滑走路に着陸した。DC-7はB-29とほぼ同規格であり、翌日、航空自衛隊第二航空団の支援で何の支障もなく羽田に帰った。

引用・参考文献

防衛庁戦史室『戦史叢書29北東方面海軍作戦』朝雲新聞社 一九六九年／守屋憲治『北の翼―千歳航空史―』みやま書房 一九八五年／郁水会『郁水五十年―東京商科大学学部昭和十九年卒業五十周年記念文集として―』『東京商科大学卒業記念写真』一九九四年／井上公資『千歳第二基地と設営隊』海軍浜名会編『最後の海軍技術士官―浜名風』一九九四年／大湊海軍施設部『第二、第三千歳航空基地位置図（二万分の一）』一九四五年／ロバート・C・ミケッシュ『日本最後の四発重攻撃機―中島試作陸上攻撃機「連山」―その飛行記録のすべて』文林堂『航空ファン』昭和五十七年九月号 一九八二年

第三項 航空基地の動き

第四十一海軍航空廠

千歳には昭和十四（一九三九）年の海軍航空隊の開庁に伴い、航空機及び航空兵器類の修理や補給支援を円滑に推進するための、海軍直轄の軍需工場である第四十一海軍航空廠が所在した。

昭和十六年九月海軍航空廠令が制定され、大きな修理補給施設、いわゆる航空機工場としての新設航空廠が設置された。新設航空廠は番号を冠し呼称され、五個航空廠と四個支廠が各地に開設された。千歳基地には、木更津所在の第二海軍航空廠（大湊）支廠千歳分工場が設置された。

航空廠令第二条には「海軍航空廠ハ鎮守府又ハ警備府ニ属シ」とあり、千歳分工場は大湊警備府の管区であった。大湊は明治の頃から軍港として有名であった。明治三十五年に大湊水雷団が設置され、日露戦争後の三十八年には大湊要港部となり、北日本随一の海軍の拠点となっていた。

昭和十七年四月、大湊支廠は第四十一海軍航空廠（第四十一航空廠）となり、十九年四月には千歳分工場が支廠に昇格し併せて定員が改定された。当時の定員は表6-6のとおりである。

同年十月には組織の改編があり、千歳支廠が航空廠本廠へと発展し大湊が支廠となった。分工場は従来どおり美幌と三沢に置かれた。

千歳の航空廠が分工場から支廠、本廠へと発展していった背景には、当時の海軍作戦の用兵上の理由によるとされる。

千歳の航空史に詳しい守屋憲治は「千歳

表6-6 第41海軍航空廠士官等定員

	第41海軍航空廠（本廠）	千歳支廠
士官、高等文官	23人	12人
特務士官	5人	2人
下士官	9人	5人
判任文官	18人	9人
合計	55人	28人

本廠（大湊）には三沢分工場要員を含み千歳支廠には美幌分工場要員を含む（飛内進『太平洋戦争下の大湊警備府』より）。

が美幌と大湊の中間点に位置すること、海軍第一段作戦（ハワイ・南方攻略）に次ぐ第二段作戦（ポートモレスビー・ミッドウェイ・アリューシャン攻略）を実施するにあたってアリューシャンⅡ北東方面海軍作戦における航空兵力の後方支援基地として可動率の向上を目指し、航空機の被害修理を行う工場が必要であったのだろう」と指摘している（守屋憲治『北の翼―千歳航空史』）。また当時北海道には、千歳に三カ所、美幌に三カ所、標津に二カ所、根室に一カ所、合計九カ所の航空基地が建設される予定であったこともあり、千歳の本廠化は整備の迅速化と効率化を図るためにも必要であった。

本廠化の準備は昭和十八年早々から進められた。十九年九月から大湊の総務、庶務関係の本部機能の移動が始まり、北海道出身者の工員と基幹要員が千歳に移り本廠の開設備に従事した。

昭和十九年後期には、国内に航空廠一〇、支廠一、分工場一二、補給工場五八を数えるにいたった。

（一）組織と業務内容

規模の大きな航空廠には総務部、器材部、航空機部、医務部があり、その下に各科が設置されていた。千歳は第四十一航空廠の本廠とはいえず実質は大湊からの分離であり、また美幌、三沢に分かれていたことから単体の規模としては本州の航空廠より大きくはなかったようである。

また、一部の航空廠及び海軍工廠は飛行機等の生産を行っていたが、海軍は航空機等の生産の多くを民間に依存しており、千歳の航空廠では主に航空機及び航空兵器類の補給・修理を担当し、飛行機等の生産は行っていなかった。

千歳における組織は総務科、会計科、兵器科、発動機科、補給科、飛行機科、医務科そして工具養成所から成っていた。

千歳分工場設置当初は大湊工作部飛行機科から工員が出張して整備していた状況であった。大湊海軍工作部記念誌『北の槌』に、当時飛行機科の工員であった者の記述がある。

北海道への出張は一年のうち、数か月間におよんだ。各基地は開隊直後であり大湊工作部が、美幌、千歳、三沢、大湊の各航空隊の造修支援を全面的に担当した。大きな改修工事等の場合は、横須賀や民間会社から関係者がきていたが、小修理は飛行機科の関係部門が数名のグループとなって、約二週間位の予定で巡回修理のような方法で出張した。この出張作業は、第四一航空廠が開庁し本格的に操業するまで続いたと記憶している。

（二）規模と位置

終戦時の第四十一航空廠従業員は軍人、軍属あわせて約八〇〇〇名という大所帯であった。内訳は千歳本廠が三五二八人、大湊支廠で三四八三人といわれる（飛内進『太平洋戦争下の大湊警備府―下―』）。美幌・三沢の分工場の人員が不明であるが、地域的にみれば千歳と美幌、大湊と三沢で括られていると考えて良いのではないか。『史話 美幌海軍航空隊』には、美幌の航空廠の従業員は約一三〇〇名という記述があることから、この数を差し引くと千歳の従業員は約二二〇〇名ということになる。基地全体の規模的には妥当といえようが、当時の千歳の町にとってはまさしく大工場であった。

千歳の第四十一航空廠施設は、海軍航空隊基地の北側に建設された（図6-13）。

図の中央部に千歳線から滑走路方向へ分岐した引き込み線（現在その跡地は国道36号に利用）が通っている。この引き込み線を中心に北側にママチ川、南に南長沼用水が流れている。このママチ川と南長沼用水に挟まれた区域に航空廠施設が集中している。図中でも修理工場などの大きな建物



図6-3 航空廠施設の位置(国土地理院5万分の一地形図：昭和39年8月複製版より)
中央の網掛け部分が施設区域である。図は一部修整している。

を確認できる。この航空廠施設の一部は現在も航空自衛隊が使用している(写真6-6)。

航空廠施設と航空隊基地施設は南長沼用水と有刺鉄線が張られた柵で隔てられ、相互の往来には営門又は基地エプロンから航空廠工場までの誘導路を利用した。航空隊基地の者は航空廠へ自由に入出りできたが、航空廠から基地へは自由に行くことはできなかったという元航空隊整備兵の話がある。このことに関して、航空廠に勤務していた元工員は「我々は基地格

納庫によく出入りしていました。ただ、女子挺身隊の人達は基地には行かなかったようです」と話す。

元挺身隊員の話でも、一般の女子挺身隊は勝手に行くことはなかったが(例外として、飛行機課の縫工の挺身隊員は機体修理のためよく行った)、一般工員や軍属は自由に往来していたという。

ちなみに廠に勤務する者は、第四十一海軍航空廠を「四一空廠(ヨン・イチクウシヨウ)」と呼んでいた。

女子挺身隊

昭和十三年四月、「国家総動員法」が公布され五月に施行された。この法律は政府が戦争遂行に際し各種の統制を行えるとし、必要と認めた時には国会審議を一切行わず勅令、省令によってこれらの措置を講ずることができるとする包括的委任立法であった。

日中戦争の戦線の拡大とともに、軍は大規模な動員を行い、その結果生産現場では基幹労働力が奪われる形となった。一方では軍需工場の労働力需要は増加するばかりで、労働力不足は深刻な状況となっていた。

このため政府は昭和十四年七月には「国民徴用令」を施行し、国民総動員政策を推し進めた。また、新たな労働力の供給源として無職者や新規学校卒業生、特に女性を労働力の主要供給源として動員する計画が作られ、十七年十二月「国民勤労報国協力令」が施行された。この法令によりこれまで任意と位置づけられていた勤労奉仕から、一四歳以上四〇歳未満の男



写真6-6 現存する旧航空廠施設

子と一四歳以上二五歳未満の未婚女子に国民勤労報国隊への動員が義務づけられた。

昭和十八年に入ると連合国は反攻を強め、生産力増強、とくに航空機産業における労働力の充足は急務となった。九月に厚生省は「男子就職の制限に関する件」を閣議決定し、一七の禁止職種を指定し、一四歳以上四〇歳未満の男子の従業を制限するとともに、さらに女性だけを対象にしてより長期的に動員するため、「女子勤労動員促進に関する件」も同時に閣議決定された。

動員の対象となる女性は、一、新規学校卒業者、二、一四歳以上の未婚者、三、整備されるべき「不急不要学校」の在学者、四、企業整備による転出可能者とし、女子の特性に適応する職種、特に航空機関係工場、政府作業庁、および公務員の徴用、男子就業の制限禁止により女子の補充を要するものに優先充足することとした。

これにより女子挺身隊制度が生まれたが、この制度は法律によって行われたのではなく、市町村長、町内会、部落会、婦人団体、学校長等の協力によって、家庭の遊休女性を中心として結成された任意の組織であった。

当初は政府の方針としてあくまで「自主的」に結成するとされていた女子挺身隊であったが、結成が不十分だったうえ、戦局の悪化による労働力不足はますます深刻化したため、政府により結成を促す様々な動きがあった。新聞ではさかんに結成の必要性が報道され、「続け・女子勤労挺身隊」という勇ましい見出しが紙面を飾った（『北海道新聞』昭和十九年三月二日）。

昭和十九年三月には女子挺身隊制度の強化を図る目的で「女子挺身隊制度強化方策要綱」が閣議決定され、女子の挺身隊への実質的な強制加入が実施された。

（一）結成の状況

女子挺身隊にはその結成課程により三つのタイプに分類された。第一は、その中で最も多くの未婚女性を動員した、高等女学校を卒業した女性たちを同窓会単位で結成した女子挺身隊であった。さらに、同窓会挺身隊は昭和十九年三月の卒業生による挺身隊とそれ以前に卒業した女性たちで結成した挺身隊に分けられる。この既卒生による挺身隊は、勤労動員で働かされていた同じ職場で、そのまま身分だけ女子挺身隊となった人も多く、当事者たちの認識も勤労動員と区別がはっきりしないといわれる。ちなみに、千歳の航空廠にはそれ以前に女学校を卒業して軍属として事務をとっていた女性たちがおり、彼女たちは「自分は女子挺身隊ではない」という認識を持っていた。

第二は、女学校へは行かずに家事や家業を手伝っていた無職女性によって地域別に結成された挺身隊であり、第三に、前述の二種類の挺身隊より小規模であったが、官庁や会社、銀行などに勤務している女性で組織された職域別挺身隊があった。なお、農業に従事している女性は食糧増産のため動員を免除されていた。

このように三種類の女子挺身隊が全国各地で続々と結成され、終戦までに四七万二五七三人の女性が軍需工場等へ動員された（労働省『労働行政史第一巻』）。

女子挺身隊などをはじめとする各種の国民動員の総数については、戦後すぐに次のように報じられた（『朝日新聞』昭和二十年九月七日）。

一、被徴用者	六、一六四、一五六
内訳新規	一、六〇九、五五八
現員	四、五五四、五九八
（軍需会社を含む）	

二、学徒動員 一、九二七、三七九

(農林業出動を含む)

三、女子挺身隊 四七二、五七八

四、集団移入半島人 三三二、八九〇

五、同華人 三四、〇〇〇

六、その他一般従業員 四、一八三、二七一

千歳の航空廠には、昭和十九年三月、札幌、苫小牧、小樽、旭川、稚内、室蘭、函館など各地の女学校から一〇名ずつぐらいの規模で組織された同窓会挺身隊が、卒業と同時に動員されて来た。総勢で三〇〇名ぐらいが集まった。

応募のきっかけは多くの場合は学校の薦めに従ったものであったが、中には直接海軍士官が女学校に向いて募集した例もあった。

また、昭和十九年三月までのこれらの新卒挺身隊の出動数累計は全国一〇万六二七五人であり、既卒者は一万五五一〇人、地区別挺身隊は七万九七〇二人であった。動員先としては、女子の特性に適應する職種として、第一に航空機関係工場が挙げられており、千歳の航空廠はまさにその職場であった。

このような挺身隊は、高等女学校卒という当時としては高学歴の女性を積極的に動員することによって、中・上流階級の子女を生産に駆り出すことを目的としていた(佐藤千登勢『軍需産業と女性労働 第二次世界大戦下の日米比較』)。

しかし、戦局悪化による労働力不足は逼迫し、戦力保持のため「男子従業者の配置規正に関する件」が昭和十九年八月八日閣議決定された。さらに政府は、「緊迫セル勤労需要ノ現状ニ対処シ国民勤労動員ノ完遂ヲ図ル為女子ノ勤労動員ヲ強化スルノ要アル」として、十九年八月二十三日勅令

第五一九号をもって、「女子挺身勤労令」を公布・施行させた。これにより、女子に対する徴用に法的根拠が与えられることになった。満二五歳未満の女子は一年間の勤労奉仕が義務づけられ、女子も、出征こそしないまでも徴用から逃れる道はなくなった。

この時期の千歳には、航空廠の女子挺身隊の他にも、大学や中学校、高等女学校などからの大勢の学生や生徒が動員された。昭和二十年三月には政府が「決戦教育措置要綱」を閣議決定し学校における授業停止の措置がとられたが、既に学校教育は実質的に停止されていたといえる。

残念ながら千歳の航空廠への動員数の実数は公式記録が不明で確かなものはない。しかし、大湊警備府管内で千歳、大湊、美幌、三沢や民間工場を含めると一万人近い学徒隊、女子挺身隊が動員されていたものと思われる(飛内進『大湊警備府沿革史―北海の護り―』)。

幸いなことに千歳は大湊や他の航空廠のように空襲を受けることはなかった。しかし昭和二十年七月、特攻訓練中に現在の本町に墜落した零式艦戦の巻き添えで民間人三人が亡くなった。そのうちの一人が下田恵子であった。彼女もまた、函館の昭和女子高等技芸学校を出て動員されていた挺身隊員だった。

(二) 女子挺身隊員の生活

動員期間は長い者で一年四ヵ月、短い者で数ヵ月であった。各地から集まった女子挺身隊員たちは、まだ木の香も新しい挺身寮へ入った。寮は二階建てで廊下を挟んで六、七畳ほどの部屋が並び、一部屋に五、六人が寝起きした。動員当初は初めて親元を離れての、しかも全てが軍隊調の集団生活に慣れず、寮の枕を濡らす人も多かったという。しかし、徐々に若さ故の順応性を発揮し、そのような生活の中にも楽しみを見いだすようになった。日曜の休みには、千歳川や神社の周辺の散歩や、当時雑貨を置い



写真6-7 千歳橋を背景に笑顔でくつろぐ挺身隊員
(旧41空廠補給科記念誌『わかば』より)

ていた「ふじや」を覗くなどして過ごした。航空廠内では時折慰問の演芸会や上映会が催され、海軍記念日には配属科対抗のバレーボールの試合が行われたこともあった。祝祭日にはあんこと餅米のご飯が配給されたが、何より食糧難の時代に量こそ少ないが主食が最後まで白飯だったことが嬉しかったという。補給科で科員の給料計算を行っていた小樽双葉高女卒の外村みよは「女学校卒業の挺身隊員の給料は日給一円二〇銭」と回想している。

好き好んで、この年代に巡り合わせたわけではなかった。短い期間であったが、一六歳から一八歳の多感な時期を、このような特殊な環境下で過ごし、青春の輝く一時期が犠牲になったことは間違いないことであった。それでもなお、苦しい思い出より楽しく懐かしい思い出のほうが遙かに多いという。

工員養成所

戦局の悪化に伴い、海軍では労働力を確保し優秀な基幹工員を養成するために、高等小学校卒業程度の学歴を有する一四歳から一六歳までの者を対象に、工員養成所への募集を行った。二年間のカリキュラムを修了した際は中学校卒業同等以上の資格を得ることができた。この養成所は、中学校進学以外のもう一つの少年達の進路となっていたのであった。もちろん試験による選抜であったが、月額一〇円ほどの給料を貰いながら勉強もできることは魅力であったようだ。入学後は横須賀、呉などの海軍工廠で研修を受け技術を身につけることができ、将来の中堅幹部候補であった。この養

成所は「第四十一海軍航空廠工員養成所」といい、昭和十八年四月に千歳の航空廠内に設立された。

養成所を志望した少年の動機というのは、やはり当時の多くの子供がそうであったように、中学校へ行くには家庭の事情が許さないとか、かといってそのままといずれ徴兵若しくは徴用工とされるので、「それならばいいそのこと」といった理由もあったようだ。しかし、海軍からの募集とはいえ実際は各学校に人数の割当てがあったという。当時は海軍も陸軍も戦争遂行のためにとにかく人を集めることが至上命令の時期であったからである。個々の事情はあったにせよ「そうしなければならぬ雰囲気でした」という言葉が当時の様相を象徴している。少年達もまた全道各地から集まっていた。

養成所の採用試験は国語、算数、理科、国史、地理などの一般科目と体格検査であった。この年の千歳国民学校高等科卒業男子は総勢三一名だった。そのうち中学校進学者や家業が農家である者などを除く七、八名が受験し採用となった。

養成所は航空廠の中の建物の二階にあり、毎朝、今の東雲町にあった寄宿舎から団体行動で通った。生徒は特別の事情ある者を除き全員が寄宿舎への入舎を義務づけられた。千歳在住の生徒も例外ではなかった。

本来であれば二カ年の実習と学科修了後、さらに一カ年は上級課程である海軍工作科予備補習生となり、そこで軍事教育を受けた後海軍予備下士官に進級することが出来るといふカリキュラムであった。

しかし戦局はそれを許さず、この第一期生はともかく一カ年で中学校程度の一般教養科目を詰め込まれ、見習工員課程の卒業証書を貰うことになった。

その一カ年は座学が主であったが、後半は午後からは実習という形で実



写真6-8 入廠まもなくの年少工員達（昭和18年：榊哲雄所蔵）

際の作業にかかわった。一般教養科目として国語、理科、数学、英語などがあり、もちろん機械工学や電気など飛行機に関する学科もあった。航空廠での作業終了後は寄宿舎で夜遅くまで自習という厳しいものだった。教育課程からいえば現在の工業高校に近いものといえるだろう。航空廠内での彼らは「年少工員」と呼ばれた。

彼らは卒業と同時に二等工員となり、本州の各航空廠などに研究工員という名称で派遣され、横須賀の海軍航空技術廠では海軍局地戦闘機「雷電」の生産工程を勉強した。しかし、昭和十九年後半から二十年にかけては本土防衛のための防衛陣地の構築が急務となり、飛行機修理よりも工場自体の特殊地下壕化のため横穴（隧道）掘りの時間が増えていった。

航空廠の作業の実際

航空廠での実際の作業はそれぞれ専門化され多岐にわたり、その専門が一つの班となっていた。第一線の現場である飛行機科には機械、仕上、組立、器具、人事、作業、電気、溶接、鑄金、準備、ガス、銅工などの班があり、一般工員、年少工員に混じって挺身隊員や学徒が配属されていた。航空廠の技術部門トップには技師がいて全体を総括しており、その下に技手、工手、職手、一等工員、二等工員の職制があった。総務課には庶務、労務、守衛、自動車などがあった。その外の会計科、兵器科、発動機科、補給科の中にも同様に細分化された班があった。これらの科の事務部門に

は女学校出の職員や挺身隊員が配置され、計算や記録、トレースなど緻密さを要求される業務でその才能を発揮した。航空廠全体では挺身隊の女子のほうが男子より多いという部署もあった。

『千歳小学校開校百年記念誌』には、昭和十九年の学校日誌に「航空廠へ勤労奉仕に行った（高等科、五・六年）」という記事を見つけたとある。

国民学校高学年の子供は、「雑用はもちろんだが、その小さな体躯を利用して飛行機の胴体内に入り、破れた機体に外板を貼る際に内側であて板を押さえるような仕事をした」と当時銅工班の年少工員であった石川正は



図6-4 航空廠建物配置図

図6-5 第41海軍航空
廠徽章

振り返る。

作業現場の年少工員は、速成とはいえない年間技術を学んでいた半熟練工員であった。一方の挺身隊員は、そもそもが非熟練労働者として単純で反復的な軽作業に従事させられるはずであった。しかし、男性熟練工員が応召などで職場を去っていくと、非熟練労働者である挺身隊員がその補完をする必要に迫られた。彼女達は、一般工員や年少工員から現場で指導を受けた。彼女達の飲み込みは早く、やがてドリルの穴あけやエアガンでの鉋打ちをこなすようになった。

興味深いことに、日本とアメリカ合衆国では、飛行機工場における女性労働者が従事した作業内容が良く似ていたという。前述の飛行機胴体内における作業も、小柄な女性を使って同じような仕事をしていた例がある。なかでもこの鉋打ちは日米両国で「女性に適した仕事」とされ、多くの女性が男性の代替えで配置された。

戦争末期になると千歳の航空廠でも四八時間連続勤務となることもあったという。既に戦時下の現場にあつては、女性労働者に対する保護政策も形骸化していた。

飛行機科に配属になった女子挺身隊員の中には、昭和十九年十二月から翌年四月頃まで群馬の中島飛行機に派遣された者もいた。現地では空襲や機銃掃射から逃げる日が続いた。その時期、千歳においては、魚雷、機銃弾等兵器の分散作業、援農、防空壕掘りの日が続いていた。

戦争終結後の航空廠

昭和二十（一九四五）年八月十五日を期し、ラジオを通じて天皇の戦争終結の詔書が放送され、ここに三年八ヵ月余にわたる太平洋戦争は終結し

た。

この日、航空廠の廠員はこの玉音放送を様々な場所で聞いた。ある者は千歳神社裏や旧北海少年院裏の隧道工場で、ある者は基地内で聞いた。初めて聞く天皇の肉声であった。受信感度は悪く、意味が聞き取れずに戦争遂行の励ましの言葉と受け取った者もいた。旧北海少年院裏の隧道工場前で聞いた女子挺身隊員は、自分たちはよく理解できなかったが兵隊は事態を直ぐ理解し、地面に突っ伏して泣いていたという。その日から全ての軍事作業は中止となった。

航空廠では事務部門を中心にして、庁舎前に穴を掘って三日間書類を焼却しつづけた。残務整理のため現場に残った者もいた一方で、所属長が解散を言い渡して郷里に帰る者もいて、航空廠内は慌ただしかった。

大湊警備府では八月十六日以降、学徒動員、女子挺身隊、徴用工等の軍属を帰郷させる措置をしている。千歳でも同様の措置がされたと思われる。賃金は女子挺身隊員、年少工員ともに即座に支払われた。その他に軍需物品（毛布・落下傘等）の配給を受けた例もあった。

表6-7は、終戦後の大湊警備府における千歳に存在した主要部隊等の現在員の経過を表わすものである。

航空隊各部隊でも一般軍人の復員がすぐ始まった。十月一日、第十二航空艦隊が解隊し、そのあとすぐ十月五日に米陸軍二〇〇名が進駐した。その後も基地要員は米軍の増加に反比例して減少していった。

表6-7 主要部隊復員経過

部隊名	終戦時	8月末	9月末	10月末
第41航空廠	3,528	586	597	5
〃 大湊支廠	3,483	455	348	294
北東海軍航空隊	7,254	5,378	2,293	118
第20魚雷調整班	319	—	—	—
第5気象隊	672	672	62	0
第571設営隊	637	109	0	0

第41航空廠、大湊支廠、北東海軍航空隊は11月30日、第20魚雷調整班は9月15日、第571設営隊は9月30日、第5気象隊は10月15日を期して解隊した（飛内進『太平洋戦争下の大湊警備府』より）。

しかし、残務整理のため残された挺身隊員も多く、親が終戦になっても帰ってこない子を心配して基地に訪ねて来るということもあった。残った彼女たちも年明けまでには実家に戻ることもあった。

昭和二十年十月十一日、国民勤労動員令が他の勅令とともに廃止され、これに伴って関係省令も失効した。

註(1) 航空廠の解散後、膨大な軍需品が放出された。小規模物品については個人に渡った例もあったが、大規模な移管も行われた。第二復員局がまとめた「第四十一海軍航空廠引渡目録」によれば、移管先は市内公的機関では千歳町役場、千歳農業会、千歳郵便局、千歳国民学校であり、市内民間会社では千歳航空機株式会社、日本通運株式会社千歳営業所、山崎組、渡部商店であった(第七章第二節第二項参照)。町外への移管も多く、戦後復興の一助となった。

引用・参考文献

守屋憲治『北の翼―千歳航空史』みやま書房 一九八五年／飛内進『太平洋戦争下の大湊警備府―下―』一九九五年／同『大湊警備府沿革史―北海の護り―』二〇〇〇年／労働省『労働行政史第一巻』一九六一年／佐藤千登勢『軍需産業と女性労働 第二次世界大戦下の日米比較』溪流社 二〇〇三年／藤井貞雄『千歳特攻隊始末記』北海道新聞社 一九八四年／わかば会(旧四十二空廠補給科)『わかば―わかば会記念文集 一九七三年／旧第四十一海軍航空廠旧友会『旧友会々々名簿』一九八〇年／美幌町『史話美幌海軍航空隊』美幌叢書第五号 一九八三年／大湊海軍工作部記念誌刊行委員会『北の槌』一九九一年

昭和十七年までの動き

昭和十六(一九四一)年十一月二十四日、美幌には木更津から耐寒機装

を施した一四機の九六陸攻が飛来した。翌日から一〇機ほどの編隊で除雪された滑走路から雪煙を上げ六〇〇海里の哨戒飛行に飛び立った。目的はハワイに向かう機動部隊進出路の前程哨戒にあった。

千歳においては美幌のような動きは見られなかった。開戦から航空隊の解隊まで千歳に残った留守部隊は大湊警備府津軽防備隊の隷下となり、基地の警備に当たった。この当時、千歳の上空には機体を橙に塗色された九六陸攻が飛行していたという。橙色は練習機の塗装であり、訓練基地として活用されていたと思われる。

昭和十七年四月十八日に米空母ホーネットから飛び立ったノースアメリカンB-25ミッチェル爆撃機によって本土が初空襲され、軍部は大きな衝撃を受けた。

五月一日、砲身の鑄造・戦車用防弾鋼板Ⅱニセコ鋼板などを製造する日本製鋼所と日本製鉄がある室蘭防空のため、陸軍飛行第十三戦隊の一部が北部軍に編入され北二十四条の札幌飛行場(後の札幌第二に配備された。しかし、札幌飛行場は狭く、夜間着陸のための灯火設備がなかったことから、夜間は千歳に移動した。機種はノモンハンにおける国境紛争でソ連戦闘機ポリカルポフⅠ-15・16を圧倒した中島九七式戦(キ27)だったが、この時点では旧式に属するものだった。千歳に近い札幌・丘珠、苫小牧町旭町、苫小牧・沼ノ端、白老・敷生、室蘭・八丁平、八雲の陸軍飛行場は未だ整備されていなかった。

五月十六日、防空法が制定された。これを受け「防空計画ノ設定上ノ基準」が陸海軍大臣から各関係大臣に伝えられた。

北海道の主要防空拠点は、製鉄・製鋼の室蘭、造船・本州連絡港の函館、東洋一の化学工場といわれディーゼルエンジン用燃料の製造工場のある滝川、それに加え北海道経済の中心・道都札幌とされた。

要防空工場等の主なものは次のとおりである。

室蘭 日本製鉄、日本製鋼所（含・虻田発電所）

函館 函館ドック、青函鉄道連絡船・陸上施設

滝川 北海道人造石油

旭川 合同酒精、日本タンニン

砂川 東洋高压

五月五日、ミッドウェー、アリューシャン作戦が発令された。十四日には十一航艦司令長官が本土東方及び北方海面の哨戒を命じ、千歳基地には木更津空の一部が進出、六月二日から哨戒を開始した。五日のミッドウェー海戦に呼応して、八日には陸軍北海支隊がアッツ島を、海軍陸戦隊がキスカ島を占領した。

十月から十一月、陸軍飛行第五十四戦隊の中島一式戦「隼」（キ43・海軍の零戦に相当する制空戦闘機）が南京から戦力回復のため千歳基地に移駐していた。予定していた南樺太には進出せず、十一月に札幌と苫小牧に分遣した。

千歳の第四十一海軍航空廠支廠が本廠に昇格した十一月一日、千歳に第四十一航空基地隊が設置された。任務は基地諸施設の維持管理、兵器の保管整備及び航空輸送に関するもののほか、外来航空部隊の諸作業と通信作業を補助することにあつた。国内に二隊、外地に五隊が設置された。

設置の理由は千歳基地が航空廠とともに、アリューシャン方面防衛の鍊成基地のほか兵站基地（へたん）という性格にあつた。昭和十九年五月一日に解散したが、定員は六七三名という大きな組織だった。

また、設置時期ははっきりしないが、第二〇魚雷調整班も千歳基地におかれていた。千歳基地が陸攻基地であつたことから魚雷調整班は、雷撃用の航空魚雷を担当する乙編成であつた。敗戦時、三一九名が在籍した。

北海道では戦時統合で、一月に北連・酪連・産業組合中央会北海道支部が合併し保証責任北海道信用購買販売利用聯合会（ホクレン）となり、四月には北海道水力電気・大日本電気など四社が合併し北海道配電（北海道電力）が、十一月には北海タイムス・小樽新聞など全道一紙が合併し北海道新聞が新たに創業した。道新本社は旧北海タイムス社屋とした。

北アフリカ戦線では十月、英軍が砂漠地帯の戦車戦において独軍に対する反攻に成功した。

昭和十八年の動き

四月十八日、連合艦隊司令長官山本五十六大將がブーゲンビル島上空で、暗号を解読した米軍のロッキードP38ライトニング戦闘機の邀撃を受け、乗機の一式陸攻が撃墜され戦死するという海軍甲事件が発生した。

山本司令長官の戦死に呼応するかのようには四月下旬、米軍は反攻を始め、五月十二日にはサンフランシスコを出発した部隊がアリューシャン列島のアッツ島付近に上陸を開始した。米軍のアッツ島来攻に対し五月十八日、海軍は十二航艦を新編し、十一航艦所属の二十四航戦（二〇一空、五三一空、七五二空・四五機）をカムチャッカ半島先端までわずかの距離にある北千島幌筵基地に配備した。幌筵基地の七五二空一式陸攻一九機は、五月二十三日と二十四日の両日アッツ島上陸の敵を攻撃した。二十九日、千歳出身の四名を含む北海道出身者八六四名のほか、東北出身者を主力とする山崎保代大佐以下二五二七名の陸軍守備部隊は激戦の末、最後の電報を発しバンザイ突撃で敵陣に突入、全滅した。大本営は日本軍初の「玉碎」と発表した。

十二航艦は、キスカ島部隊支援のため七五二空の一式陸攻二七機を六月七日に幌筵基地から発進させアッツ島攻撃を命令したが、濃霧のため失敗に終わった。十二航艦は八日以降、陸攻隊の半分を千歳へ移動させ、訓練

と整備にあたるよう命令した。これを受け、後にロケット推進の空技廠特殊攻撃機「桜花」(MX Y8)を装備する神雷部隊長として知られる野中少佐指揮の陸攻二一機が千歳に飛来した。これらの機は、二十八日に幌筵に復帰した。二十四航戦は陸攻隊が千歳で訓練を継続していると見せかけるため、偽通信で作戦の秘匿に努めた。

七月一日、連合艦隊司令長官は南東方面航空兵力の増強を図ることを目的に七五二空二一機にラバウル進出を命令した。七五二空は、五日に千歳を発航、サイパン、トラックを経由して九日にラバウルに到着した。

キスカ島海軍守備部隊は伊号潜水艦による撤収と艦隊による撤収作戦の二度にわたる中止の後、七月二十九日に米軍艦艇のレーダーに包囲されたなか撤収が実施された。実施部隊は第五艦隊主力第一水雷戦隊、五二〇名の守備隊全部隊が煙幕のような濃霧のなか軽巡阿武隈、木曾のほか駆逐艦一一隻に乗艦、撤収作戦は完璧裏に終了した。艦隊はキスカ湾に投錨後、五〇分で全部隊を收容した。この作戦のため木村昌福少将は、濃霧を味方にするべく、現在の気象図のように気圧を等圧線で表示することを考える気象士官と、竣工時からレーダーを装備し高速四〇ノットと重雷装を誇る新鋭の艦隊型駆逐艦島風を要求し受け入れられた。

八月十五日、日本のキスカ撤収を知らない米軍三万五〇〇〇がキスカ島に上陸し、同士撃ちで多くの犠牲者を出した。

八月五日、十二航艦と第五艦隊を持って北東方面艦隊を編成した。艦隊司令部は十五日に千歳に移し、北東方面海軍作戦の指揮を執るようになった。十二航艦は他に、二十七航戦(二八一空、八〇一空、四五二空)と五十一航戦(豊橋空一後に二代七〇一空、厚木空一後に二〇三空)を関東方面に配備していた。第五艦隊は巡洋艦四隻、伊号潜水艦三隻のほか駆逐艦など二〇隻が配備されていた。

北東方面艦隊司令長官は十二航艦司令長官兼務で戸塚道太郎中将が任じた(昭和十九年九月十五日から十二月五日の北東方面艦隊解隊まで後藤英次中将が十二航艦司令長官兼務で任じ、その後は大湊警備府司令長官として二十年三月十五日まで十二航艦司令長官を務めた。後藤中将の後任は宇垣莞爾中将で十月一日まで在職した)。

大本営は、千島方面に対する連合軍の反攻は昭和十九年春以降に公算が大きく、ソ連の対日戦回避の態度は変わらないと判断されるが、米国への基地提供については引き続き警戒を要するとしていた。

七月以降、北海道日本海側において米潜水艦による被害が続出した。八月十一日、七五二空派遣隊は大湊警備府の兵力増強策の一翼を担って、宗谷海峡、樺太東方海面の対潜哨戒作戦に従事した。

九月二十八日にはアツツ玉碎勇士合同慰霊祭前夜祭が札幌・中島公園に遺族五〇〇〇人が参加して執り行われた。「遺骨」は市内中学生の胸に抱かれ中島公園まで市中を進んだ。

九月三十日には千島列島、北海道防衛のため北東方面作戦陸海軍中央協定が結ばれた。作戦方針として索敵哨戒に務め、来攻兵力を洋上において撃滅することになった。

千歳における一式陸攻の雷撃訓練は内浦湾で実艦を的に行なわれた。

千歳を知る会会員の本宮義輝(元千歳市議会議員)は戦時中、海軍を志願し少尉で復員した。平成十四年二月の定例学習会の講話で「准士官当時の昭和十八年八月、室蘭に三〇〇ト飛行機救難船(艇)が配備され艇長となりました。任務の一つに陸攻の雷撃標的があり、いくら深度調整しているとはいえ雷速四〇ノット以上の航空魚雷が艇の下を通過するのは恐怖でした」と述べた。海軍室蘭港湾警備隊基地は日本製鋼所付近にあり、艇は基準排水量二九〇ト、全長四四^{メートル}、速力一八ノットで艇尾に七^トの飛行

機吊り上げ用クレーンを装備していた。

十月六日、米海軍機動部隊がウエーク島に來襲、十一月二十一日にはマキン、タラワ島に上陸した。米軍の内南洋方面來襲により二十四航戦を同方面に進出させた。このことから北東方面の防備が手薄となったが、この状況を米軍に察知されないように十二航艦は偽電信を頻繁に発信した。その後、七五二空は三七機の一式陸攻が全力でサイパン島、トラック島を経由して十二月二十四、二十五の両日、ルオット島に進出した。七五二空がルオット島に到着した二十四日にマキン島守備隊が、二十五日にはタラワ島守備隊が玉砕した。米軍は日本の重要防衛地点を避けつつ、拠点奪い日本本土に迫る飛び石作戦を開始した。米軍の進出ルートの島々に駐屯する守備隊が圧倒的な敵兵力の前に次々と玉砕した。

十一月下旬にはギルバード諸島沖航空戦の夜間雷撃戦に参加した。この雷撃戦は敵のレーダーをかくぐるため高度一〇〇呎での索敵、掩護の戦闘機はなかった。その後、ルオット島を主基地、索敵基地をマロエラップ島（旧タロア島。タラワ島との混用を避けるため改名）とし、タラワ島の敵と対峙した。十二月五日のマーシャル諸島沖航空戦の後、十九年一月三十一日の早朝、ルオット島に米軍が上陸、三日後に守備隊とともに七五二空地上要員が玉砕した。七五二空は豊橋基地で再建後、大湊警備府で対潜哨戒に従事した。

実戦部隊とは別に、五月一日から十二月一日までの間、霞ヶ浦空千歳分遣隊が飛行訓練を実施していた。

この年、十月二十一日、東京・明治神宮外苑陸上競技場で文部省主催の出陣学徒壮行会が開かれた。学生の徴兵猶予がなくなった。雨の中、各校の校旗を先頭に制服制帽にゲートル（巻脚絆）を巻き、着剣の歩兵銃を担った学生が行進した。学徒動員の背景は、度重なる激戦で前線の指揮官であ

る下級将校や搭乗員の消耗による不足があった。

日本は東アジア各地域に戦争遂行のための協力を求めると共に東アジア「大東亜共栄圏」の結束を連合国に示す大東亜会議を十一月五日、東京で開催した。会議には、日本のほかタイ、南京国民政府、満州国、さらに独立したばかりの旧英領ビルマ、旧米領フィリピンのほか、シンガポールに仮政府を樹立した自由インドが参加した。会議では自主独立、経済発展、人種差別撤廃が謳われた大東亜共同宣言を発し、大西洋憲章に対抗した。道内では、三月に石狩・後志地区に北海道中央乗合自動車、四月に胆振・日高地区に北海道道南乗合自動車、戦時統合で営業を開始した。

七月から国鉄札幌駅で女子職員の本格的採用が始まり、翌年道内では女子職員が一万人を超えた。女子が出征した男子職員の穴を埋めた。

欧州戦線では、二月に独軍がソ連スターリングラードで壊滅、九月には伊が連合国に降伏した。

鉄道の国有化

昭和十六年に改正陸運統制令が公布され、十七年十二月に戦争遂行上の兵員輸送や物資輸送のため王子製紙と鉄道省の買収の協定が成立した。

戦時輸送体制強化のため軍が必要とする私鉄を国有化することを「戦時買収」という。協定に基づき、十八年三月に鉄道省札幌局内に北海道鉄道買収準備委員会を設け諸般の準備に当たり、八月一日に買収調印式を迎え編入された。北海道鉄道線は、省線千歳線、富内線と改称された。

昭和十八年八月一日付の北海道新聞は次のように報じた。

北海道鉄道、けふ国鉄編入 利用効率著く大 北方輸送に新たな強味
いふまでもなく千歳線は時局下最も重要な石炭線区の函館本線及び室蘭本線との最短連絡線として、また富内線は（略）釧山資源開発線として共に重要な使命を有するもので今後省営により輸送力の充実強化は期して俟つべ

きものがある。

北鉄の買収が道民にどのような影響を与えるかといへばまづ客貨共著しく運賃が軽減されることである。例へば旧札幌線苗穂―沼ノ端間の旅客運賃二円が一円三十五銭となり省線岩見沢廻りの二円二十五銭に比べて九十銭安くなるので今後は札幌と室蘭を四時間（従来五時間）で結ぶ最短線として大いに利用され、岩見沢廻りの約四割は新しい千歳線に移行するものと見られる

また貨物運賃は種類によって相違するが（略）三割程度の運賃軽減となる模様である、移管当初は旅客列車においては札幌百名、苫小牧五十名平均の通学生のための通学用列車の新設のほか大体において現状を維持し、貨物列車においては相当考慮が払われているが将来は線路の改修、新車両の配置、施設の改良及び札幌駅を分岐点とする等により益々主要線としての面目を発揮するものと見られる（略）

けふ引継式

北海道鉄道引継ぎに関する調印式は一日午前十時より札幌局局長室において挙行される（略）引継目録に調印の後、両者の挨拶があつて閉式する。なほ同日清野局長は山根業務部長を帯同して千歳線（略）を初巡視する予定

買収時、車輛は蒸気機関車八両、ガソリン動車八両、客車一二両、貨車一〇三両の陣容であつた。貨車の七割が軽積載用の無蓋車だった。

戦時買収は昭和十八年と十九年の二年間に全国で二二例がある。千歳線のほか北海道における戦時買収は、十九年に大滝徳舜別鉦山の鉄鉦石を室蘭の製鉄所に運ぶ国鉄胆振線（旧・胆振縦貫鉄道）がある。

この買収によって、国鉄は昭和三年に現在の室蘭本線の一部となつてゐる長輪線を完成させていたことから、函館本線倶知安を経由する山線よりも曲線、勾配が少ない、俗に海線廻りと呼ばれる室蘭本線、千歳線經由で札幌に至るルートを手に入れた。倶知安經由よりも三四・八_キ増となる

が、千歳廻りは概ね平坦で補助用機関車を必要とせず、時間短縮も可能なものだった。さらに、札幌―室蘭間で岩見沢廻りよりも四一・五_キ短縮するルートであつたが、戦中において列車の運行はなかつた。理由は千歳線のレール負担力と列車容量が著しく劣るからであつた。

北海道鉄道所有のテンダ式北7形北7号から9号機は、小樽築港機関区に転じ、入替え機として使用され7200形7225号から7227号機と呼ばれたが昭和二十三年から二十四年にかけて廃車となつた。タンク式は国鉄買収後、ボールドウィン製の北1形（国鉄3025形）北1号機だけが東札幌に残つた。ほかのボールドウィン製タンク式北3号機と北4号機の二両とコッペル製の北5形北6号機は道内各地の機関区に配属された。コッペル製の北5形北6号機が最も遠い釧路に行つた。全機が、二十四年までに逐次廃車になつた。

ガソリン動車は八両全車が国鉄に移籍、キハ501型は40350形、キハ550型は40360形と改称され昭和二十三年まで在籍、その後、雄別炭砒鉄道に三両、定山溪鉄道に二両のほか、釧路臨海鉄道などに譲渡された。

7225号機は、客車四両とともに宗谷管内豊富町の日曹炭鉦天塩鉦業所専用鉄道（宗谷本線豊富―三坑・全長約一八_キ）に売却された。7225号機は、7228号機と改号され9600形の補機として運用されたが、昭和三十六年頃には休車状態だった。



写真6-9 日曹手塩7228蒸気機関車・一抗留置線（旧北海道鉄道「北7」昭和36年・星良助撮影）

戦時買収は鉄道部門に限られたことから昭和十八年二月、北海道鉄道バスは札幌地区（石狩後志）のバス事業者二社とともに北海道中央乗合自動車を発足させ、新会社にはバス事業を譲渡し三月一日から営業を開始した。本社は小樽市街自動車の社屋とした。この時、これまで使っていた北海道鉄道の米シボレー製バスはなかった。

バス会社は、昭和二十四年六月三日に社名を北海道中央バスとした。

定山溪鉄道に譲渡されたガソリン自動車550型は、昭和四十四（一九六九）年十一月一日の廃線まで在籍し豊平車庫に留置されていた。末期の塗色は、定鉄標準色のクリームと窓周りスカレットの塗り分けだった。

昭和十九年の動き

一月二十日から三日間、第一千歳で北東方面作戦に関する北部軍と北東方面艦隊の合同兵棋（図上演習）が開催された。

二月四日、米軍機が北千島に襲撃、幌筈島が艦砲射撃を受けた。

連合艦隊は二月に泊地トラック島が空襲を受けパラオ島に後退、中部太平洋防衛作戦であるZ作戦の機会を待ち、北東方面は第一遊撃帯、本州東方洋上を第二遊撃帯とする甲作戦を策定した。

千歳には五十一航戦七〇一空の中島艦攻「天山」（B6N）一中隊九機、十二航艦司令部の昭和零式輸送機（L2D／DC-3ライセンス生産）数機が常駐していた。

三月十四日、二十四航戦の内南洋進出で手薄となった北東方面に第二基地航空部隊（十二航艦）は、次の命令を行った。

転進時期及兵力	三月下旬	本時期ニ於テ作戦可能兵力
	四月下旬	右以外兵力
転進基地	二五二、七五二空	三沢、大湊
	七〇一、二〇三空	第一千歳、第二千歳

五〇二、五五三空 第一美幌、第二美幌（『戦史叢書29』）

三月二十六日、七〇一空の一式陸攻一〇機、三十日には二〇三空の零戦隊と斜銃を装備した中島夜間戦闘機「月光」（J1N）四十数機が飛来した。後に美幌を前進基地として北千島防空に従事した。月光部隊は、五月六日付五十一航戦司令部付夜間戦闘機隊となった。

六月十九日のマリアナ沖海戦で鳳凰以下空母三隻とともに艦載機、熟練搭乗員を失い日本機動部隊は壊滅した。八月上旬までにサイパン島、テニアン島、グアム島などの守備隊が玉砕した。マリアナ沖海戦には、大湊警備府で対潜警戒に当たっていた七五二空も硫黄島から参戦した。

八月九日には、四月下旬以降から千島列島北端の占守島の片岡第一にあった北東方面艦隊司令部が、美幌を経由して千歳に後退した。これは、絶対国防圏の要衝であった中部太平洋マリアナ諸島方面の動きに呼応したものであった。

これまでの連合艦隊主力による決戦を前提としていた北東方面の支作戦から、米軍がアリューシャン列島から千島列島沿いに北海道に侵攻することを阻止攻撃することに変化したことによる。

この結果、北海道方面の航空兵力配備を次のように変更した。

陸攻	第一美幌	艦爆	第一千歳	艦攻	第二美幌（『戦史叢書29』）
第一千歳の艦爆は、五〇二空攻撃一〇二、一〇三飛行隊の彗星と九九艦爆の七六機だった。任務は敵艦攻撃、索敵、敵潜攻撃とされ、飛行場に目標を設置して高度二〇〇〇メートルからの急降下爆撃訓練を行い、次の段階では急降下角度四五度の擬襲訓練を小樽沖で実施した。千歳で訓練中、二機が立て直しできずに地上に激突したという。					

この部隊はN空襲部隊と改称され、九月上旬の数日霞ヶ浦に移動、その後中部太平洋に兵力を割き、十六日以降は千島列島南方洋上の哨戒任務を

中止した。

七月二十六日、捷号^{しやう}作戦の準備を示達された。作戦方針は現戦略体制を保持活用し、基地航空部隊は敵艦隊及び侵攻兵力を捕捉撃滅することとされた。これに先立ち、十二日に「捷号航空作戦二関スル陸海軍中央協定」が調印された。北東方面では十二航艦と第一飛行師団を部隊とし、海軍が攻撃四隊、戦闘二隊、陸軍が戦闘一戦隊、重爆二戦隊、軽爆一戦隊、偵察一戦隊の兵力で、指揮は航空が海軍、直接防衛は陸軍とした（第七章第一節参照）。

豊橋空は、二月二十日に二代目七〇一空と改称し北東方面艦隊十二航艦の隷下にあった。三月、豊橋から千歳に移動、飛行訓練と洋上哨戒任務に就いていた。七〇一空攻撃七〇二飛行隊は八月に入って美幌に移動、その後、七五二空所属となり十月二十三日以降、五〇機の一式陸攻が比島クラーク基地に進出した。

三月一日、懸案であった空地分離の編成替えが行われ十月から実施された。空地分離とは航空隊と飛行隊を分け、飛行隊を機種別一戦闘・攻撃・偵察とし搭乗員と機材を配置、航空隊は飛行隊を除いた部門を管轄し配備基地が定められた。これによって、飛行隊は戦況に応じて転進、転進先の基地航空隊司令の指揮を受けた。

七〇一空攻撃一〇二、攻撃一〇三は、九月に入って香取に転進し、陸攻隊を艦爆・艦攻隊に改編した。これは米軍の比島攻勢が明らかになった時点で陸攻隊の全部と戦闘機隊の大部分を第三航艦に割いていたことから、関東方面に進出可能だったのは零戦四二機、月光五機、艦爆八二機、艦攻二四機と少数だったからである。

九月に入ると米軍機動部隊が比島攻勢のため侵攻して来た。十四日、本土方面に配備していたレーダー装備の新鋭機と熟練操縦士を、台湾、比島

方面において悪天候で制限される敵艦載機の間隙を縫って攻勢をかけるため、大部分の航空機に移動が命令された。T攻撃部隊に編入させるためであった。「T」とは悪天候を意味する台風（Typhoon）の略号である。

十月には米艦載機が比島、台湾方面をはじめ沖縄にも空襲をかけるなど動きが活発化、大本営海軍部は捷一号（比島方面）作戦警戒を指示した。

海軍予備学生として千歳の七〇一空に着任した武藤誠（後に岩手・鹿兒島・兵庫各県警察本部長、警察学校長）は『いくさ世の回想』で捷一号作戦に出動する部隊の様子を次のように述べている。

南方進出の前日の一〇月一〇日の夜は基地全体があわただしかった。格納庫をはじめ、多くの野外に駐機している飛行機の整備のため徹夜の作業が行なわれた。

営舎では壮途を祝う宴があった。全員士気が高く、米軍の機動艦隊になすものぞとの感が溢れていた。（略）

北千島幌筵島に数機の爆撃機を残しただけで、（略）一〇月一日（略）北海道をはじめ、千島諸島、南樺太から集結した彗星と九九式爆撃機と護衛の零式戦闘機、整備員のための輸送機合わせて一八五機は木田竜彦司令（大佐）に率いられた勇壮な爆音を残して離陸し、やがて編隊を組んで南に向かった。

七〇一空は千葉県香取、鹿兒島県国分の基地を経て、現在的那覇空港である小緑、さらに台湾台東基地に、そして二十二日に比島マバラカット基地に到達した。

十月十二日から十六日までの間、台湾沖航空戦が展開、十八日には捷一号作戦が発令された。二十日には米軍がレイテ島に上陸した。陸に海に空に死闘が繰り広げられた。二十三日から二十五日まで機動部隊同士が激突した史上最大の海戦・比島沖海戦では台湾沖航空戦の戦果誤認から武蔵を含む三隻の戦艦、瑞鶴を含む空母四隻、巡洋艦七隻などが沈んだ。七五二

空の一部と七〇一空ほかの基地航空部隊が雷撃、爆撃に参加したが損耗が激しく壊滅状態となった。台湾沖航空戦と比島沖海戦で日本は五〇〇機近い航空機と多くの搭乗員を失った。陸戦では圧倒的な米軍に対して日本軍はなすすべがなかった。

第五十一航戦司令部付夜間戦闘機隊は、十一月一日付で解散した。同日、マリアナ基地を飛び立ったB-29によって東京が初の空襲を受けた。

十一月十五日、一三一空から北東空に編入された戦闘八五一飛行隊の月光三五機が千歳に移動、下旬には陸軍第一飛行師団飛行五十四戦隊残置隊の上向砲装備の川崎二式複座戦闘機「屠龍」(キ45改)四機が札幌から千歳に移動してきた。月光と屠龍の任務は札幌と室蘭の防空にあったが、千歳配備中に敵機迎撃はなかった。月光と屠龍は敵大型爆撃機に後下方から接近・捕捉、斜銃(上向砲)の無照準射撃で敵機を撃墜する双発戦闘機で、本土防空戦では大きな戦果を挙げたことで知られる。

十二月五日には戦闘地域が本土南西方面に集中し、第五艦隊が南西方面艦隊に編入され水上部隊を失ったことから北東方面艦隊は解散、十二航艦は連合艦隊直属となり千島方面根拠地隊と第五気象隊を編入した。十二航艦は敗戦まで千歳にあった。

陸海軍の夜間戦闘機が同一任務で同一基地に配備された例は千歳以外になかったが、戦闘八五一飛行隊月光は昭和二十年早々台湾に移動した。また、三月には飛行五十四戦隊屠龍が沼ノ端で本体と合流後、札幌に移動し敗戦まで北海道の防空にあたった。

十月二十六日に陸軍が撮影した空中写真が残されている。第一千歳の滑走路、誘導路のアスファルト部分は、迷彩塗装が施されていた。また、司令部庁舎の南西に第二エプロンが新設され格納庫が一棟増設されていること、縦滑走路南端に誘導路を結ぶターニングパットが新設され滑走路が二

〇〇延長されていることが判る。この時点で第二エプロン、ターニングパットともに迷彩は施されていない。

大陸東部方面での日本陸軍は、追走するがゆえに戦線だけが拡大していった盧溝橋事件以来の占領地を維持するほか、国民党軍と共産ゲリラの討伐に明け暮れ、正規軍同士が正面で戦いあう規模の大きな会戦は生じなかった。日本軍の敵を捕捉し撃滅するといった決戦方式に対して、国民党軍と共産ゲリラは広大な国土において撤退と持久、そして民衆に紛れ込む戦いに徹するばかりであった。

仏領インドシナ方面の戦局は、穏やかに推移していた。

ビルマ方面では、日英両軍の地上戦が繰り広げられていた。

昭和十九年三月、陸軍はインパール作戦を開始、印緬国境を越えインパール北方のコヒマを四月に占領した。しかし、兵站の充実した英軍の前に、軽装備で補給を無視した無謀な作戦であったことから、七月の全軍退却までに参加兵力九万のうち三万を超える将兵が戦病死したといわれる。主力は第十五軍牟田口廉也中将が指揮する第十五(祭)、三十一(烈)、十三(弓)師団であった。また、交通の要衝ミートキーナでは五月から八月まで英軍と激戦を重ねたが敗北、これ以降、イラワジ川沿いのジャングルを敗走した。弾薬食料は底をつき、山砲は敵戦車に蹂躪された。雨季のため退却は惨憺たるものとなった。

国民党軍は、日本軍に遮断された陸路の援蒋ルート代替であるヒマラヤ越え航空ルートでは輸送力が少ないことから、北インドのレド、北ビルマのフーコン、雲南から昆明に繋がるレド公路の開削を目指した。八月から九月にかけ、フーコンに続きレド公路沿いの雲南省の拉猛・騰越の守備隊が、米軍の指揮と装備による数十倍という圧倒的兵力の雲南遠征国民党軍の前に玉砕した。国民党軍にとってこの攻撃は、盧溝橋以来の抗日戦にお

いて初めての完勝となる戦いとなった。

四月、支那派遣軍は米軍による海上通商破壊を避け、南方からの補給を船舶によらず主に南北縦貫鉄道で確保する大陸打通作戦を敢行した。北平―漢口―広東、さらに衡陽、桂林、柳州、南寧、そして仏印に至るルートで戦車主体の機械化部隊によって占領する一大野戦であった。二十年二月までの三次にわたる作戦は成功した。作戦のひとつであった衡陽付近の米軍の飛行場を制圧したものの、米軍は成都から北九州にB-29を発進させた。さらに、マリアナ諸島の失陥で大陸打通は意味を失っていた。

この年、北海道では室蘭市で防空強化のため建物疎開が始まり、札幌大通公園が食糧増産のため菜園となった。千歳では五月に本州との長距離有線通信網を確保するため電話中継所が開設された。

欧州戦線では十九年六月、連合軍が仏ノルマンディに上陸し、対独戦での反抗を開始した。

基地の防空体制

大湊警備府陸上防備隊千歳防空砲台は、南長沼用水南側・北海道鉄道東側の主滑走路進入上の左側にあり、照空灯は砲台の北側に設置されていた。防空砲台は千歳の開庁と同じく配備され、司令部庁舎は鉄筋コンクリート二階建てで砲台の鉄道寄りにあった。

高角砲（陸軍Ⅱ高射砲）は、十六年当時の資料で「一二・七^{センチ}糧AA四門、照空灯二基」である。一二・七糧AAとは大正十一年に制式された四五口径一〇年式一二糧高角砲のことで、昭和初期に重巡の単装砲として採用された。十六年当時は若干旧式となったが操作が容易な優秀な砲で、発射速度は毎分一〇発以上で最大射高は一万^{メートル}だった（執筆注・AAⅡアンチ・エアクラフト〈対空〉）。

ほかに二五^{ミリ}、一三^{ミリ}の単装、連装の機銃陣地が第一千歳においては司

司令部庁舎屋上、主滑走路北端、滑走路交点南西の指揮所附近をはじめ、第三千歳まで数カ所に設けられていた。

千歳防空砲台のほかに美々にも防空砲台の建設計画があった。

昭和二十年六月中旬に千歳基地に赴任した神埜努は第五期海軍兵科予備学生として昭和二十年六月一日に横須賀海軍砲術学校を卒業、大湊警備府千歳防空砲台砲術士として千歳航空基地に赴任した。千歳での思い出を、海軍泊会『海軍思い出の記』のなかで次のように回想した。

「千歳は無傷です。しっかりやってください」と、高松宮横砲教頭から激励のお言葉をいただいた（略）勇躍故郷北海道の千歳基地に向かった（略）

第一千歳の防空砲台を根城にした私の最初の任務は、千歳駅から美々砲台へ分解されて着いた砲の輸送指揮だった。択捉島単冠湾の摺鉢山から撤収されたこの砲は、かつて真珠湾攻撃に向かう連合艦隊を見送ったはず……その運命を偲びつつ砲台のあたりを見回すと丘陵を覆う灌木林の下に（略）熊笹がびっしり実をつけていて、地名とは裏腹の実にわびしい風景であった。八月に入ると情勢が急変した。（略）第二基地の一三^{ミリ}機銃陣地指揮に回され、半地下壕式の兵舎で起居した。

美々防空砲台の位置は第一千歳滑走路から三^{キロ}ほど南だったが、完成を見ずに敗戦となった。

千歳周辺の陸軍高射砲陣地として、第三千歳の東方にある安平^{あひら}に北部軍の高射中隊が配備された。砲は七五^{ミリ}、最大射高九一〇^{メートル}の八八式七糧野戦高射砲六門であったが、探照灯・聴音機の配備はなかった。一万^{メートル}近くを飛ぶB-29には効果が薄く、連射に脆弱だった。

海軍は防空砲台司令部附近の南長沼用水路北側・鉄北通東側の林地に、見張り・対空警戒用の電探所（電波探信儀・レーダー基地）を昭和十九年中頃に建設した。

レーダー波受信アンテナの基礎は大正十五年に東北帝国大学の八木秀次と宇田新太郎が発明したが、日本のレーダー波応用研究は体制も小さく欧米に遅れた。米英軍は早くからレーダーの研究に入り、レーダーアンテナを発明者に因み「ヤジーズアンテナ」と呼んでいた。

千歳に配備されたレーダーは、小型軽量の海軍三式一号電波探信儀三型（十三号電探）二基で、有効距離性能は単機で五〇^キ、編隊で一五〇^キから最大三〇〇^キの探知が可能だった。操作性が良い十三号電探は、陸上対空監視のほか、海軍のほとんどの艦艇に装備された。

千歳周辺のレーダー基地として、海軍が恵山岬、襟裳岬に、陸軍（電波警戒機乙）は日高・富川、登別・鷺別、様似、室蘭地球岬に、また全道で海軍は一三カ所、陸軍は一四カ所にレーダー基地を設置した。

なお、海軍の電波探知機とは、敵の発する電波を捉え敵の存在を探知する機材で「逆探」と呼ばれた。また、陸軍の電波警戒機甲は、電波の送受信アンテナの間を敵機が通過したことを認識する機材だった。

千歳周辺の陸軍飛行場は次のとおり。（単位^ト、+数字^ト無蓋掩体壕数、（）^ト現状）

札幌第一	一二〇〇×一〇〇	コンクリート舗装 格納庫七棟+29
		（陸上自衛隊札幌飛行場／丘珠空港）
札幌第二	一二〇〇×五〇	板敷舗装 格納庫三棟+1
		（市立白楊小、道札幌北高一带）
苫小牧	一一〇〇×二〇〇	転圧舗装
	一〇〇〇×二〇〇	転圧舗装+9
		（市立苫小牧東中、総合体育館一带）
沼ノ端	一五〇〇×一〇〇	コンクリート舗装
	一五〇〇×三〇〇	転圧舗装

一二〇〇×三〇〇 転圧舗装+35

敷生 一二〇〇×一五〇 マガダム舗装+12
（沼ノ端南・中小企業工業団地一带）

室蘭 一二〇〇×五〇 コンクリート舗装+14
（日本製紙白老工場・室蘭本線北側一带）

八雲 一二〇〇×一〇〇 コンクリート舗装 格納庫八棟+22
（室蘭中央自動車学園、道室蘭商高一带）

（航空自衛隊八雲飛行場）

（王子航空機江別製作所付属飛行場 一三〇〇×五〇）

コンクリート舗装 格納庫八棟+1 野幌駅北方見晴台一带）

掩体壕

掩体壕とは敵の航空攻撃による爆風や弾片から航空機を守る格納施設で、厚いコンクリート製ドーム状の有蓋掩体壕と周囲の土をコの字型に盛り上げた土塁である無蓋掩体壕の二種類があった。

防衛省防衛研究所の資料によると、敗戦時、第一千歳には小型二三基、中型五基、第二千歳には小型一八基、中型五四基、第三基地には小型三六基、中型一八基、合わせて一五四基が設置されていた。資料では有蓋掩体壕と無蓋掩体壕の区分は不明だが、昭和二十一年に米陸軍第五航空軍司令部が作図した五〇〇〇分の一千歳陸軍航空基地位置図には有蓋掩体壕は第一基地に小型二九基が記載されている。

小型は戦闘機・練習機用、中型は艦爆などの掩体壕として使われた。掩体壕は誘導路に向かって互い違いに配置され、敵の爆撃や機銃掃射によって複数の航空機が被害を受けないよう工夫されていた。

有蓋掩体壕は盛土で形を造り転圧、コンクリートの浸潤防止のため新聞紙やセメント袋で遮断の後、金網や鉄筋を配し型枠を並べ、逐次コンクリー

トを打設、コンクリートが固まった後、土砂を前後から掘り出し、コンクリートの上や周囲に盛り上げ偽装する方法で築造された。

小樽高商史研究会の『小樽高商の人々』によれば、第一千歳の有蓋掩体壕の築造時期は昭和十八年七月だったことが判る。その年の六月に政府が決めた「学徒動員戦時体制確立要綱」にもとづき小樽高商では七月、全校を三班に分け、八雲、千歳、女満別に飛行場建設のため動員した。

昭和十八年十二月に海軍に入隊した藤井貞雄（後に北海道新聞千歳支局長）は、第一期飛行専修予備学生として第一千歳で特攻訓練を受けた様子を『千歳特攻隊始末記―最後の零戦パイロットたち』に記している。この中で藤井は、「海軍に入隊する年に、勤労奉仕で千歳飛行場の掩体壕を作った」とし、千歳に動員されたのは同期生約二五〇人、宿舎は木造の千歳小学校屋内体操場、スコップとモッコを唯一の工具とし土を掘り、せつせと運んだと述べている。第一千歳にあつては、掩体壕が築造されると同時に、それ以前に誘導路が設定された。

第二千歳、第三千歳の無蓋掩体壕と誘導路は昭和十九年十月時点において、ほぼ敗戦時の状況が設定されていた。五七一設営隊によって昭和二十年の六月上旬から設定された誘導路は、二五〇〇^ノ滑走路北端から伸びる短い一本のみである。また、無蓋掩体壕は西地区に五基程度と第二と第三千歳の間に数基が新たに築造された。

現在も航空自衛隊千歳基地西側に五基程度と民有地に一基の有蓋掩体壕が残されている。民航地区内に残っていた二基の有蓋掩体壕は、平成二年の政府専用機格納庫の建設時と十二年十二月から始まった国有地返還に伴う旧旅客ターミナルビル解体工事に撤去された。陸上自衛隊東千歳駐屯地には五基程度の無蓋掩体壕を第三千歳周辺に見ることができる。

平成十七年五月、市史編さん事業の一環として千歳基地隣接地に残され

ている有蓋掩体壕の地形実測調査を行なった。

正面は半円形のドーム状を呈し、開口部は海軍の有蓋掩体壕に多い爆撃被害を軽減するため主翼と垂直尾翼部分を欠き取り、その他の部分を覆うといったものではなく正面全開の簡易的なものである。

有蓋の厚さは四〇〜四五^{センチ}ほどのコンクリートで造られていた。コンクリートは三回に分けて打設され三層になっていたが、鉄筋は露出していなかった。コンクリートには大きな剥離やクラックは見受けられず、天井にはコンクリート浸潤防止に使ったセメント袋の文字が反転写されていた。

幅一七^{メートル}程の開口部から奥行き七^{メートル}まで五^{メートル}程の高さが保たれ、そこから先、八^{メートル}程は三角状に^{すぼ}み、最深部は開口していた。最深開口部は幅二^{メートル}、高さは二^{メートル}程と推定された。零戦用掩体壕と判断した。

当該掩体壕の先、未舗装の基地外周道路として使われている旧誘導路沿いの左右に有蓋掩体壕の開口部を見ることができる。

特殊地下壕

特殊地下壕とは航空隊と第四十一海軍航空廠（空廠）の地下分散工場（庫）で、丘陵の裾野に掘られた隧道工場（庫）である。

地下分散工場は、支笏火山噴火時の噴出物によって形成された洪積台地を掘削した。火山噴出物層は強固で素掘りであっても十分な強度を保つことができたが、坑木、コンクリート天蓋で補強されていた。

分散工場は敵攻撃の抗堪性を向上させるものであったが、築造目的は連合艦隊の艦艇が徐々に減数して艦隊決戦そのものが現実のものでなくなっていくなか、重要性を増していったのは基地航空部隊であり、飛行場の機能を全力発揮させるため空廠施設と航空隊施設を分散のうえ維持しようとするものであった。

マリアナ諸島から本土爆撃に飛来するB-29の爆撃圏外にある千歳基地

は、三つの航空基地が結ばれた航空要塞であり、海軍にとって北関東以北最大の航空基地だった。そのため基地機能の分散秘匿化が急がれ、昭和十九年の夏ごろから隧道掘削の工事が始まった。

第四十一海軍航空廠分散工場

空廠の分散工場は、緑町から新星にかけての現在の陸上自衛隊北千歳駐屯地の丘陵地帯裾野に造られた。(一)内は、現在の地形目標等である。

昭和二十年に海軍が作図した『第一千歳航空基地位置図 一万分の一』によると緑町・大和地区には支笏湖方面に向かって分解工場、仕上工場、機体工場、組立工場、発動機工場、熱処理鍛錬工場等の分散工場があった。

桂木地区の分散工場には、自力発電所・機体工場・発動機・兵器庫が配置された大規模隧道のほか、発動機試運転工場が四、(高速道路)、材料庫が四、酸素発生工場、可燃物庫があり、新星地区に空廠病舎があった。

大規模隧道は奥行き約五〇メートル五本のほか、奥行きの短い隧道が数本あり、中間と最深部に横連絡路があった。横連絡路の最長は二〇〇メートル弱に及んだ。

旧蘭越小学校裏にあった空廠病舎隧道は奥行き四八メートル幅二メートルから三七メートルの隧道が縦に二五メートル間隔で四本、それを三本ずつ連絡する横隧道が二本のほか、各所に一〇メートルほどの短い横隧道が九本掘られ、最深部横隧道の幅と高さは四メートルあった。病舎の配置などについて不明である。

昭和二十年六月末には分散工場のトランス取り付けが終わり、七月下旬には各科の移転が開始されたという。

分散工場の主要通路はトラックが走れるようになっていて、それぞれ隧道の入口付近には掘削された土砂が高く積みれ爆風避けとされていた。換気が悪く低温でかつ高湿度、停電になると真っ暗になった。

昭和二十一年秋から年末にかけ分散工場の補強用坑木は、米第十一空挺

師団施設部隊が藻岩山に造った札幌スキー場の建設資材に流用された。ジャンプ台、リ्यूージュコースを備えたスキー場は将兵・家族のレクリエーション施設で、堂垣内尚弘(後に北海道知事)が設計監理を担当した。

分散工場は昭和四十年代に青少年の非行の温床となること、崩落の危険があることなどから特殊地下壕埋設工事として入口を土砂で塞がれた。

航空隊分散工場

千歳神社が建立されている通称神社山の忠魂碑(図書館前)周辺の地下には、基地隊の第一受信所と居住区及び工場が造られ連絡通路で結ばれた。また、市街地寄りの切替えられた現在のママチ川に架かる清流橋附近から、山裾に沿い千歳川を潜り、春日町の士官官舎まで隧道が掘られた。隧道は車庫にも用いられた。

青葉公園園路整備の際、壕の上を重機が通過した際に崩落、土中に没した事故が発生したこともあった。このような壕崩落事故に対して千歳市は「立入禁止 この附近には旧防空壕があり一部陥没した穴もあり危険ですから立入らないで下さい 千歳市」という数多くのプレートを立て木に打ち付けて注意を促し、公園施設外には立ち入りが出来ないよう林地を有刺鉄線で囲った。プレートは昭和五十年代中ごろに朽ちた。

ママチ川沿いの清流橋附近から下士官官舎周辺まで建屋である材料庫・倉庫が、市民球場へ向かう道路のあたりから北側丘陵に隧道を掘り糧食庫、真町泉沢大通に沿って兵器庫、機銃弾庫、信管庫、(高速道路)、送信所、魚雷庫、(南長沼用水)、魚雷調整場、魚雷坑、機雷庫があった。

ほかにも、引き込み線の終点にあった地下弾薬庫からママチ川南側に向かい臨空工業団地と向陽台住宅団地の間を流れる泉川東側を通り、泉沢自然の森で右手に折れ臨空公園の北端から道央自動車道のボックスカルバートを通過、基地に戻る作業道のママチ川と泉川に面した丘陵にも分散工場

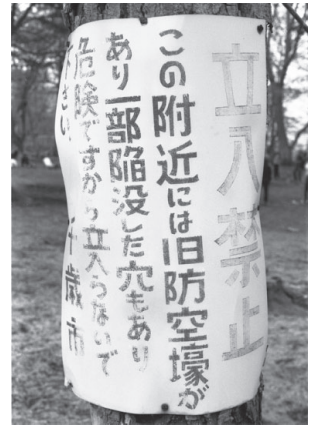


写真6-10 特殊地下壕崩落による「立入禁止」プレート（昭和52年・執筆撮影）

川周辺は特殊爆弾庫坑となっていた。

航空隊分散工場の掘削は二〇一部隊が担当した。

千歳市土地開発公社職員として泉沢開発に携わった市職員前田好通と津坂富士雄は、工事中に現れた分散工場（庫）について「昭和五十五年、臨空工業団地への取り付け道路である泉沢東大通の造成工事中に斜面を崩す際、隧道が現れました。また、五十六年頃には、自然の森附近の真町泉沢大通下り車線で歩道が陥没、モルタルを注入して穴を塞ぎました。さらに、六十一年には泉川に面した斜面にも隧道が現れ、中からは鉄帽も発見されました。この隧道はかなり長く、トラックの出入りも自由なほどの大きさでした。子供の遊び場となつて危ないことから土砂と四〇〇〇袋を超える土嚢で入口を塞ぎ、腐植酸種子吹き付け処理を行ったことを覚えています。これらは弾薬庫の跡といわれていました。南長沼用水附近にあった床面が舗装された隧道も公社で埋めました」と回想した。

昭和二十年の千歳基地

二月十九日、圧倒的戦力の米軍が、空襲と艦砲射撃にさらされた硫黄島^{いおうとう}に上陸を開始した。日本軍守備隊との間に日米戦最大の激戦が行なわれた。日本軍守備隊は坑道陣地で粘り強く持久戦を展開、三月二十五日玉碎した。米軍の損害が日本軍を上回った唯一の地上戦だった。

が構築された。ママチ川沿いに第二受信所、除雪車庫、工場病室、燃爆庫、（高速道路）、兵器調整場、発動機調整場、プロペラ調整場、計器整備場の建屋や隧道、その先に多くの整備科倉庫壕があった。泉

硫黄島の失陥は本土空襲において日本機に邀撃され被弾しサイパン島まで帰島できなくなったB-29の不時着場と、航続距離が短い直掩戦闘機ノースアメリカンP-51ムスタングの基地を与えることとなった。この頃になると、満州の工業地帯も米軍の空襲を受けるようになった。ビルマにあつては三月に日本軍が創設を援助した現地軍・ビルマ国民軍が真の独立のため反旗を翻し、五月には日本軍はラングーンから脱出、モールメンに撤退した。

四月一日、米軍は沖縄本島に上陸、沖縄戦が開始されたが六月二十三日に組織的な抵抗を終えた。

五月七日にはベルリンが陥落、独が無条件降伏したことが伝えられた。このようななか、本土航空隊所在地に対する米軍の空襲が激しくなり、地名を冠した練習航空隊は思ふような訓練が出来なくなってきた。

五月中旬からは海兵七十四期の飛行学生が霞ヶ浦から、七月上旬には大村から茨城・谷田部（現・つくば）に配属になった第一期予備生徒四十数名の約半分と谷田部にいた十三、十四期予備学生出身の少尉からなる四〇名の特攻要員が、操縦訓練のため第一千歳で特攻訓練にあたった。これら操縦訓練部隊は、霞空千歳分遣隊と呼ばれた。

七月には、米軍のB-29爆撃機の発信基地であるサイパン島アスリート飛行場を攻撃する剣作戦^{くさくせん}の一式陸攻が第二千歳に飛来、敗戦まで第三千歳を中心に陸軍空挺部隊である天雷部隊が訓練に励んだ。また、第二千歳には誘導路に面して木造格納庫が二棟あった（現・西地区整備工場区域）が特定のエプロンがなく、掩体壕に分散された飛行機に燃料を供給するため赤く塗装された給油車が配備されていた。

この間の七月十四、十五日、北海道地方は米機動部隊艦載機の空襲を受けた。第一千歳も敵戦闘機の威力偵察を受けた。

第二千歳は四発大攻の連山を飛ばすため、一三〇〇呎から二五〇〇呎への延伸工事が行なわれ、滑走路の周囲には誘導路と掩体壕が前年に引き続いて増設されていた。誘導路と掩体壕は敵からの攻撃に抗堪性を向上させるものであったが、基地航空部隊の拠点である千歳基地飛行場の機能を全力發揮させるため空廠施設と航空隊施設を分散化のうえ維持しようと地下分散工場である特殊地下壕が築造された。

本州方面の空襲が激しくなるにつれ、千歳市街においても川南地区の住宅街に防空壕が造られるようになった。このような状況の中、五月二十八日の海軍記念日にあわせ、千歳駅前歩道に星条旗を描き、通行人に踏ませようとする企画が町民有志によって発案された。奥田二郎著『道政風雲録―戦後十年―』によると、この企画は北海道地方総監府の副参事官によって中止となった。理由は「我々には武士道がある。敵にも騎士道がある。つまらないことをして後で恥をかかぬ方がよい」というものであった。

この企画は、日露戦争奉天会戦の勝利を記念する陸軍記念日である昭和十八年の三月十日、東京・銀座四丁目の三越前と服部時計店前に米英の国旗を歩道に描き、通行人に踏ませ敵愾心をあおった二番煎じであった。

剣作戦天雷部隊

天雷部隊とは、米軍のB-29爆撃機の発信基地であるサイパン島アスリート飛行場（米軍はイスリーと改称）を攻撃する空挺部隊で、マリアナ挺身空挺強襲作戦実施部隊として第三千歳で訓練中に敗戦を迎えた。剣作戦とは一式陸攻でサイパン島に強行着陸、日本爆撃のため燃料と爆弾を満載し車輪への負荷を軽減するためジャッキアップされ列線に並ぶB-29を吸盤付爆薬で爆砕し、活動を封じようとするものだった。隊長は日本陸軍落下傘部隊の創設に参加した挺進第一連隊の園田直陸軍大尉だった（後に厚相、官房長官、外相、衆院副議長を歴任・熊本県選出）。

攻撃は烈作戦と剣作戦に分かれていた。

空挺部隊の剣作戦に先立つ支援作戦として烈作戦があった。機体下面に二〇^リ機銃六丁を装備した空技廠陸上爆撃機「銀河」（P1Y）で駐機しているB-29を銃撃するものであった。

剣作戦に参加する一式陸攻は、少しでも速度を向上させるため張り出し銃座を撤去し、機首偵察員席もジュラルミンで整形した。垂直尾翼には「聖、剣、破、邪、闘、魂、炸、裂、必、成」の一文字と機番が「3-破」のように記され、キャノピー後方にも一文字が書かれた。

第二天雷部隊の一式陸攻は、じゃがいもの白い花が咲いていた七月に第三千歳に到着、訓練が始まった。七〇六空攻撃七〇四が主体で攻撃七〇八からも応援があった。二七機の陣容だった。

一機の一式陸攻に、乗員として操縦士、偵察員、電信員、搭乗員の四名（通常七名）に加え、陸軍空挺隊員一五名が便乗した。

北海道が米機動部隊の空襲を受けた七月十四日、東北地方も大きな被害を受けた。三沢も空襲を受け、同基地にあった剣作戦用の陸攻が壊滅的打撃を受けた。豊田軍令部総長は二十五日、次のように奏上しなければならなかった。

剣作戦ハ今次月明期ニ実施ノ予定ナリシ処七月十四日ノ敵機動部隊ノ三沢方面空襲ニ依リ陸攻一八機ノ被害アリ 百方手段ヲ尽セシモ天候不良及其ノ後敵機動部隊ノ策動等ニ依リ機材ノ準備間ニ合ハザリシヲ以テ 準備訓練ヲ完全ニシ本作戦ノ必成ヲ期スル為 時期月明期間八月十八日以降ニ延期ノ已ムナキニ至レリ

（『戦史叢書93』）

小澤海軍総司令長官（連合艦隊長官）は、各航空基地の被害が甚大であったことから、八月二日各級指揮官に訓示（抜粋）を打電した。

先般敵機動部隊来襲ニ際シ七月十四日三沢基地ニ於テ第七〇六海軍航空隊陸

攻ニ甚大被害アリ 為ニ作戰準備ニ重大支障ヲ招来シ遂ニ作戰延期ノ已ムナキニ立到ラシメ（略）最モ遺憾ナリ

決戦準備間地上ニ於ケル兵器彈藥燃料等ノ損耗ハ戦力ニ及ボス影響極メテ重大ナリ（略）決戦戦力ノ確保ニ努ムルヲ要ス（『戦史叢書93』）

八月六日、広島に原子爆弾が投下された日の夕方から三沢で総合演習が実施され、千歳からは隊長機が参加した。演習のため高松宮殿下、小澤海軍総司令長官、寺岡三航艦長官らが三沢に集まった。次回の出撃は八月十二日を期して決行されることとなった。発信基地は木更津、厚木、茂原の三基地とされた。

天雷部隊員には、パレンバンに降下した陸軍落下傘部隊の生き残りもいた。隊員は編上靴に米軍の野戦服のような大きなポケットがついた機能的な軍装で、武器は銃床が折りたためる装填数三〇発の一〇〇式機関短銃のほか、カンバス（麻布）の弾帯に手榴弾、拳銃、擲弾筒などだった。

第三千歳には、木更津から発進した「彩雲」（中島艦偵C6N）が高度一万三〇〇〇フィートから撮影した航空写真や撃墜したB-29の搭乗員などの証言などをもとに作った八畳ほどの詳細なアスリート飛行場の模型と、千歳周辺の大工を総動員して造らせたという木製の訓練用B-29実大模型が滑走路南端にあった。

園田大尉は八月六日に飛行機で三沢から第三千歳に進出した。部下は列車で来道、十日ごろ集結を終えた。

この作戦には海軍呉鎮守府第一〇一特別陸戦隊（山岡部隊）と横須賀鎮守府第一〇五特別陸戦隊（加賀部隊）も加わった。山岡部隊は三沢で訓練中、加賀部隊は横須賀から列車で第三千歳に移動中敗戦を迎えた。これら部隊は鵬部隊と呼ばれていた。なお、秦郁彦著『八月十五日の空』には「指揮官園田大尉以下三百名 一式陸攻三十機―第二基地」とある。

千歳空襲

昭和二十年六月二十二日、沖縄守備隊が玉砕した直後の二十六日、二十七日、二十九日の三日間、北海道は大型カメラを装備したB-29改造の写真偵察機F-13に侵された。マリアナ諸島から爆装B-29では北関東が飛行限界であったが、爆装荷重がなく増槽装備のF-13は北海道も飛行圏内だった。二十六日に一機が室蘭方面、二十七日に二機が道南一帯、二十九日には千歳を含む道央南部が一機に偵察された。

偵察の目的は、沖縄戦後の米海軍機動部隊の次期攻撃目標である本土太平洋岸の海軍力、軍需関連施設、航空基地の確認、その後の上陸と占領政策の立案にあった。七月までに七回の偵察が確認されている。

日本本土の航空基地を偵察した結果については「分散配置が不十分で密集した明確な攻撃目標となる広い長方形の地域にある」と『米陸海軍合同諜報調査報告書』にある。第一千歳もまさにそうで、飛行場地区の北端西側に施設が密集していた。

『警察沿革史』に偵察飛行の記述がある。

六月二十六日初めての北海道地区空襲警報発令、ついで連日遂に二十九日千歳上空にB-29二機姿を現せり。銀翼を輝かし真昼間旋回して姿を消せり、投弾等なく町民はほっとす

北海道に襲来した米機動部隊は、エセックス級正規空母七隻と軽巡を改造したインディペンデンス級特設空母六隻からなる第三八任務（空母機動）部隊だった。正規空母、特設空母ともに同型艦で艦隊運用に配慮がなされていた。まさに米国の物量を物語る編成だった。空母群は戦艦六隻を含む一五隻の艦隊を伴っていた。

米艦載機は七月十四日未明から、十五日の夕刻まで北海道を空襲した。空襲の目的は、海上交通破壊と沿岸諸目標攻撃にあった。道南沖合を遊弋

し、飛行場、レーダー施設、鉄道施設、青函連絡航路の遮断を目的に連絡船と港湾施設、艦艇、軍需工場などを主要攻撃目標とした。十四日には艦載機延一三九一機などが、釧路、根室、室蘭、苫小牧、小樽、函館方面を空襲し、帯広、計根別、八雲、丘珠の陸軍飛行場を攻撃した。

低空を我が物顔に飛行する米艦載機は、ネイビーブルーの洋上迷彩が施されていた。ずんぐりしたグラマンF6Fヘルキャット艦戦のほか、日本軍からシコルスキーと呼ばれた逆ガル（陽）翼のチャンス・ボートF4U／グッドイヤーFGコルセア艦戦、カーチスSB2Cヘルダイバー急降下爆撃機（艦爆）、グラマンTBCアベンジャー雷撃機（艦攻）だった。いずれの機も星型の二〇〇馬力級エンジンを搭載しパワーを前面に出したような頑丈な機体で、艦戦の速度は六〇〇^キを超えた。

東北地方も大きな被害を受けた。三沢は米機動部隊の空襲を受け、同基地にあった剣作戦用の陸攻が壊滅的打撃を受けた。

十五日には艦載機延約一〇五〇機が、釧路、根室、函館方面を空襲、函館港では青函鉄道連絡船八隻が沈没、座礁等三隻、中破一隻のほか多くの艦船が壊滅的被害を受けた。また、室蘭では戦艦三隻を含む一五隻の艦砲射撃を受け、日本製鉄、日本製鋼所が甚大な被害を受けた。ミズリーなどの戦艦三隻は、一時間の間に一六^{イナ}吋砲弾八六〇発を発射した。

両日の空襲に対し、室蘭、小樽、函館の対空砲火による米軍機の被害は、被撃墜と未帰還で二三機を数えた。米海軍は日本本土空襲で最も激しい対空砲火のひとつだったという。室蘭、小樽、函館の三カ所には七八門の高射砲が備えられていた。室蘭防空隊・高射砲第一四一連隊は六中隊三六門で一萬五〇〇〇発の砲弾を発射した。

七月十七日、最高戦争指導会議において豊田貞次軍需大臣は北海道空襲を総括した。

今次ノ青函連絡船ノ喪失、釜石、室蘭両製鉄所ノ被害ハ二、三ノ中小都市ノ焼失等ト本質ヲ異ニシ戦力増強ニ関スル諸般ノ施策ヲ根本的ニ崩壊セシメルニ至ル重大ナ結果ヲ招来スル俱アリ
（『戦史叢書93』）

続いて、直接的戦力に直結する重要工場、交通施設については、計画的に積極防衛処置を講ずるよう要望した。

海軍総司令長官は七月二十日、「決号作戦生起前ニ於ケル敵機動部隊ノ本土ニ対スル機動空襲並ニ艦砲射撃」に対する作戦要領を発令し、各航空部隊指揮官、警備府部隊指揮官に対して、敵空母並びに艦砲射撃艦艇に対しては好機があれば水中特攻を含む少数精鋭なる兵力をもって奇襲攻撃を行い敵掃滅に努めるよう命じた。

武藤誠は、十五日の米艦載機の千歳上空における動きを『いくさ世の回想』のなかで「米軍機を迎撃」と題して次のように記している。

この日午前九時ごろ、基地の近くの原始林のなかにあった電波探知機隊は、南方海上に航空機の機影を認めた。

直ちに配置についた。地上にいるのは屋上の指揮所にいる我々と、基地の周辺に展開する高射砲陣地部隊のみである。本部勤務員はすべて地下壕に避難した。私は、急いで双眼鏡と例の図表を持ってかけつけた。同時に部下も現れて、持ち場に着いて、静かに敵機の来襲を待ち構えた。（略）下士官の一人が、「敵機現る。機数三十なん機」と忽ちビタリと言い当てて、私に報告する。（略）

米軍機グラマンF6F型戦闘機であった。基地に接近すると、二編隊に分かれたと見るや、先ずその内の一隊の約一〇機が、本部建物に向かって、やや左側から接近してきた。滑走路の近くには高射砲陣地があると判断してそれを避けたのである。（略）

照準をつけて発射準備にかかろうとしている様子がはっきりと見えた。や

がて、操縦士の姿まで見えるほどになり、そのままの体勢で接近してくると思われた。

ロケット弾を発射する直前と見たので指揮所の全員に、「伏せ!!」と、命じようとしたその時、飛行機の真下にある、高射砲が息づまるようななかにあった静寂を破って射撃の轟音を響かせた。砲口から出る白煙が緑の草原の上をスレスレに横に流れて行くのが見えた。これは角度が悪い位置にあったので、至近距離で接近してくる飛行機を正確に照準できず、命中させることが出来なかった。高度はもう500メートルそこそここのところであったが、敵機は、すぐにこれを回避し、左側に、あたかも蝶が舞うかのように旋回して、飛び去っていった。

敵機はF6Fだった。千歳基地への威力偵察を兼ねた飛来だった。霞空千歳分遣隊で特攻訓練に従事していた飛行学生たちは、武藤が指揮をとっていた司令部庁舎前の防空壕で機銃掃射の威嚇を避けた。

『警察沿革史』にも、武藤が体験した敵戦闘機に関しての記述がある。

当町の上空数十機雲の上を飛行札幌に向ふ事ありて、防空壕の中に息をひそむ。四機編隊千歳上空に向はんと南側に顔を見せ、砲台よりの一発に白煙ほつと機銃真々地沢炭焼かまどに爆発して飛去せるのみにて、一発の敵弾も受けずに無傷に終戦となりたり。

十四日の空襲参加機だった空母シヤングリラ搭載、乗員三名のSB2Cが樽前山東ピーク百数十^ミ下・苦小牧側七合目付近に墜落、生き残り搭乗員ラスムッセンが六八日間樽前山麓に潜伏していた話は有名であるが、墜落原因は対空砲火によるものではなく濃霧によるものだった。

両日の空襲において日本機は一機も迎撃に飛び立たなかった。飛び立っても数的に劣勢で戦果は期待できなかったであろう。それよりも苦小牧の海岸に上陸するであろう敵上陸部隊の攻撃に際し、北海道決戦機として

温存するほうが得策であったのだろう。

第五方面軍は米軍の上陸地点について、戦車揚陸艦・上陸用舟艇がビーチングしやすい砂浜が広がる根室から十勝、もしくは苦小牧勇払の海岸と考えていた。内陸に進むと、前者には計根別の飛行場、後者には沼ノ端と千歳の飛行場があった。米軍がいつきに北海道を制圧しようとするならば勇払海岸―千歳飛行場―道都札幌のルートを採用のものと考えられていた。第五方面軍作戦準備要綱には、「東部においては国民抗戦等により持久を策し、軍の全力を挙げて苦小牧平地に決戦を遂行する」とあった。

現在も苦小牧から鵠川の海岸線に水際陣地であった堅固なトーチカ五基が、さらに、海岸から遠い苦小牧オテーネ（高丘）から沼ノ端にかけての丘陵と昭和十八年十月一日に廃線となった沼ノ端―上鵠川間の国鉄富内線（旧金山線）沿線には縦深防御に転換した主抵抗陣地のトーチカ七基が点在する。これらトーチカの前方には戦車壕が掘られ、鵠川地方には今も戦車壕痕が残る。香川正八によると、勇払原野にはトーチカ四七基が築造されたとある（『太平洋戦争当時の勇払平野の防御陣地』）。

北海道空襲で米軍は「この命令において優先される目標は航空機、飛行場、艦船、鉄道施設の順である」と徹底し、上陸部隊への航空攻撃を封じることが最優先としたが、北海道において最も整備された航空基地である第一千歳、第三千歳と建設中の第二千歳に実質的な攻撃を加えていない。千歳の飛行場を無傷で手に入れるという、日本占領後の特別の意図が米軍にあったからであった。

北海道空襲における人員の被害は、公刊戦史によると青函鉄道連絡船攻撃の死亡四一人・負傷七二人、室蘭艦砲射撃（空襲を含む）の死亡三九三人・負傷一六四人、行方不明一五人をはじめ、被害総人員は艦船攻撃等を含め死者は八三五人、負傷者は五八四人、行方不明二〇人とされている。



写真6-11 黒く迷彩塗装された司令部庁舎（現・200ビル）
（Footnote.com 提供）

千歳周辺での一般戦災死没者は、小樽三三人、石狩二四人、苫小牧七人、江別・厚真各四人となっている（市町名・区域は現状）。

十五日夕方、苫小牧柏原に陸軍の新鋭・三菱四式重爆撃機「飛龍」（キ67）が樺太落合からの飛行中、エンジンに被弾し墜落した。当初は、米艦載機の攻撃と考えられていたが、安平の高射砲による誤射だった蓋然性が高い。搭乗員七人中六人が亡くなった。

また、三十一日には苫小牧沖に浮上した米潜水艦が王子製紙苫小牧工場を砲撃した。

米国立公文書館に保存されている昭和二十年九月二十四日米軍撮影の写真によると、この当時、第一千歳の施設群は空襲に備え滑走路とともに迷彩塗装が施されていた。白垂だった三階建ての司令部庁舎は屋上の軍艦旗掲揚塔を含め黒く、共済病院は緑系塗料によって縞模様になり、山形格納庫は暗緑色に塗装されている。市街地においても、昭和十四年に建築され現存する三階建ての山三ふじや渡部商店（現・本町店）がタールを吹き付け黒く迷彩された写真が残る。千歳川上流にある五カ所の王子製紙千歳発電所は昭和十八年に外壁をいち早く防空迷彩とした。

札幌においても防空の観点から二十年六月前後に月寒の北部軍管区司令部防空作戦室や札幌グラントホテルなどがタールによって黒

く塗られた。また、空襲被害を最小限にするため、広小路・南四条通りの原型が建物強制疎開によって形成された。

特別攻撃隊

特攻とは、戦局が日本にとって圧倒的に不利になり、また、航空戦力に大きな開きができるなか、その差を隊員の忠誠心によって打開しようとする戦法であった。しかし、必死を前提とする戦法は兵術以前のなものでもなかったといえる。

昭和二十年に入ると本州の練習航空隊基地は米軍の空襲に晒されるようになり、思うような訓練もできず第一千歳に疎開して訓練を行なう航空隊もあった。千歳に七月上旬に移駐してきたのは、霞ヶ浦航空隊の特攻要員養成を目的とした部隊だった。

霞空千歳分遣隊については藤井貞雄編『千歳特攻隊始末記―最後の零戦パイロットたち』に詳しい。

特攻訓練は七月六日から始まった。初めての飛行機は緊張するものだ。訓練機は二人乗りの零式練戦が多く、中には初期零戦の二一型も混じっていた。尾翼には「カ1525」といって霞空所属機である機体番号が記されていた。あった。

訓練の模様について、教官の立場からそのあらましを聞いてみよう。

関谷卓三（海兵73期）は

千歳基地に着任して直ちに44期飛行学生（海兵74期）の教官として同乗飛行に従事し、特攻隊編成の六月上旬まで続いた。特攻隊の編成が発令され、予備学生、予備生徒出身者が谷田部基地から移動してきた。七月中旬に進出、展開の予定であったので、至急準備に取りかかった。零式練戦を掩体壕のあちこちから引き出し、機体の整備、コンパスの修正、爆装作業を行ったが、大体、どれもこれもガタガタ機で整備に手間がかかった。全部で五十二機あつ

たと記憶している。

訓練は四機編隊で、高度三〇〇〇呎から急降下突入し、地上約五〇〇呎で引き起こし、再び高度をとり、再度急降下を行う訓練であった。降角六〇度という深い角度での突入は、なかなか難しいものであった。訓練コースとして、千歳―小樽―札幌―千歳をよく飛び、特に小樽の山陰から湾内への突入、また海上の超低空飛行など、いま思い出しても胸の高鳴る気持ちであった。(略)

隊長は温厚なベテラン小林巳次大尉。隊員は五十二人であったと記憶している。展開先は、半数が愛媛の松山基地、他の半数が香川の観音寺基地が予定され、私は観音寺組であった。千歳から観音寺への空輸については気流が激しいといわれた鈴鹿越えに備えて、若い気象将校の意見を聞いてチャートにコースを記入し、移動の準備をした。

当時は燃料も窮迫している折りであったが、われわれ特攻訓練用には特別に燃料を補給してもらった。(略)とにかく六月中旬ころ特攻隊が編成され、七月中旬に四国に展開せよーとのことで、飛行機の整備、搭乗員の訓練など、全くの速成であった。

急降下訓練の目標は滑走路交点近くの指揮所付近に張った風向きを示すT型布板、千歳駅のほか千歳神社第一鳥居のそばにあった千歳郵便局であり、小樽港の突入訓練を擬襲訓練といった。

特攻訓練中の霞空所属機の零戦が市街地に墜落する事故が発生し、操縦していた杉村少尉のほか三人が事故の巻き添えで死亡している。

『増補千歳市史』を執筆中だった長見義三は、『北方文芸』一九八一(昭和五十六)年五月号に、特攻訓練中の事故を題材にしたエッセイ「バランス」を寄稿している。事故に関する部分を抜粋する。

それは、終戦直前の七月十日、海軍航空隊千歳基地の訓練中の零戦が、市

街に墜落して次の四人が死亡した事故であった。年齢はいずれも数え年である。

杉村 裕	零戦パイロット	海軍少尉
下田 恵子	女子挺身隊員	二十一歳
佐藤 茂	和男二男	六歳
三川 一郎		十九歳

三川一郎君については特に記録がないが、海軍航空廠物資部で、下田恵子さんとともに犠牲となった点から、男子挺身隊員であったとも考えられる。

下田さんは函館高女の出身、家は七重浜であった。(略)航空廠をやめて郷里に帰ることになり、この日の午前中の作業だけはし、午後被服を更えて物資部に挨拶にきて遭難したと言われている。

墜落の様子についての目撃者の伝えでは、国道を挟んでの農業会の向い側の裏手になる千歳小学校の上を、低空で突っ込んできた飛行機が、木を仆し、電柱を折り、農業会の屋根に突きあたって分解し、破片はかなり飛んで物資部に、翼は「花でん」という海軍目当てのかっぱう店の屋根を破って止まった。(略)

飛行機は農業会のコンクリートの床を破ってぬめりこみ、プロペラは地中に残り、エンジンは抜け出て離れた航空廠物資部まで飛んでいった。

(略)道新の藤井貞雄氏が、終戦の時、特攻隊員として千歳基地にいたことがわかり、戦友であったという杉村少尉のお話をお聞きすることが出来た(引用者注・物資部―現・青少年会館前駐車場、花でん―現・東雲会館裏)。

佐藤和男は農業会の理事で居宅は物資部の裏にあった。茂少年は家の前で遊んでいて事故に遭った。

杉村の通夜は、遺族が参列、事故で停電となった格納庫で蠟燭の灯りのなか海軍葬で行なわれた。杉村が谷田部から千歳に向かう列車の中で綴っ

た手記が、日本戦没学生記念会『きけわだつみのこえ』に残る。

杉村の所属していた霞空分遣隊は八月十三日に第一陣の出撃を下命され、夕刻、総員の「帽振れ」に見送られ千歳駅から列車で四国観音寺に向かう途中、仙台で敗戦を迎えたが、原隊の指示を仰ぐべく再び列車で谷田部に向かった。第一陣以外は、零戦で谷田部に向け十七日午後二時頃に発進、松島基地経由で夕暮れに帰着した。一部は松島に泊まり、翌日、谷田部に到着した。

第一千歳では予備学生・予備生徒のほかに、海軍兵学校七十四期として昭和二十年三月三十日卒業と同時に少尉候補生に任官した飛行学生がいた。四十三期と四十四期の飛行学生ですでに中練教程を終えていた。四月末と五月十四日に霞空から松島、三沢を経由して空技廠九三式中間練習機(K5Y)で第一千歳に移動、司令部庁舎から雪中廊下で結ばれた木造二階建ての兵舎に入った。

六月に入ると、戦闘機要員として零式練戦に同乗を開始した。六月十三日には偵察要員として美幌空に七五名が転属した。七月一日に中練特攻要員四〇名が決まり、十五日に特攻訓練が終了した。この日、飛行学生は少尉に任官した。

八月十三日には艦攻・艦爆要員として四七名が陸路にて百里原空に出発した。当初は三五〇名に迫る大所帯の七十四期飛行学生だったが、敗戦時には二飛行分隊が第一千歳に残っただけとなった。

千歳では予備学生杉村少尉の殉職が民間人を巻き添えにしたことから今も知られるが、敗戦直前には他に少なくとも二件の殉職事故があった。

七月十五日、空廠にて修理を終えた零戦の試験飛行中の事故により岩村舒夫中尉が殉職、さらに十九日には、海兵出の飛行学生本間昭少尉が九三中練で離陸直後にエンジンが停止し失速、地上に激突し殉職した。

引用・参考文献

- 防衛庁戦史室『戦史叢書29 北東方面海軍作戦』朝雲新聞社 一九六九年／同『戦史叢書44 北東方面陸軍作戦(2) 千島・樺太・北海道の防衛』一九七一年／同『戦史叢書19 本土防空』一九六八年／同『戦史叢書93 大本営海軍部聯合艦隊(7) 戦争最終期』一九七六年／武藤 誠『いくさ世の回想』二〇〇二年／守屋憲治『北の翼―千歳航空史―』みやま書房 一九八五年／同『千歳線八十年の歩みを振り返る―小さな私鉄の大きな変身―』『志古津』四号 千歳市 二〇〇六年／日本国有鉄道北海道総局『北海道鉄道百年史中巻』一九八〇年／渡辺洋二『双発戦闘機「屠龍」朝日ソノラマ 一九九三年／酣燈社『日本海軍戦闘機隊』一九七五年／同『日本陸軍戦闘機隊』一九八四年／神埜 努『わが青春の墓標―千歳海軍航空基地』『海軍思い出の記』泊会 一九八九年／大谷敏三・守屋憲治・小田賢一『千歳市所在の戦争遺産(掩体壕) 調査―海軍航空基地掩体壕について―』『志古津』二号 千歳市 二〇〇六年／大湊海軍施設部『第一千歳航空基地位置図 一万分の二』一九四五年／奥田二郎『道政風雲録―戦後十年―』双樹社 一九五六年／服部雅徳『決号作戦準備期の本土防空』・佐藤俊之『B―29本土爆撃への道』歴史群像―太平洋戦争シリーズ60『本土決戦』学習研究社 二〇〇七年／北海道新聞『北海道百年(下) 大正・昭和編』一九六八年／香川正八『太平洋戦争当時の勇払平野の防御陣地』二〇〇一年／藤井貞雄『千歳特攻隊始末記―最後の零戦パイロットたち』一九八四年／小林孝裕『殴りこみ天雷特攻隊出撃せず』『丸』エキストラ版No.87 一九八三年／綿引厚三『戦後六十年の思い出―空挺特攻隊』二〇〇五年／加登川幸太郎『帝国陸軍機甲部隊』白金書房 一九七四年

第四節 通信とマスメディア

千歳電話中継所

千歳に電話中継所が開所したのは、昭和十九（一九四四）年一月一日であった。電話中継所は、長距離回線を使って安定して確実な伝送を行うために機械設備の試験や整備などを行う施設である。その必要性から設置が計画されるきっかけとなったのは、幻の札幌冬季オリンピック開催であった。

十二年六月、第五回冬季オリンピックの開催地が札幌に決定した。札幌市内では「オリンピック祝歌」を歌いながら提灯行列が行われた。当時の『北海タイムス』は、「大地も揺らぐ大行進 歓喜の歌や旗は鳴る 夜空に輝く提灯行列」と、喜びにわき上がる状況を伝えている。その記事の中に、札幌通信局は通信網の充実のため、青森・札幌間の無装荷ケーブル敷設費に約一〇〇〇万円を見込んでいるとある。冬季オリンピックを開催する準備として、東京や海外との通信連絡を完璧にしなければならなかった。

それまでの長距離伝送には「装荷ケーブル」が使用され、回線路の一定間隔ごとにコイルを直列に挿入し通信電流の減退を防ぐというものであったが、七年に「無装荷ケーブル」が開発された。

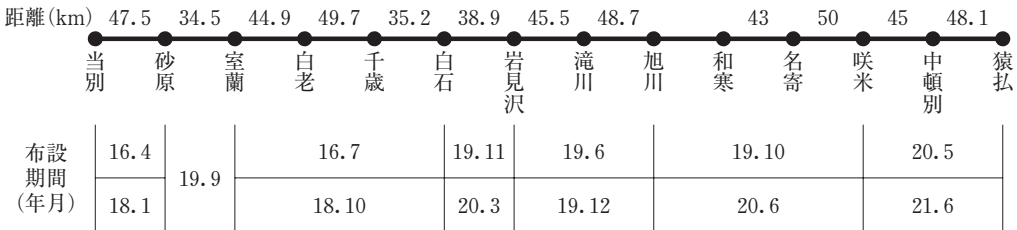


図6-6 無装荷ケーブル敷設線路略図（『北海道の電信電話史』より）

特別な補正機能をもった増幅器を使用して広帯域で多重化回線数を多くでき、反響現象やゆがみを少なくすることができた。九年ごろから長距離市外電話網の基本方式として採用され、十年には東京・ハルビン間で世界初の無装荷ケーブル架設工事が着工、十二年に完成している。

無装荷ケーブルのルートは当別（渡島）―森―室蘭―千歳―札幌に決定したが、国際情勢の悪化により、冬季オリンピックの札幌開催がとりやめとなるとともにケーブルの敷設も幻となった。

しかし通信局は、導線がむき出しの裸線路が風雪によって途絶が繰り返されたこと、また回線の増設と安定を図るため、無装荷ケーブルの採用を要請し続けた。また、軍事的にも確実な通信が必要な情勢となり、十六年五月に工事が着工され、渡島・当別から札幌までの無装荷ケーブルの音声回線が開通したのは十九年五月であった。その中で同年一月に、森、室蘭、白老、千歳の各中継所が開設されたのである。千歳電話中継所の初代所長に就任したのは徳織猛夫であった。

軍事的通信の充実は喫緊となり、札幌以北の無装荷ケーブルも早急に整備が進められたが、途中で終戦を迎えることとなった。

『北海タイムス』と『小樽新聞』

第二次世界大戦前の北海道、とりわけ道央地方における二大新聞といえば『北海タイムス』と『小樽新聞』であろう。札幌に本社を置く『北海タイムス』は、明治二十（一八八七）年創刊の『北海新聞』を前身とする。同紙はまもなく『北海道毎日新聞』と改称し、三十四年には『北門時事』『北門新報』と合同して『北海タイムス』となった。この三紙は、札幌圏を中心に激しい販売競争をくり広げてきたが、一転して合同することになった背景には、三紙の社長が何れも立憲政友会札幌支部役員の要職にあり、「三新聞とも立憲政友会の準機関」（『北海タイムス』明治三十四年九月三

日」という共通点があったためである。

一方の『小樽新聞』は、明治二十四（一八九一）年創刊の『北門新報』が札幌に移転後、二十六年札幌で創刊された雑誌『北海民燈』が翌二十七年小樽に移転して『小樽新聞』が創刊された。戦前の札幌と小樽は、前者が北海道庁を擁する道内の政治・行政の中心であるのに対し、後者は函館と並んで商業・経済の中心としての自負があった。このことから、都市としての性格が異なる札幌と小樽をそれぞれの営業基盤とする『北海タイムス』と『小樽新聞』は、大正期から昭和前期にかけて激しい競争をくり広げた。

両紙の販路拡張競争

両紙の競争は、映画の撮影・巡回、体育競技大会の開催、娯楽行事など販路拡張に繋がるあらゆる事業に及んだ。一例を挙げると、北海タイムス社は大正十五（一九二六）年六月に北海道飛行協会の設立を主張し、社内に航空部を設けて航空機二機を所有したが、これは朝日新聞社・毎日新聞社に次ぐ全国で三番目だった。これに対抗して小樽新聞社も同年六月、北海道定期航空協会の設立を主唱して航空機二機を所有するなど、両紙の対抗意識と競争は熾烈を極めた。

この航空機の導入を巡る両社の対抗には現在の新千歳空港も関係がある。新千歳空港の前身は千歳空港であるが、その原型とも言うべき千歳飛行場が開設されたのは大正十五年のことだった（飛行場建設の詳細については第四章第六節第三項）。小樽新聞社機「北海第一号」が千歳飛行場に着陸したのは大正十五年十月二十一日である。これを追いかけるように昭和二年八月二十六日、北海タイムス社の「北斗二号」が札幌から飛来、着陸した（『増補』）。

大正十年における両紙の発行部数は、『北海タイムス』の九万四一三三

部に対し『小樽新聞』は八万八七五〇部と拮抗していたが（『新札幌市史』通史四）、昭和期に入ると北海タイムス社が徐々に紙数を伸ばしてゆき、小樽新聞社は次第に取り残された。その一因として、大正後期の小樽新聞社が内部対立を起し、分派が『新小樽』を拠点として対抗したためという。同社は昭和十二年に地崎宇三郎を役員として迎え、再建に着手した。翌十三年に道東地方を基盤とする釧路新聞社と提携、十五年には『網走新報』を姉妹紙として道東地方に進出した。十七年三月には本州大手の読売新聞社と資本提携しているが、これは、「小樽新聞は全国紙の一翼である、従って道内は二紙とすべきである」という地崎社長の経営戦略の一端であった（『樽新ジャーナル会編』『あ、樽新』）。

しかし、昭和十六年十二月八日の太平洋戦争の開始は、国内のみならず道内新聞界にも大きな影響を与えた。そのきっかけは開戦直後の十二月十三日、「国家総動員法」第十六条に準拠して公布された「新聞事業令」である。これにより、翌十七年秋までに全国で一千社に及ぶ日刊紙が姿を消した。道内では、北海道庁警察部の主導下に十三年頃から地方新聞の整理統合が進められていたが、道内における新聞合同の最終目標は「道内一紙」の実現にあった。

『北海道新聞』の創刊

昭和十七（一九四二）年三月二十五日、『北海タイムス』など道内有力紙の経営陣は戸塚九一郎道庁長官から「国家ノ要請ニ依リ全道各新聞社ヲ解消シテ新タニ一新聞社ヲ設立スベシ」という指令を受けた。そして、『新函館』・『室蘭日報』・『十勝毎日新聞』・『北見新聞』・『釧路新聞』・『根室新聞』・『網走新報』の七紙に『北海タイムス』と姉妹紙の『旭川タイムス』、『小樽新聞』・『旭川新聞』の四紙が参加、同年十一月一日に『北海道新聞』が創刊された。同社の資本金は五〇万円、札幌市の旧北海タイムス社に本

社を置き、函館・旭川・室蘭・釧路・帯広・野付牛（北見）に新聞発行の支社を置いた。このようにして「北海道、樺太を包含する、一大北方圏を対象として発行する本社紙と、各それぞれの所在地を中心とする、地方を対象として発行する支社紙とのブロック紙形態」（『北海道新聞十年史』）の『北海道新聞』が誕生したのである。

なお、『北海道新聞』が創刊された十七年十一月一日、海軍航空隊の基地が置かれていることもあって、その取材のために千歳支局が設置されたとされている（『市史』）。だが『北海道新聞』創刊時の機構をみると、道内には七支社・一七支局・六通信所が配置され、苫小牧と夕張に支局があるものの千歳には置かれてない。千歳支局の開設は戦後の昭和二十七年四月のことである（『北海道新聞四十年史』）。

参考文献

日本電信電話公社『北海道の電信電話史』一九六四年／郵政省『統通信事業史』第四卷 一九六一年／北海道新聞社『北海道新聞十年史』一九五二年／同『北海道新聞四十年史』一九八三年／樽新ジャーナル会編『あゝ樽新―在りし日を偲ぶ回想集―』一九八八年／『新札幌市史』通史四 一九九七年／功刀真一『北海道樺太の新聞雑誌―その歩みと言論人―』北海道新聞社 一九八五年

第五節 戦時下の教育

第一項 学校教育

国民学校令と軍国教育

満州事変（昭和六年）、日中戦争（昭和十二年）と、戦争の発展拡大と共に教育については、戦時的な色彩を強め、戦時国家の国策に従うものとしての教育が強く打ち出された。

このような状況の中で昭和十二（一九三七）年十二月、総理大臣直属の教育審議会が設置され、教育の刷新・振興に関する重要事項を調査・審議及び建議することになった。

十六年三月、教育審議会の答申に基づき、「小学校令」の改正として、「国民学校令」が公布され、四月一日から施行された。

その第一条には、

国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的練成ヲ為スヲ以テ目的トス

と規定し施行規則第一条では

第一条 国民学校ニ於テハ国民学校令第一条ノ旨趣ニ基キ左記事項ニ留意シテ児童ヲ教育スベシ。

一、教育ニ関スル勅語ノ趣旨ヲ奉体シテ教育ノ全般ニ互リ皇国ノ道ヲ修練セシメ特ニ国体ニ対スル信念ヲ深カラシムベシ

二、国民生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ体得セシメ情操ヲ醇化シ健全ナル心身ノ育成ニカムベシ

三、我が国文化ノ特質ヲ明ナラシムルト共ニ東亜及世界ノ大勢ニ付テ知ラシメ皇国ノ地位ト使命トノ自覚ニ導キ大国民タル資質ヲ啓培スルニカムベシ

と規定している。

文部省は十五年から国民学校用の教科書の編さんを急ぎ「国民学校令」が公布されると同時に、第五期国定教科書を発刊して児童に使用させたが、その内容は忠君愛国の精神、国粹的軍国主義的なものの重視、強靱な心身の練磨、体位向上、軍人援護（軍人と遺族の訪問）、銃後奉公（食糧増産・養畜金属回収・献金・貯蓄等の奨励）等、国家主義的・軍国主義的色彩の強いものであった。

国民学校の修業年限は、国民学校令第三条で初等科六年、高等科二年と規定されたが、十八年十月の閣議決定「教育ニ関スル戦時非常措置方策」によって「義務教育八年制ノ実施ハ当分ノ内之ヲ延期ス」とされ、そのまま終戦に至った。

北海道ではこの閣議決定に基づき、十九年二月、「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ基ツク国民学校教育内容ノ刷新要綱」を定めた。

この要綱では高等科生徒について、勤労の強化（男子）、精神訓練の徹底、国防訓練の強化、生産の増強、職業指導の徹底を要求している。

ついで、二十年三月の閣議決定「決戦教育措置要綱」によって、国民学校高等科以上の生徒は、同年四月から翌年三月三十一日まで学校の授業を止めて、食糧増産、軍需生産、防空防衛等の決戦に緊要な業務に総動員されることになった。

『清流八十年』には当時の状況を次のように書いている。

昭和六年の満州事変以来戦線は拡大し、昭和五年の「宮城遥拝ノ儀ヲ行フ訓辞」の発表と共に教育は益々国粹的色彩を強めて来た。国民精神の高揚、軍事教育の強化等、軍国調の教育が小学校教育の中にも強められてきたのである。教育勅語の御聖旨を奉体する精神が極度に培かれ、童心はひたすら教育勅語暗誦の教育にしばられたのである。

集団登下校、防空避難訓練、防火訓練、神社参拝、軍人遺族宅の慰問、勤労奉仕などが行われた。少年団は大日本青少年団となり、戦況の激化、状況の切迫と共に軍事訓練の徹底化を図ることになった。学校全体としても応召兵の見送り、戦死者英霊の出迎え、海軍航空廠への勤労奉仕、近隣農村への援農、ふきを採取して航空隊への供出、かぼちゃの蒔き付け奉仕などが行われた。

十九年四月には、海軍航空隊防空廠が開設され、航空隊への勤労奉仕のために、全道各地の少年奉仕隊の往来が活発になった。動員や勤労奉仕の多い五年生・六年生と高等科の生徒の授業は、五・六年生は読み書きを重点とする授業、高等科は勤労奉仕のない時に授業を行った。

二十年の学校経営方針では、国防教育の重点として防空訓練、戦技訓練、団体訓練、作業訓練を挙げた。

第二項 青少年教育

青年団体

戦前の青年団体について、文部省が青年の団体を教育の一つの領域として考える方針をとったのは、明治三十八（一九〇五）年十二月の地方長官宛ての通達が最初である。

青年団ニ関スル件

近來各地方ニ於テ風儀ノ矯正、智徳ノ啓発、体格ノ改良其ノ他各種公益事業ノ補助等ヲ目的トスル青年団体ノ設置ヲ見ルニ至レルハ通俗教育上ニ於テモ其ノ効果少カラサルコトト存候処向後益々是等団体ヲ誘導指導シテ一層有効ノモノタラシムルト同時ニ其設ナキ地方ニ対シテハ之ヲ設置セシムル等十分御奨励相成候様致度尚旧來ノ恒例ニ依ル若連中等ノ青年団体ニ対シ適宜指導ヲ加フルニ於テハ容易ニ通俗教育上著大ノ効果ヲ収メ得ヘキ儀ト存候ニ付御

奨励ニ際シテハ特ニ此点ニモ御注意相成候様致度依命此段及通牒候也

大正四（一九一五）年九月には「青年団ノ指導發達ニ関スル件」として内務・文部両省の訓令で、青年団体について積極的な方策を促し、同日付で「青年団体ニ関スル件」として青年団体の設置に関する標準を示した通達が出された。

この訓令と通達によつて青年団体は修養の機関であること、年齢を二〇歳以下に限定したこと、団員以外から指導者を定めたこと、行政単位をもつて青年団体の設置区域としたことなどが明白にされた。

七年五月、第二次の青年団体に關する訓令として「青年団体ノ健全發達ニ資スベキ要望」が出された。

北海道庁は同十一年十二月、青年団体の設置と事業の奨励のために「青年団補助規程」を制定し、女子青年団に対する奨励として十三年三月「処女会補助規程」を定めている。

このような当局の奨励によつて、北海道の青年団体も活動が次第に活発になり、同十年九月、北海道聯合青年団が結成された。

戦前の千歳の青年団活動については資料が乏しいが、開町七〇周年記念誌『躍進千歳の姿』の古老座談会の中で「明治二十七年、長岡文蔵が岩国青年組を組織して盛んに活動していた」という発言がある。岩国青年組の名は長岡の出身地の山口県岩国から取ったものと思われる。

幌加小学校の開校六〇周年記念誌『丘陵』の座談会で「幌加青年団の誕生は明治二十九年頃であった」との発言がある。

東丘小学校沿革史には、「大正七年十二月一日より大正八年三月三十一日まで新嶮淵青年夜学会を開く、入会者五名」とあり、大正七年六月六日に新嶮淵尋常小学校が開校しているので、学校開校の年に青年夜学会が出来る。

『郷土誌ケヌフチ物語』には、

入植早々の明治二十九年頃、青年達集まつて若衆組（若連中）を作った。明治三十三年に簡易教育所が開設され、十二月から翌年の三月までの冬期間に学校の先生を教師として夜学を開いた。大正三年、青年俱樂部を建設した。住民の寄付によるもので、部落の集会所でもあった。この頃になると、千歳村全域に青年団が組織された。嶮淵青年団の活動は、千歳青年団活動のリーダー的存在であった。千歳村青年団は毎年五月に陸上競技大会を各地持ち回りで開催し、毎年冬期には青年弁論大会を開催していたと書いている。

また、駒里小学開校七〇周年記念誌『記念誌・駒里』によれば、

明治四十二年本間徳蔵氏が、阿宇砂里教育所に赴任され、四十四年青年会を創立し、自から会長として夜学で教へ教育の向上を図った、逐次青年会の事業として道路の修理、部落運動会、お祭り等のお手伝い又は部落家庭内の不幸が出来た時、その家庭の仕事のお手伝い等行なつた。（略）学校の冬期間の燃料の薪切、運搬を請負った。

とある。

大正八年の『千歳村ノ状勢』には、「千歳聯合青年会が大正五年九月に創立され、会員三十二名、役員十二名、年額経費一六一円」と書いている。この年に長都で連合青年会の運動会が開催された。

青年訓練所

青年訓練所は、国の臨時教育會議が、学校に兵式教練を取り入れるべきことを建議したことによるし、大正十四（一九二五）年、学校に現役陸軍將校を配属して教練を実施することになったのに続いて、小学校修了後、業務に従事する青少年に対して、兵式訓練施設を設けようとする方策として生まれたものである。

十五年四月には「青年訓練所令」が公布され、青年の教育機関として、実業補修学校（実業補修学校規程に基づく学校）、青年訓練所、青年団体の三者が並立することになった。

青年訓練所は「青年の心身を鍛練して国民たる資質を向上せしむる」を目的として、対象は、おおむね十六歳から二十歳までの男子と定められた。本道では同年五月「青年訓練所準則」、「青年訓練所規程施行細則」が制定された。

訓練科目は教練を主体とし、その他に修身及び公民科・普通学科・職業科があった。青年訓練所の主事は小学校長であり、指導員は小学校訓導、教練指導員は在郷軍人であった。青年訓練所で教練を修了した者に対しては、軍隊の在営年限を約半年（歩兵のみ、その他は六〇日以内）短縮するという特典が与えられた。

『幌加青年学校沿革史』に、

幌加青年訓練所の設立は、大正十五年七月一日で幌加尋常小学校に併置された。入所者の区域は、当初は幌加、竜丑内、新嶮淵、近唐となっていたが、昭和二年に近唐が嶮淵に移った。さらに、昭和九年六月一日に、新嶮淵青年訓練所が出来たので、幌加小学校の校区の青年だけを対象にした。

大正十五年の発足当時は、入所率はよかったが、実際の出席率は悪かった。夏は農繁期で忙しく、冬は出稼ぎに出る者が多かったためである。昭和初期になると戦局も急を要して来たために、青年分団、軍人分会等が連絡を取り合い、入所・出席の奨励を行った結果、ようやく向上を見るに至った。

また、部落の父兄の了解が十分でなかったため、昭和六年から七年に青年訓練所の後援会を結成したかったが、凶作によって農家の不況が甚だしく、昭和八年に入って、部落の有力者間で後援会を作る話が進み、昭和九年三月に後援会が組織された。授業科目は、教練、修身、公民科、普通学科、職業

科であったと書いている。

『郷土誌ケヌフチ物語』には、

大正十五年四月青年訓練所令が発令され、（略）嶮淵尋常高等小学校に青年訓練所が開設され木臼、近唐、嶮淵と三ヶ村の小学校を卒業、二〇歳までの青年が集められ（略）自主的に行われていた冬期間の夜学は訓練所管下で行われ夏季は専ら在郷軍人指導員の軍事教練であった。開設時の主事は、校長の川村北雄、普通指導員志賀一、教練指導員市村政五郎であった。

『長都小学校沿革史』には「大正十五年七月、長都青年訓練所が併置される」と書いている。

また、昭和八（一九三三）年の千歳村事務報告の教育の部に次のように書いている。

本村青年訓練所ハ千歳、長都、嶮淵、幌加ノ四ヶ所ニシテ開設以来九年ヲ閲シ施設等ニ就イテハ遺憾ノ点少ナシトセルモ各主事、指導員ハ熱心ナル訓練ニ依リ其ノ成績逐年向上ヲ示シツツアリ、本年七月二ハ、道庁主催札幌連隊区管内第四回青訓大会ヲ帯広市ニ及十月二ハ広島、恵庭、千歳三村青訓大会ヲ恵庭村ニ開催セラレタルニ付、主事、指導員、青訓生等多数参加セシメ訓練上多大ノ効果ヲ挙げタリ。

尚十一月二十四日二十五日二ハ、千歳、嶮淵両校ニ於テ、札幌連隊区司令官加藤大佐ヨリ各訓練所ノ教練査閲アリ、其ノ結果成績良好ト由ニテ入所、出席等ニ対シ各関係者ト協力督励ニ努メツツアリ。各訓練所別生徒其ノ他左ノ如シ

表 6－8 昭和8年の千歳村青年訓練所

訓練所名	主事	指導員	教練指導員	入所者	終了見込者	退所者
千歳青年訓練所	一	三	二	三三	二九	四
長都青年訓練所	一	二	一	二〇	二〇	
嶮淵青年訓練所	一	三	二	二六	二四	二
幌加青年訓練所	一	三	二	三〇	二六	四
合計	四	一一	七	一〇九	九九	一〇

手当ては主事が年五〇円、指導員は年三〇円であり各訓練所には後援会があった。

青年学校

青年訓練所と実業補習学校という、青少年を対象とする二重の教育制度の難点を解消し、青年教育を推進するために誕生したのが青年学校である。文部省と陸軍省が協力して、男女青少年の教育方策を樹立し、昭和十（一九三五）年四月、「青年学校令」が公布された。

第一条に「男女青年ニ対シ其ノ心身ヲ鍛練シ徳性ヲ涵養スルト共ニ職業及實際生活ニ須要ナル知識技能ヲ授ケ以テ国民タル資質ヲ向上セシムルヲ目的トスル」と規定し、市町村のほか公共団体、私人も青年学校を設置出来る」と定めた。

青年学校は、普通科（二年）・本科（男子五年、女子三年、土地の状況により男子四年、女子二年）これに研究科（一年以上）と専修科があった。

小学校卒業者は普通科に、高等小学校卒業者は本科に入学した。学科は、普通科男子が修身及び公民科、普通学科、職業科、体操科、女子は、男子の学科の他に家事及び裁縫科となっていた。本科男子では、普通科男子の学科のうち、体操科が教練科となっていた。

十四年四月、「青年学校令」が改正され、満一二歳以上満一九歳までの男子に義務制が実施されることになった。

表 6－9 昭和12年の千歳村内の青年学校

校 名	教員数	生徒数		合計
		男	女	
千歳青年学校	七	四四	三〇	七四
嶮淵青年学校	二	三四	一九	五三
長都青年学校	五	三二	二七	五九
木臼青年学校	五	三四	三三	六七
幌加青年学校	四	四〇	三八	七八
新嶮淵青年学校	四	二二	二三	四四
合 計	二七	二〇五	一七〇	三七五

「昭和十六年千歳村事務報告」に次のように書いている。

青年学校ノ拡張整備ニ関シテハ、時局下特ニ緊要ナルコトヲ痛感スル次第ナルモ、財政ノ関係上之ガ施設ニ萬全ヲ期スルニ能ハズト雖モ本年ニ於テハ教職員、指導員ノ手当一斉ノ増額ヲ図ル等逐年整備ニ努メツツアリ。

不完備ナル施設ニモ不拘教職員、指導員各位ノ熱誠ナル努力ニ依リ、著シク成績ヲ向上シツツアルハ感謝ニ堪エザル処ナリ。

特ニ本年五月二十二日、青年訓練実施十五周年ヲ記念シ、村内各青年学校代表ノ御親閲ヲ拝受シタルコトハ、実ニ無上ノ光栄トスル所ナリ。

時局ノ進展ニ伴ヒ、青少年団組織ノ拡充強化ハ必然要望セラレル処ニシテ、政府ニ於テハ、昭和十六年三月之ガ為、青年団組織ノ改組ヲ断行シ、従来ノ男女青年団以下ニ、国民学校初等科三年以上ノ児童ヲモ加ヘ青少年団ト改称シ、之ガ強化ヲ図ラレタリ。

本村ニ於テモ、神饌田ノ経営、全村青少年団大会開催、興亜青年養成道場

青年学校の教育内容については「青年学校教授及訓練科目要旨」に示されているが、戦局を反映し強調された事項は強靱な体力の練磨、勤労精神の高揚による積極的生産活動、軍事訓練の強化の三点であった。

十二年の村内の青年学校の状況は次のとおりである。

ノ開設、青少年団貯蓄運動ノ実施等、国家ノ施策ニ呼応シ、之ガ青少年ノ修養、身心ノ鍛練並ニ集団の実践鍛練ニ遺憾ナキヲ期シ、益々皇国青少年不拔ノ国民的練成ニ努メツツアリ。

特ニ、戦時下喫緊ノ要務タル国民食糧増産ノ確保、飼料、肥料、軍需農産物ノ増産ノ為、青年勤労総動員運動ヲ実施シタルニ、青少年団役員単位各位ノ献身的努力ニ依リ、良好ナル成績ヲ挙げ得タルハ、実ニ感謝ニ堪ヘザル処ナリ

昭和十六年十二月に太平洋戦争に突入し、昭和十七年当時の青年学校は次のとおりである。

表 6－10 昭和17年の千歳町内の青年学校

青年学校名	男	女	計	校長	助教諭	指導員	計
千歳青年学校	一一六	一八	一三四	一	三	五	九
千歳鉾山青年学校	一〇一	三六	一三七	一	五	五	一一
嶮淵青年学校	四六	三三	七九	一		五	六
長都青年学校	五〇	一六	六六	一	一	三	五
幌加青年学校	三四	九	四三	一		三	四
新嶮淵青年学校	二三	二〇	四三	一		三	四
木臼青年学校	二〇	二五	四五	一		二	三
烏柵舞青年学校	九	六	一五	一	一	三	五
合 計	三九九	一六三	五六二	八	一〇	二九	四七

昭和十八年六月の第二回町会に当時の岡本町長は次のような青年学校統合案を提出した。

現下ノ諸状勢ヨリ考察シ、青年教育ノ完備ヲ図ルハ最モ喫緊事タル処、今般其ノ筋ヨリ之レガ充実ヲ期スル為、左記ノ通り青年学校ヲ統合セシムルヲ要スル旨通牒アリタリ。依ツテ茲ニ千歳町会ニ対シ、右統合ノ方策ニ付諮問ス

記

表 6－11 統合前後の青年学校

統合後の学校名	統合セラルベキ青年学校	文教場トナスベキ青年学校
千歳青年学校	木臼、長都青年学校	文教場トナスベキ青年学校
幌加青年学校	嶮淵、新嶮淵青年学校	烏柵舞、千歳鉾山青年学校

統合案は可決され、千歳と幌加に集約し、烏柵舞と千歳鉾山は分教場となった。

参考文献

『清流八十年』（千歳小学校開校八〇年記念誌）一九五八年／『長都小学校沿革史』一九二六年／『郷土誌ケヌフチ物語』（泉郷開基一〇〇周年記念誌）一九九二年／『丘陵（幌加小学校開校六〇年記念誌）』一九五九年／『幌加青年学校沿革史』一九七〇年／『記念誌・駒里』（駒里開基九〇周年・駒里小学校開校七〇周年記念誌）一九七六年／財団法人北海道青年会館『北海道青年団史』二〇〇二年／北海道青年団体協議会『北海道の青年団運動』一九六八年